ふるさと吉田

歴史探訪
今・むかし

編集　「歴史探訪 ふるさと吉田」編集委員会
発行　吉田地区地域コミュニティ運営協議会

目　次
CONTENTS

○　発刊にあたり ……… 編集委員長　八谷　茂樹

1　吉田の地図

（1）吉田の位置 …… 1

（2）吉田名所マップ …… 2

（3）江戸期　国絵図

①　慶長（けいちょう）国絵図 …… 3

②　正保（しょうほう）国絵図 …… 4

③　元禄（げんろく）国絵図 …… 5

（4）江戸期　郷図

①　藤津郡吉田郷図―1 …… 6

②　藤津郡吉田郷図―2 …… 7

2　吉田地区の遺跡 …… 8

3　吉田村　小字一覧 …… 9～11

4　吉田村の推移について …… 12～13

5　**ふるさと吉田　歴史探訪**

（1）　東吉田　編 …… 14～18

（2）　春　日　編 …… 19～24

（3）　上吉田　編 …… 25～28

（4）　峰川原　編 …… 29～32

（5）　両　岩　編 …… 33～38

（6）　西川内　編 …… 39～42

（7）　皿　屋　編 …… 43～50

（8）　納戸料　編 …… 51～54

（9）　西吉田　編 …… 55～58

（10）真上吉田　編 …… 59～63

（11）下吉田　編　（番外編）…… 64

6　吉田の思い出を語る …… 65～71

7　吉田の昔話（民話） …… 72～75

8　ふるさと吉田　思い出の写真 …… 76～84

（1）ふるさと吉田の風景

（2）おくんち＆浮立

（3）吉田小学校と吉田中学校

（4）思い出の風景・できごと

9　吉田の今　あれこれ …… 85～89

（1）吉田地区地域コミュニティ運営協議会

（2）ヨッシー号の運用

（3）吉田地区の人口構成

（4）吉田地区で活躍する人々（団体）

10　「ふるさと吉田」年表 …… 90～97

11　まとめにかえて …… 98

12　編集後記 …… 99

13　参考文献 …… 100

表紙（資料）

「藤津郡吉田郷図」　嘉永６年（１８５３年）　公益財団法人鍋島報效会／佐賀県立図書館寄託

発刊にあたり

小誌の発刊にあたり、編集委員長として関わり代表してご挨拶を申し上げます。

この度、吉田地区地域コミュニティ運営協議会では、吉田地区の歴史や文化を末永く継承するため、これまでに発行した情報誌「歴史探訪 ふるさと吉田」(創刊号～第10号)の再編集を行い、『ふるさと吉田 歴史探訪 今・むかし』を発刊することになりました。

調査と執筆は、約５年間に亘り、各地区の皆様方の協力を得ながら月１回の編集会議と現地調査を進めました。しかし、調査の過程では困難にも出会いました。編集委員では、石造物の風化により制作年代及び仏像・観音像・地蔵菩薩像等の詳しい名称の判別や十分な解釈ができないこともありました。

そこで、これらの解決のために、民俗学に造詣の深い金子信二氏(嬉野市文化財保護審議会委員)や嬉野市「市史編纂室」の槐原慎二氏、木村都志枝氏の協力と助言を仰いで纏めることができたことに深く感謝しております。

歴史探訪を通して振り返ると、旧跡や大事に祀られている石祠や像が多数残存していること、先人が苦労された事実を知ることができたこと、更には、貴重な発見に巡り合えたことなど、吉田地区の伝統や魅力を強く感じることができました。

調査では、一般的に「薬師さん」や「観音さん」、「おじゃっさん」等と呼ばれているお堂には、仏像１体の場合が多く、稀に３～５体の場合もありました。また、寄進された仏像が何体も収められているお堂や、散在していた仏像や石碑(祠)類を一か所に集めて祀られている所もありました。

神社の境内には、各種の神を祀る石碑(祠)や鳥居が建立されており、長い歴史の中で地域に根ざした信仰が脈々と受け継がれていることを知ることができました。

また、総集編の資料作成では、気持ちよく執筆していただいた寄稿文や皿屋区写真展資料の提供など、人と人のつながりや温かみを感じることができました。

一方、地区名の由来や古来の民話的なものなど、既刊の資料以外の新たなものを掘り起こすことについては、後進に譲りたいと思います。

なお、これまで各家庭に配布された10号までの内容は、地区によっては大幅な修正、追加等を行っておりますことを申し添えておきます。

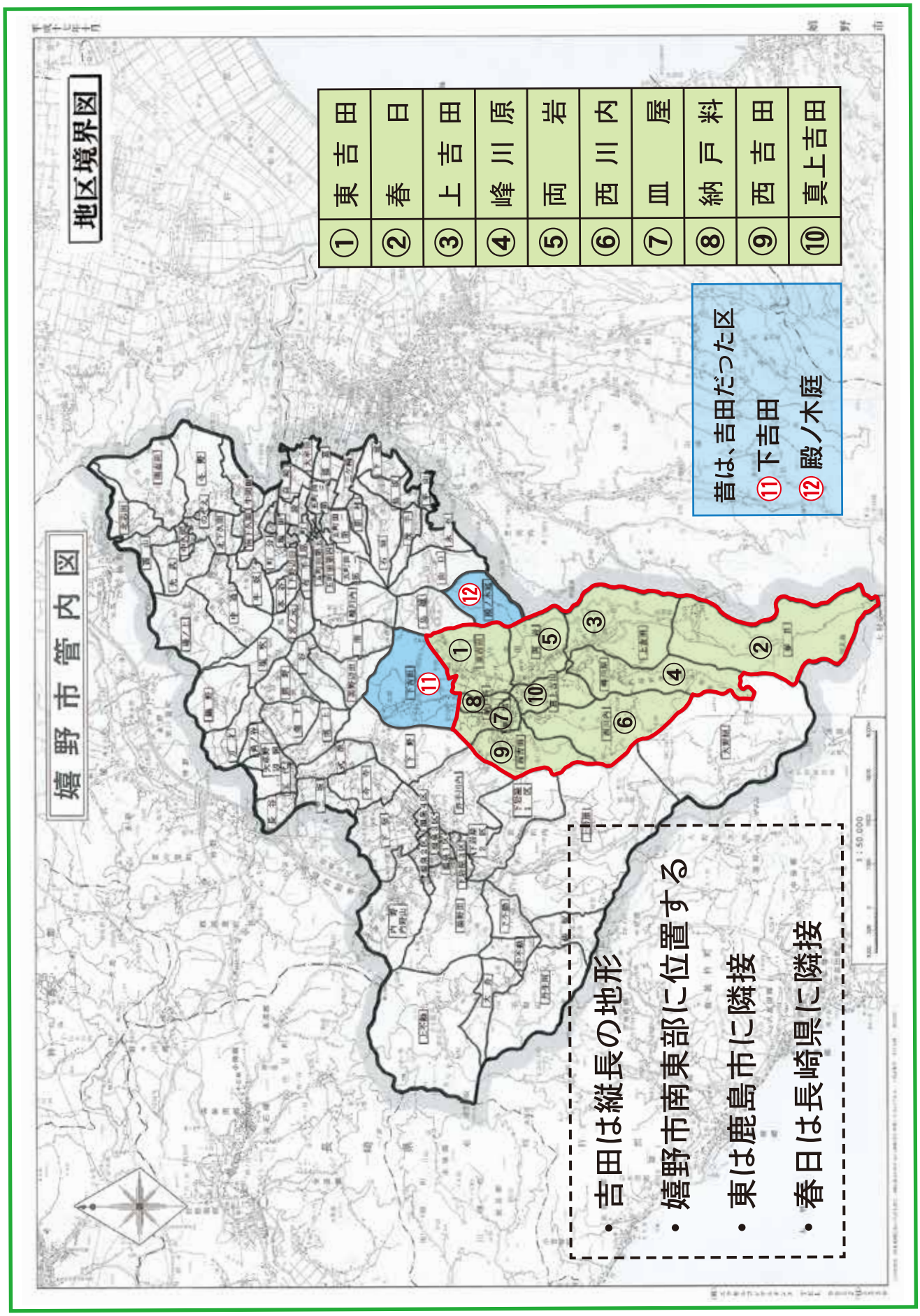
最後になりますが、吉田地区に関わる方々には、これを機会に、残されている多くの建造物や旧跡を通して「ふるさと吉田」の歴史を振り返り、吉田地区の伝統と魅力を感じ取っていただければ幸いです。

令和３年７月

「歴史探訪 ふるさと吉田」編集委員会委員長　八谷 茂樹（春日出身）

1 吉田の地図

（1）吉田の位置



（2）吉田名所マップ

◎ 吉田地区の名所・旧跡です。ぜひ訪れて、吉田の歴史や魅力に触れてください。

（3）江戸期の国絵図

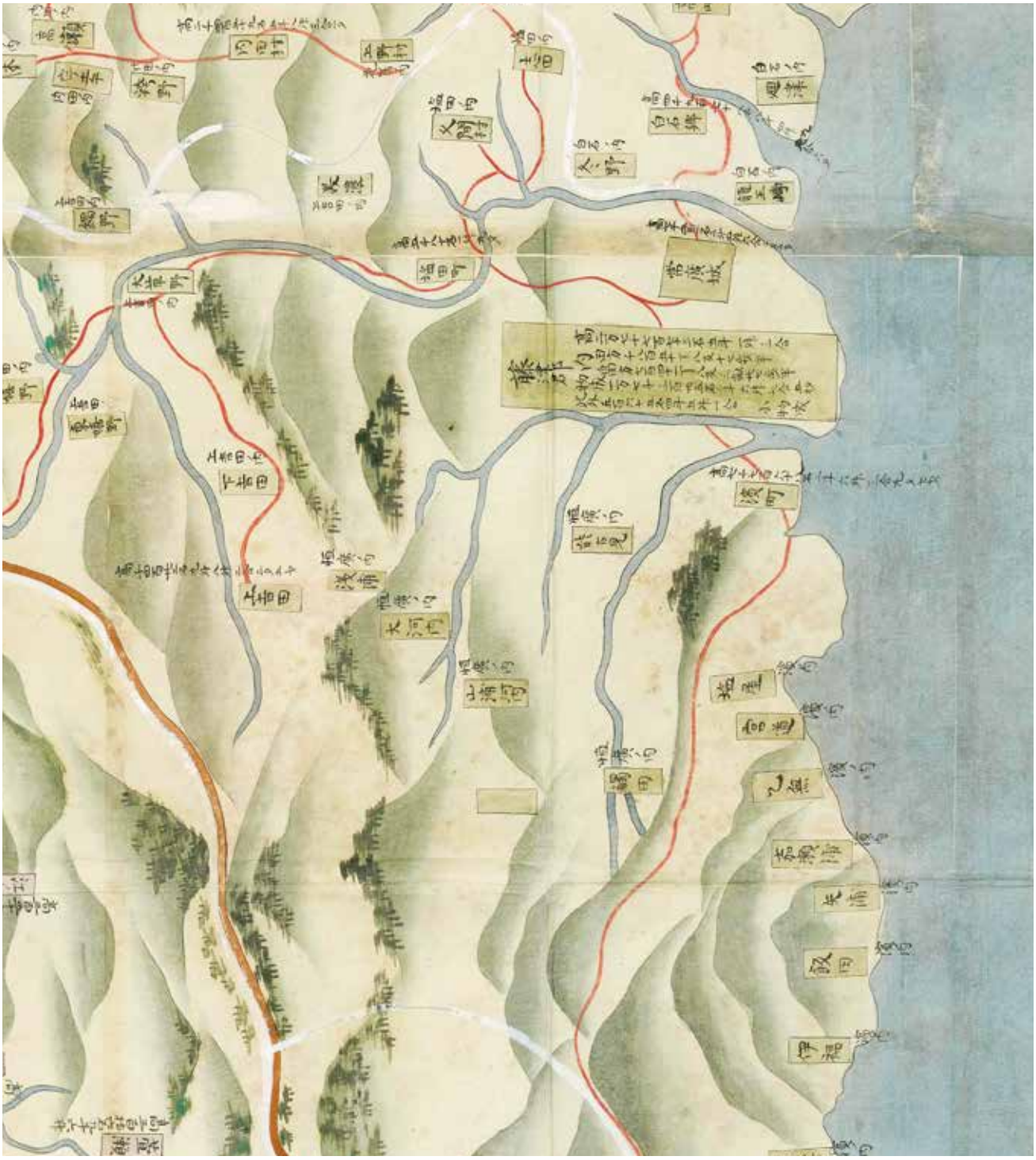
徳川幕府は、全国の諸大名の領地と寺社領の分布・石高に関する調査のため、国絵図・郷図・郷帳を作成させました。以下５枚の「公益財団法人鍋島報效会、佐賀県立図書館寄託」の史料から江戸期の吉田郷の様子を見てみます。

①　慶長国絵図　慶長 10年（1605）

○吉田村は、「上吉田」の地名が書かれ石高が読み取れます。「下吉田」「東嬉野」「鍋野」「西嬉野」「大草野」「美濃」の地名には、「上吉田ノ内」とあります。

○「藤津郡」の石高が書かれ、「二万七千七百七十三石五斗一升二合」とあります。

○道路（赤色）、河川（青色）、郡境界（白色）、藩境界（茶色）で示されます。



公益財団法人鍋島報效会、佐賀県立図書館寄託　慶長国絵図

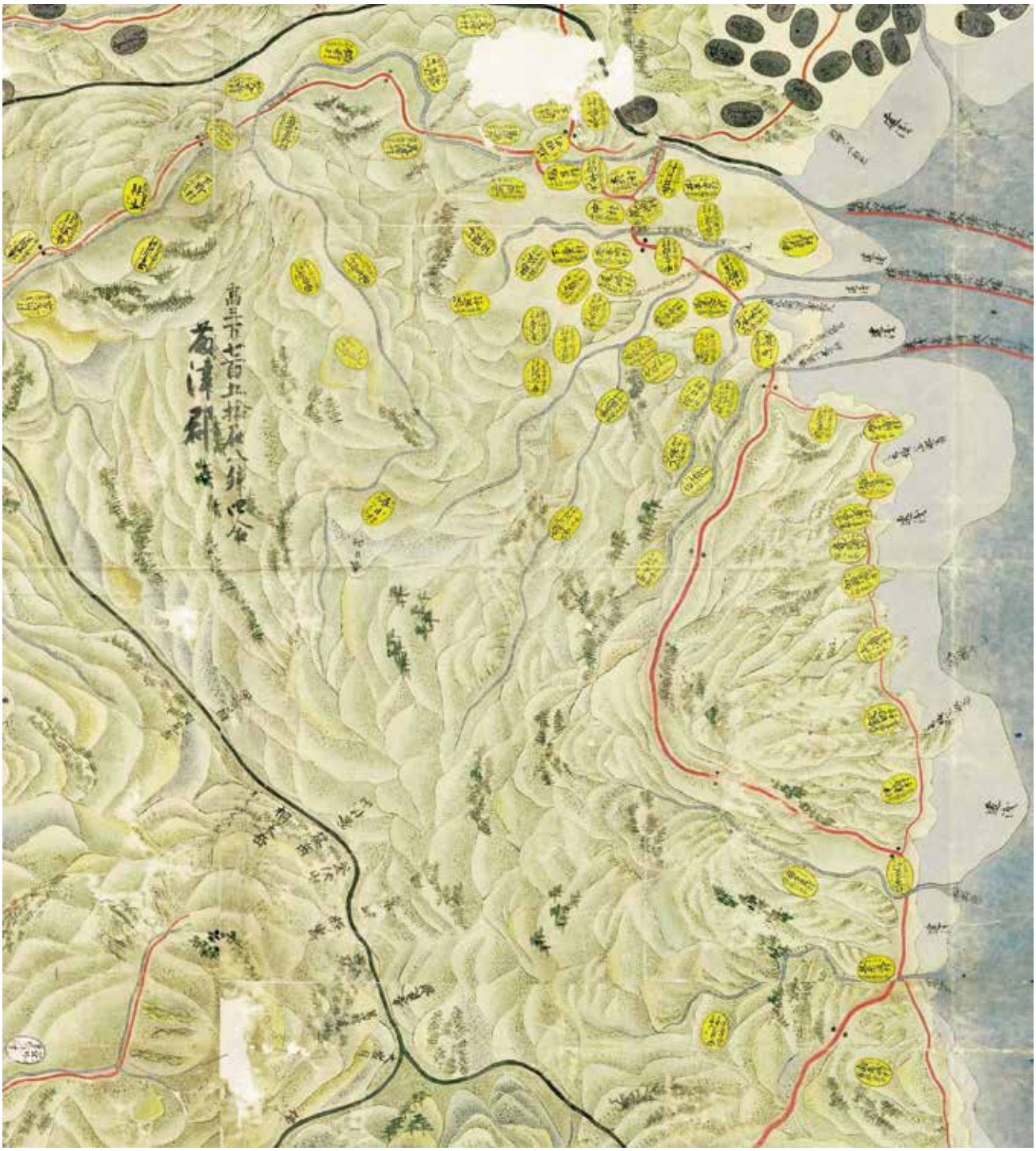
② 正保国絵図（正保肥前国絵図）　　正保４年（1647）完成

〇江戸幕府は、正保元年（1645）諸大名に対して国絵図・郷帳・城絵図の作成を命じました。
〇絵図には、「西吉田村」「東吉田村」「春日村」「上吉田村」の地名と石高が記されています。
〇河川（青）、道路（茶色）、郡境界（黒色）、道路の一里塚（：印）も描かれています。
〇春日山、多良嶽、経ヶ嶽、国見嶽　などの山の名前が記されています。
〇有明海海岸沿いの地形が詳しく描かれ、入り江や航路が表記されています。

公益財団法人鍋島報效会／佐賀県立図書館寄託　正保国絵図（正保肥前国絵図）

③　元禄国絵図（げんろくくにえず）　　元禄15年（1702）完成

○幕府は、元禄９年(1696)諸大名に、地図及び郷村石高帳の作成を命じたとされます。
○吉田では、「西吉田村」「東吉田村」「春日村」「上吉田村」の地名と石高が書かれています。
○「藤津郡」の石高は、「高三万七百五拾石八升四合」とされ、藤津郡だった嬉野、塩田、鹿島、太良の各地の村名と石高、川や道路が記されています。
○有明海には、干満でできる遠浅のことや入り江の状況等が書かれています。
○春日山、多良嶽、篠岳、経ノ嵩などの山々の名前が表記されています。（山名は原文のまま）
○道路（茶色）、河川（青色）、郡境界（黒色）、道路の一里塚（：印）で示されます。
○鹿島・太良には、海岸線に沿った道のほか、浜町からの「多良海道」が記されています。
多良海道は、佐賀藩主らが長崎警備に向かうために行き来したとされる道です。



公益財団法人鍋島報效会／佐賀県立図書館寄託　元禄国絵図（げんろくくにえず）

（4）江戸期　郷図

江戸幕府は、郷図（各藩の絵図）を作成させ、それを基に国絵図を作成しました。

①　藤津郡吉田郷図－1　　嘉永６年（1853）

○「上吉田村」「岩ノ下」「赤瀬」「横岳」「川内」「西川内村」「古田」等の地名が見えます。

○川の流れや道路、家々の所在等が詳細に描かれています。

○拓けた土地と山林野は、色により区別されているようです。石高表記はありません。

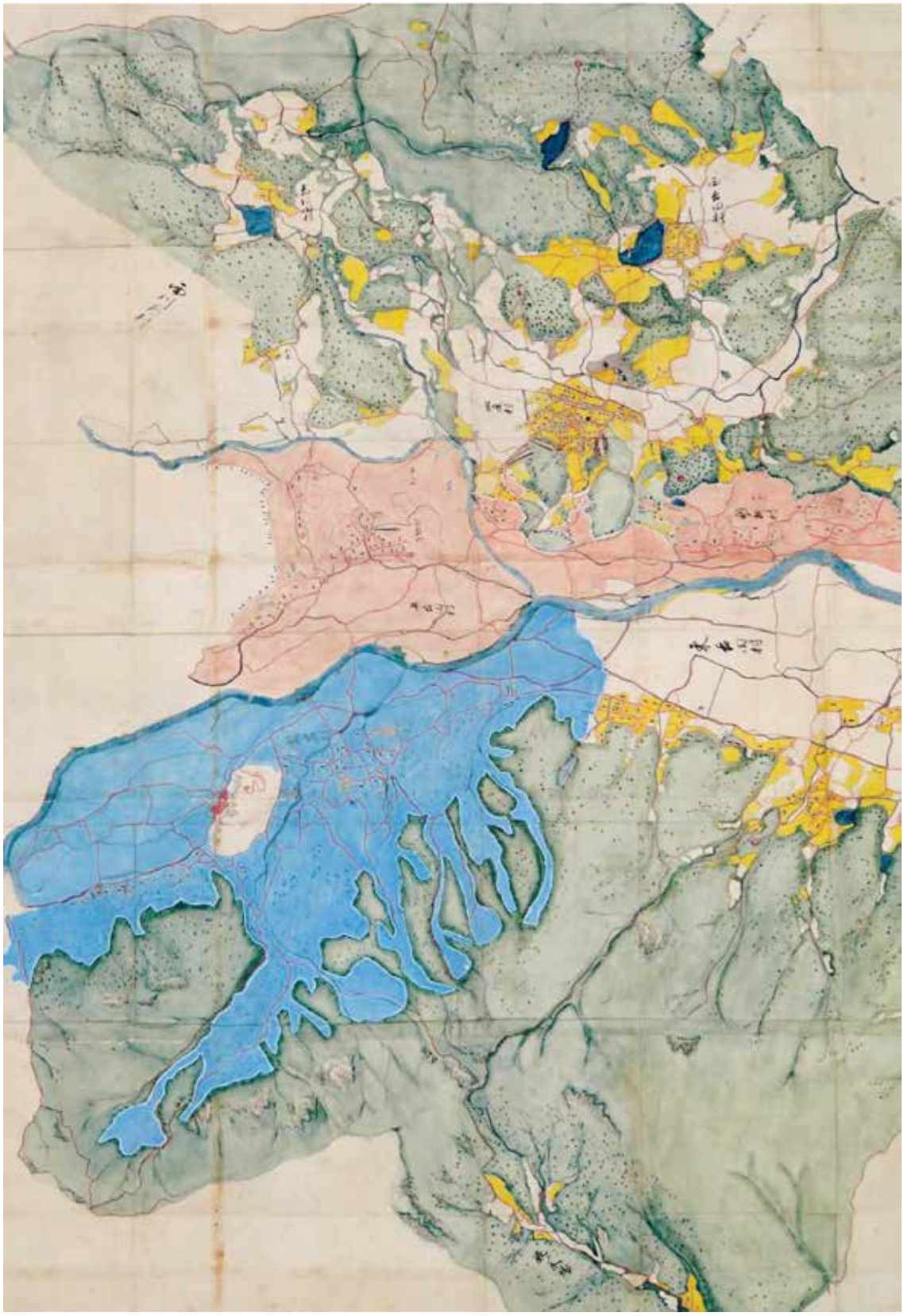
公益財団法人鍋島報效会／佐賀県立図書館寄託　藤津郡吉田郷図

②　藤津郡吉田郷図－２

○「西吉田村」「赤仁田村」「皿屋村」「西川内村」「諸岩村」「東吉田村」「納戸料村」「殿ノ木庭」等の地名があり、石高表記はありません。

○川（青色）、道路（茶色）、堤〈湯岳堤、権現堤、赤仁田堤〉（藍色）が見えます。

○白岩山や皿屋村の「登り窯」、家々の所在が描かれています。白岩山の西川内側に「隼人・」の文字が見え、鍋島傅兵衛の屋敷等があったとも考えられます。



公益財団法人鍋島報效会／佐賀県立図書館寄託　藤津郡吉田郷図

2 吉田地区の遺跡（いせき）

佐賀県による調査によれば、吉田地区にも多数の遺跡が確認されています。

時代	遺跡名	所在地	地区名	備考
①旧石器時代	確認されていません。			
②縄文時代	田中遺跡	大字吉田字田中	東吉田	散布地
	七曲遺跡	大字吉田字七曲	東吉田	散布地
	祇園遺跡	大字吉田字祇園	皿屋	散布地
	斧研（おのとぎ）遺跡	大字吉田字斧研	両岩	散布地
	白岩遺跡	大字吉田字白岩	真上吉田	散布地
	上峯遺跡	大字吉田字上峯	峰川原	散布地
	西久保遺跡	大字吉田字西久保	春日	散布地
	打越遺跡	大字吉田字打越、中尾立	春日	散布地
③弥生時代	田中遺跡	大字吉田字田中	東吉田	散布地
④古墳時代	六反田遺跡	大字吉田字六反田	東吉田	散布地
⑤奈良・平安	確認されていません。			
⑥中世（鎌倉時代）（室町時代）	無量寺古墓	大字吉田字無量寺	東吉田	墳墓
	吉田城跡	大字吉田字無量寺	東吉田	城館跡
	七曲城跡	大字吉田字七曲	東吉田	城館跡
	田中遺跡	大字吉田字田中	東吉田	散布地
	宮ノ前城塞跡	大字吉田字掘切	両岩	城館跡・墳墓
	斧研（おのとぎ）遺跡	大字吉田字斧研	両岩	墳墓
	上春日城塞跡	大字吉田字打越	春日	城館跡
	館（やかた）遺跡	大字吉田字館	両岩	散布地
	光厳寺跡	大字吉田字寺辺田	真上吉田	社寺跡
⑦近世～（江戸時代）	宇留戸古墓	大字吉田字岩倍	東吉田	墳墓
	石塔塚	大字吉田字田中	東吉田	墳墓
	円通寺跡	大字吉田字吉野	真上吉田	社寺跡
	吉田１号窯跡遺跡	大字吉田字白岩	真上吉田	集落跡
	吉田１号窯跡	大字吉田字白岩	真上吉田	陶磁器窯跡
	吉田２号窯跡遺跡	大字吉田字瓢箪	皿屋	集落跡
	吉田２号窯跡	大字吉田字瓢箪	皿屋	陶磁器窯跡
	祇園幽軒遺跡	大字吉田字祇園	皿屋	集落跡
	斧研遺跡	大字吉田字斧研	両岩	集落跡
	森遺跡	大字吉田字森	納戸料	集落跡
	吉田皿山代官所跡	大字吉田字皿屋	皿屋	役所跡
	中峯古墓	大字吉田字中峯	峰川原	墳墓
⑧近代～				

〈資料について〉
- ○吉田及び嬉野町全体でも、縄文時代以前の旧石器時代の遺跡は見つかっていません。
- ○吉田では、縄文時代の遺跡が８カ所、弥生時代の遺跡が１カ所確認されています。
- ○吉田では、古墳時代の遺跡は１カ所確認されています。
- ○奈良・平安時代の遺跡は明確にはされていませんが、平安時代に造られたと思われる仏像などが存在し、文化財として大事にされています。（両岩神社や永寿寺に残る像 など）
- ○中世（鎌倉・室町時代）の遺跡は、吉田城などの城館跡や墳墓が目立ちます。
- ○近世は、窯業の歴史を伝える窯跡や集落跡が発掘され、報告書も作成されています。
- ○「散布地」は、遺物が発見された場所や範囲を言い、発掘されていない場合もあります。

※2010年の資料には、新たに追加された遺跡もあります。（上春日城塞跡 など）
※時代区分の名称については、2010年版資料に準じて用いました。

出典：①『佐賀県遺跡地図』（藤津地区）（1983年）・・・・・・・・・佐賀県教育委員会編
②『佐賀県遺跡地図』（藤津地区）（2010年）・・・・・・・・・佐賀県教育委員会編

3 吉田村　小字一覧

書名：『角川日本地名大辞典（佐賀県）』
出典：東京大学史料編纂室所蔵史料
「佐賀県各町村字小字取調書」（明治１５年頃）

【東吉田】　76 カ所

穴ヶ坂、猪ヶ倉、一王丸、一ノ谷、一本松、一本松籠、猪ノ木谷、岩瀬戸、岩倍、印役、牛喰、内ノ木庭、宇留戸、えんしゅう谷、大十、扇平、大木庭、大平、岡、尾ノ上、かげ平、かふと岩、上万属、川原、くえの坂、こしき岩、五本松、五本松籠、こを平、三本谷、三本松、三本松籠、四本松、四本松籠、下万属、庄、小十、城山、杉ノ尾、高尾、竹ノ下、駄留、田中、谷口、狸尾、つつし原、天狗岩、遠長、堂ノ上、中村、七曲、二本谷、荷土谷、はざこ、畑田、八ノ久保、はなさき、日向平、樋口、平野、広がい、平原、深坂、平内、堀切、本川内、本三郎、本谷、丸山、水ノ元、梅ケ谷、無量寺、矢切田、柳坂、矢平、六反田

【両岩】　44 カ所

荒平、池際、石原竹、一ノ谷、岩屋口、牛山、宇戸谷、江下渡せ、大谷、笠頭、尾ノ上、川原田、合ノ元、越掛、下ヶ棚、笹谷、三ノ谷、尻無尾、斧研、館、苣の木、常広、鞁石、寺田、中園、西構、ニノ谷、馬場、樋口、外田、堀切、堀切谷、本越、前川、万年、味噌岩、水口、みなげ岩、椋ノ木谷、両岩、山道、夜打平、横道、鎧田

【上吉田(岩ノ下)】　41 カ所

朝畑、雨ノ坂、八頭、一本松、井手上、井ほー原、岩ノ下、岩屋、鬼童丸、榎坂、大平、川原田、くまで、熊焼、皮後岩、小坂、しみつ谷、十兵エ、十郎丸、正津、竹ノ坂、谷合、多布木原、駄防、太郎瀬、丁子岩、苣の木、中坂、長坂、縄手間、羽白川内、八郎代、鵜子、彦太郎、浮立井手、ふけ籠、武宗坊、堀切井手、前田、椋谷、由里ノ坂

【上吉田(赤瀬)】　49 カ所

赤瀬、赤瀬道上、赤瀬道ノ下、伊見平、井手口、犬ノ木坂、岩穴坂、大坂、大戸口、織田、大戸谷、鬼丸、川原田、観音平、北ノ坂、桐坂、空戸、古屋敷、坂ノ下、椎久保、塩釜、鹿ノ谷、鹿ノ平、下川、四朗五郎、次郎丸、たり廉、つくつくし、とうしゅう谷、戸尺石、とんこう坂、永坂、中島、野副、野々田、早ノセ谷、樋渡、平原、藤落、藤原、武具手、古里、前田土井ノ口、明神前、森其、原、横竹、横岳、吉ノ元

【上吉田(万歳)】　15 カ所

岩穴口、岩淵、大中尾、上入道、川原、倉谷、下入道、つきの木、中尾口、中島、

中絶、梨ノ木谷、松小平、万歳、湯ノ鶴

【春日】 111 カ所

安ノ坂、石原、一ノ谷、一ノ瀬、一本松、牛鬼谷、後川、打越、宇戸谷、姥ノ懐、
江下山、大久保、大坂、太田、大峠、大野久保、大野道、大平岩、大藪、奥カ平、
貝つき谷、柿ノ木平、角善、重石、柏原、かたけ岩、椛ノ平、金筒、金前、上春日、
神園、上申、川上、川久保、北ノ坂、伐谷、崩ノ内、楠ノ木川、久保、桑原、氷ノ出口、
氷道、氷路、小谷、権兵エ谷、小峠、小吹、坂敷、下り、篠岳、島元、下桑原、下申、
下藤ノ谷、七郎左エ門、城就ヶ谷、城ノ尾、城平、新替、鍬崎、善入、立岩、
太左エ門畔、駄留、たふの木原、谷下、谷合、多り一、忠九郎、どうしゅう谷、通山、
中尾立、中野立、長谷、中ノ尾、中山、永久保、夏太郎、西久保、西谷、西ノ川内、
抜ノ谷、八ヶ岩、八舛畑、橋ノ口、馬場野、彦市、一ツ石、百貫、平小屋、平原、
広谷、びわのこう、藤ノ谷、藤ノ落、不口手、古道、古争淵、弁皿、綿打、持永、
松ヶ平、咽ノ落、見尾、峰崎、明神ノ前、目くら落、森、山神、家城、六舛蒔

【峰川原(川内)】 33 カ所

鮎返、榎本、大坂、太だら、川内、岸高、木風塚、草ノ木原、九郎二谷、川頭、野中、
落付石、重ノ橋、十摩、重ノ平、鵜子、大黒石、たふのき坂、土井ノ口、長葉、
咽のす、灰ノ丸、春ノ平、平林、広川原、山ノ木原、屋敷副、横しおり、よけこし、
吉ノ塔、与宗谷、わさご、川口、鮀淵

【峰川原(峰)】 24 カ所

上山中、上峰、木正手、北向、九郎代、山王前、下山中、下峰、拾間、新内志尾、
惣ふけ、丁ノ坪、中峰、野副、蓮把、春山、日吉、船底、古田、本谷、水ノ出口、焼山、
山ノ神、与合松

【真上吉田(寺辺田)】 33 カ所

洗切、荒巻、池ノ尾、一盃水、永野、永ノ谷、大久保、岡本谷、川原田、小井手、小川内、
三本柿、下北向、下山中、舛根、菅牟田、竹ノ下、達中、椿並、寺ノ上、寺辺田、
唐仁田、永葉、中北向、野口、原仁田、広馬場、淵上下、丸尾、室屋敷、山中、
横尾松、横尾山

【真上吉田(中通り)】 42 カ所

荷石、射場谷、打越平、内ノ畑、宇月並、梅ヶ谷、苧晒、皆元、要靏、上大田、神山、
上和田、けしき、神ノ木、三ノ谷、三本柿、下大田、下和田、尺ノ田、白岩、白岩、

城山、城ノ下、椿並、堂ノ下、堂ノ前、徳王、中川原、中通、中原、鳴川、馬場副、
林ノ下、深底、水山、焼木、山子谷、山崎、柚ノ木園、横枕、林溝、和田

【西川内】 44カ所

いこい谷、板ノ平、井手ノ上、姥懐、円座山、扇山、大藪、女山、上西川、北岩、
形ふたふ、桐ノ木、近左エ門屋敷、くえの坂、くちなわ谷、くつれ岩、黒仁田、小坂、
榊、志々己、下西川、城山、躑躅山、戸石坂、徳右エ門屋敷、長羽山、西川内入口、
二本松七曲、弐本松九角、中島、荷土、八ノ久保、春山ヶ倉、広谷、風月坂、古田、
別当、星喰す、舞山、丸山ヶ倉、梅田、屋敷、代きとり、綿打

【西川内(赤仁田)】 4カ所

杓子木、小市原、苗代田、南平

【西吉田】 43カ所

いそのす、岩附、兎、宇土谷、鰻田、大平、夫卜谷、大久保、北木庭、五斗別当、
木庭、小平、権現、坂ノ下、下古賀、杓子木、膳々谷、園田、辰口、谷、堤ノ上、
堤東脇、峠、道久、道尺、鳥居原、兎鹿野、中谷、波地ノ上、西尾立、野中、
樋渡、別当丸尾、平ノ谷、坊主原、南平、向、無角、向古賀、森ノ木、薬師前浦、
屋敷ノ上、湯尻

【皿屋】 30カ所

池田、石さし、鰻田平、神ノ森、祇園、切通、黒木払、五斗別当、小松平、皿屋、
獅子穴、柴取、下釜ノ元、浄土前、新釜、大黒、谷口、鳴川、野中、馬場頭、羽口、
八ノ久保、八天平、原頭、晩堂目、瓢箪、弁ざい谷、柳原、幽軒、吉田平

【納戸料】 41カ所

愛坊、池田、井ノ上、会下、江里谷、円通寺、岡平、岡本南、かわうけ田、鎧突免、
五月田、小ヶ倉、清用、大黒、大黒下、田中、田淵、丁ノ面、塚原、寺中、塔ノ元、
納戸料、西ノ間、野副、羽口、羽口下、蓮把、馬場、林副、引地、広畑、松良相、宮ノ谷、
宮ノ元、宮原、森、森ノ内、屋形靏、吉野、綿丸、楽一

〈小字一覧について〉
・文献には、同一地区に名前の重複が散見され、整理後に５０音順に表記しました。
・仮名は、現代かなづかいにしたり、濁音が適当な場合は濁音にしたりして表記しました。
（例：ヲ→お、シウ→しゅう、ハチノクホ→はちのくぼ　等）

4 吉田村の推移について （『嬉野町史』・『塩田町史』を参考にした、明治以降の吉田村）

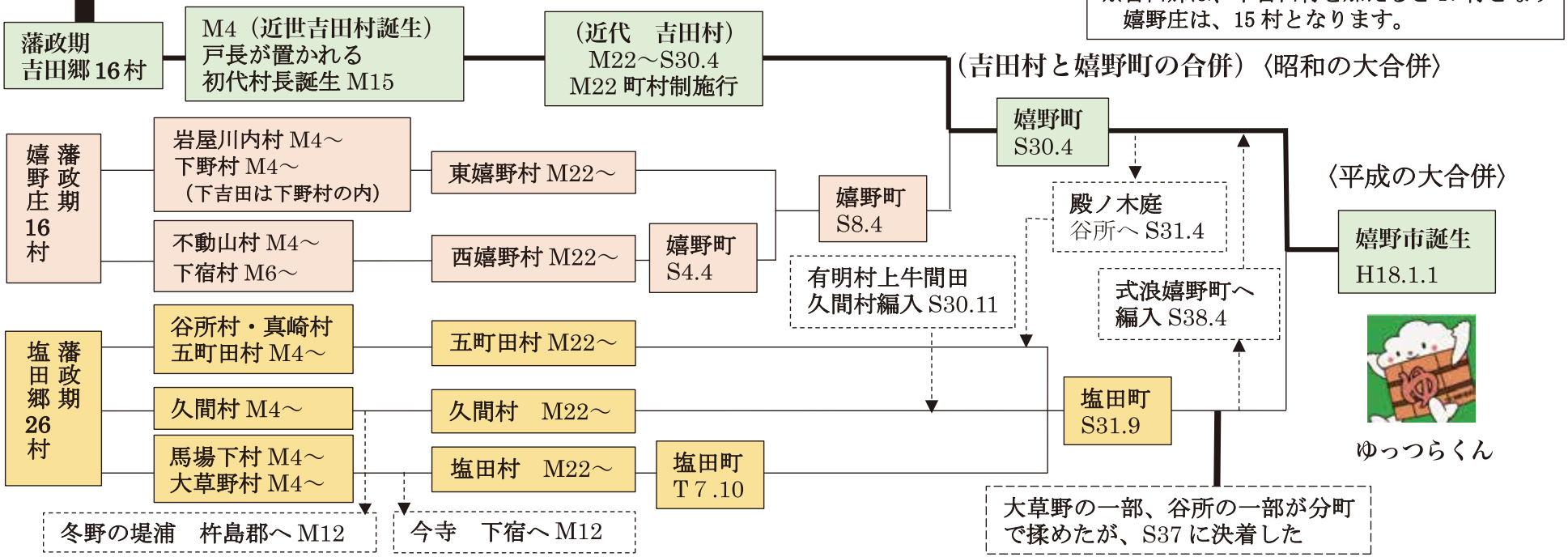
（１）吉田郷から嬉野市誕生まで

◎吉田村の名前は、文献では鎌倉時代の『河上神社文書』（1292 年）に初めて出てきます。

（吉田郷１６村）➡ 皿屋、西吉田、赤仁田、西川内、東吉田、殿ノ木場、中通り、寺辺田、峯（峰）、川内、万歳、岩ノ下、赤瀬、春日、納戸料、両岩

〈明治の大合併〉　〈※M⇒明治　T⇒大正　S⇒昭和　H⇒平成〉

※吉田郷は、下吉田村を加えると 17 村となり嬉野庄は、15 村となります。



※嬉野庄 16 村 井手川内、下野、下吉田、下岩屋川内、上岩屋川内、大野原、下不動山、上不動山、丹生川、俵坂、今寺、下宿、内野、内野山、本村、湯野田

※嬉野庄は、明治４年と明治 22 年に統合があり、昭和４年に西嬉野村が嬉野町と改名、 昭和８年に嬉野町と東嬉野村と合併して嬉野町となりました。下吉田は、明治４年に村の統廃合が行われた時に下野村となった旨が嬉野町史にあり、藩政期には吉田郷であったようです。

※塩田郷 26 村は統合を重ね、明治４年に６村、明治 22 年に３村、昭和 31 年９月に１町２村により塩田町となりました。

（２）明治４年の吉田村　（『嬉野町史』掲載の『藤津郡村誌』（明治 18 年編纂）資料から）

※吉田郷の 16 村は、政府により村の統廃合が行われ、吉田村となりました。各村は、〇〇 名（みょう） といわれました。

※政府は、地方制度の整備を進め、県内を大区・小区に分ける「区制（くせい）」や小区に戸長を定め「戸長（こちょう）制度」を始めました。しかし、明治 11 年には「大区制」は廃止（はいし）、区を改めて県内を郡としました。（藤津郡吉田村が始まる。鹿島に藤津郡役所設置、嬉野に取扱所・区務所が置かれる）

（３）昭和 30 年の吉田村**（嬉野町との合併）**……〈昭和の大合併〉

上西川内（含水頭）・下西川内・赤仁田一部 ➡①西川内　中通り・寺辺田 ➡②真上吉田　峯・川内（含広川原）➡③峰川原　④皿屋

赤仁田・西吉田 ➡⑤西吉田　⑥東吉田　万歳・岩ノ下（含横竹）・赤瀬 ➡⑦上吉田　⑧春日　⑨納戸料　⑩両岩　⑪殿ノ木場

※16 区は 11 区に統合・再編されたが、昭和 31 年４月に殿ノ木場は谷所へ編入され、現在の行政区 10 区となりました。

（４）嬉野市の誕生（平成 18 年１月１日）……〈平成の大合併〉

嬉野町と塩田町が合併し嬉野市が誕生しました。

○ 嬉野市人口　30, 395 人（男性：13, 928 人　女性：16, 467 人）　○ 世帯数　9, 364 世帯

嬉野温泉公式キャラクター
ゆっつらくん

（５）佐賀県になるまで『嬉野町史』・『塩田町史』・『嬉野・吉田郷土読本』参照

〈各藩が、現在の佐賀県になるまでの推移表〉

事項 / 藩	吉田郷の 16 村名（江戸時代　藩政末期）	明治４年７月（最後の藩主）	明治４年９月	明治５年５月	明治９年４月	明治９年８月	明治 16 年５月
佐賀藩	納戸料、中通り、寺辺田、峯（村方）、万歳、岩ノ下、赤瀬、川内、春日（村方）	佐賀県（鍋島直大）9 月統合	統合され伊万里県となり、県庁が伊万里に置かれた	伊万里県は、佐賀県と名前が変わる	佐賀県は、筑後の三潴（みずま）県に合併され三潴県となる	三潴県は、福岡県に併合され、佐賀は長崎県と合併して長崎県となる	佐賀は、長崎県より分離独立して、佐賀県となる ※藤津郡の一部は、長崎県を希望する運動も起きたが、認められなかった。
蓮池藩	皿屋、東吉田、西吉田、殿ノ木庭、赤仁田、広川原、上西川内、下西川内、峯（山方）、春日（山方）	蓮池県（鍋島直紀）11 月統合					
鹿島藩	両岩	鹿島県（鍋島直彬）11 月統合					

○　吉田村は、廃藩置県前は３藩の領地でした。明治４年(1871) ７月、各藩は県となり藩主が知藩事となりました。この時は、３県以外に小城県、唐津県、厳原県、長崎県も存在しました。各県は分散し複雑な状況だったため、初めに佐賀県と厳原県が合併し、１１月には全ての県が伊万里県に統合され、藩主以外の伊万里権令（山岡鐵太郎）が任命されました。（職名：県令もあった）

○　明治４年７月、全国には３府 302 県ありました。明治 22 年頃には整理され、ほぼ現在の府県名となりました。（東京は、「府」）

○　明治 16 年までに長崎や福岡と複雑な動きをしながら、長崎県から分離した 10 郡により今の佐賀県が成立しました。

（10 郡）藤津郡・杵島郡・佐賀郡・神埼郡・小城郡・三根郡・養父郡・基肄郡、東松浦郡・西松浦郡

5 ふるさと吉田　歴史探訪

（1）東吉田編

1　東吉田区について

東吉田は、縄文時代の田中遺跡や古墳時代の六反田遺跡の遺物が出土したり、中世の城館跡があったり歴史ある土地です。

『嬉野町史』によれば、瀬野精一郎氏が鎌倉時代の御家人を研究した資料では、嬉野地域には「嬉野氏（宇礼志野氏）」と「吉田氏」の存在が記され、建武２年（1335）建武の中興で足利尊氏に属した吉田左兵衛尉雄国が恩賞として吉田の地を給わり支配を始めたと記されています。

明應年中（1492～1501）には、吉田太郎左衛門尉が吉田郷役人となり、一族が代々この地を治めたとされます。また、群雄割拠の戦国時代、吉田氏が有馬氏の勢力下にあった頃に山城が築かれたようです。

なお、東吉田の地名は、県立図書館所蔵の文禄４年（1595）から幕末までの『郷村帳』、『元禄肥前国絵図』元禄15年（1702）、『藤津郡吉田郷図』嘉永６年（1853）などに見ることができます。

【東吉田区の名所】

2　真如山本覚寺

本覚寺は、室町時代、永正４年（1507）に、吉田郷刺吏吉田太良左衛門尉 蔵人が開基となり創建した日蓮宗寺院です。

本寺は、創建より天正年間（1573～1592）まで、４代の間は佐嘉本行寺住職が兼務であったとされ、吉田家７代目吉田太郎右衛門の代には、佐嘉本行寺の円蔵院日良上人が開山となり、専任住職となりました。本堂は、安永８年（1779）に建立され、明治22年（1889）に再建、令和元年にも大規模改修が行われました。

【本覚寺本堂】

御仏檀位牌所は、安永９年（1780）に完成しています。仏像堂（守護神堂）は、慶應元年（1865）に境内に建立されましたが、母と子を守る女神とされる鬼子母神のほか、加藤清正・七面大天女・西原大明神（安産の神）の４体の像は、現在は本堂に移され祀られています。

【鬼子母神】

【加藤清正】

【七面大天女】

【西原大明神】

本覚寺は吉田氏の菩提寺であり、本堂裏の墓地には「為常信霊位菩提也　慶長二年九月十八日」と刻まれた「有耳五輪塔」が建てられ、吉田太良左衛門尉蔵人の霊を慰めています。

3　中村観音堂

【中村観音堂】

中村地区に大きな藤の蔦が聳える所が中村観音堂です。お堂に上る階段下には、室町時代から信仰されているという六地蔵様が祀られています。階段上の左側には、文化６年(1809)建立の「一字一石塔」があります。これは、江戸時代、仏教の経典の文字を小石に一字または二字ずつを書き写して地中に埋ずめ、石塔を建てたものです。「一字一石塔」は、本覚寺や鳥越峠の旧道脇の宝塔神社にも見られます。

観音堂には、高さ60㎝程の如意輪観音像があり、明治はじめ京都で金箔塗りの補修を行い、明治12年卯月４月にお堂に祀られたと記されています。

お堂は、昭和28年に改修され、観音様は前面ガラス張りのケースに納められました。

【六地蔵】

【一字一石塔】

【如意輪観音像】

【阿弥陀如来像】

また、観音様の左右には、阿弥陀如来像が並び、右側には頭部を撫でると皮膚病が治ると言い伝えられた像があり、左側には、以前は下吉田にあったという像が移され祀られています。

お堂には、文化８年（1811）と刻まれた半鐘も吊るされています。中村観音堂は、長く地域の祭りが行われ、今でも地域の方々に手厚く守られています。

4　本木権現

【お堂】

【本木権現像と肥前狛犬】

宇留戸地区を東山手に上ると、平成７年に改修された本木権現堂があり、享保 13 年（1728）と記された権現像が祀られています。

お堂内には、嬉野市文化財に指定された「肥前狛犬」の石像２対が安置されています。像は、シンプルなかわいい作りで、右は口を開き、左は口を閉じています。嬉野町で１対の阿吽の像が存在するのは珍しく貴重な像です。

これらの像は、以前は隣接する茶畑の巨大な岩石の場所にあったそうですが、平成24年に本堂が造られ移されました。お堂は、今でも東吉田６班による管理がなされ、12月18日頃の祭りをはじめ地域行事の田祈祷や灯籠明かしなどの祭事の場として大事にされています。

なお、秋の葦筒神社の例大祭に関わる皿屋天満宮（下の宮）の神様は、明治初期までここに祀られていたと伝えられ、明治初期の神仏分離令により移されたと思われます。

5　吉田城跡

【城郭の石垣】

無量寺地区に、中世に築城された吉田城跡があります。創築年月は不明です。城主は、南北朝期に北朝から恩賞として藤津郡吉田邑を給わり、筑後国から移り住み吉田姓を名乗った左兵衛尉雄国とされ、吉田氏の居城でした。吉田城は、標高147m、最高所に南北30m×東西22mの主郭を築き、周囲の法面には7～8mの急峻な切岸が造られました。稲妻型の堀切や深い堅掘を作り、堅守で敵を迎え撃つ工夫がされた城でした。

吉田氏は、高来（現長崎県）の有馬氏の配下として、龍造寺軍や小城の千葉軍とも戦いました。また、彼杵の大村氏に属した時期もあったようです。

龍造寺隆信が有馬方の鹿島の横造城を攻めた天正４年（1576）、吉田左衛門太夫や宇礼志野氏など藤津の主な武将は、龍造寺側に翻り、城は陥落しました。さらに、有馬方は、浜の松丘城も追われ藤津から駆逐されました。

吉田氏は、その後、龍造寺氏や鍋島氏に属し、龍造寺隆信公が戦死した沖田畷の戦い、豊臣秀吉公の朝鮮出兵、関が原の戦い（豊臣方）、鍋島家が活躍した島原の乱などにも参戦したようです。吉田氏の所領地だった吉田邑は、鍋島家の領地となり、その後、佐賀本藩（鍋島傅兵衛家）や蓮池藩（鍋島直澄公）、鹿島藩（付家老の田中安人公）の３藩で、代々の藩主・領主が統治して、明治維新まで続きました。吉田氏は、蓮池藩の臣下となり、江戸留守居役や塩田役所（藤津郡・杵島郡・松浦郡を監督）の長（頭人）などの重職に就いたそうです。

なお、吉田城から500m離れた標高182mの高地、七曲にも中世期の城館跡があります。

6　印役宮（印鑰宮）

【印役社】

鳥越トンネルに向かう北側に印役宮があり、印役社（明治18年）が祀られています。専門家によれば、祠の像は頭部が欠損してますが12～13世紀頃のもので、長崎県にある像と似ているそうです。吉田地区にある数多い石祠の中では、かなり古い時代のものとなります。

印役（印鑰）とは、国衙領（平安後期以後、国司の統治領）の印とその不動倉などの鑰（鍵）をいい、さらに神社・神主家の印などを特に神聖化、神格化したものです。印は、国衙領・神領文書に捺され、その鑰（鍵）が穀倉の開閉に用いられたことから、印鑰は、貢納物出納の主役として印殿に祀りました。旧国府近くに印鑰神社が残る地があり、佐賀市大和町尼寺に「印鑰社」、鹿島市納富分に「印鑰天神社」、塩田にも印役宮を祀った所があります。東吉田区には、小字名として「印役」名が残り、12月15日は「印役祭り」が行われています。

7　妙見山（妙見堂）

【妙見堂】

鳥越トンネルの手前、左手の小高い山が妙見山です。お堂があり、日蓮宗信仰の場と共に、北斗七星信仰である北辰妙見大菩薩が祀られています。お堂前の「妙見堂新築記念碑」には、最初の妙見堂は、明治初年、中島武八ほか発起人により建立、大正７年に改修、昭和47年に社殿が完成して現在に至る、と記されています。昭和52年には、吉田出身の松尾時枝先生に賛同された、北原佐和一同の協力により改修が行われました。この時、先生に感謝し記念碑も建立され、地区民の日蓮宗や妙見信仰に対する尊崇の思いが感じられます。昭和58年には妙見堂への坂道が整備され、今でも信仰の場として大切にされています。

8　題目塔

題目塔は、俗に「髭題目」という日蓮宗独特の書体で「南無妙法蓮華経」の七字題目を表します。日蓮は法華経の中に釈尊の教説の真髄が含まれていると説き、法華経の題号である「妙法蓮華経」に「南無」（仏の教えに従う意－帰依）を付けて「南無妙法蓮華経」を唱えることを創唱しました。また、日蓮宗信徒で組織された題目講があります。これは、信徒が題目マンダラの掛軸を礼拝対象として太鼓を叩き、題目を唱えて現世の利益と後世の安楽を祈願したとされます。題目講は日蓮の忌日（10月13日）にちなみ、毎月13日に行われる例が多く、塔の造立日も13日が多く見られます。本覚寺には、宝永３年（1706）、宝暦９年（1759）、元治元年（1864）の題目塔が建てられています。

【本覚寺題目塔】

9　鳥越峠と宝塔神社

平成14年（2002）に鳥越トンネルとバイパスが開通し、通勤や通学、物品の移動運搬などに貢献することとなりました。ところで、旧道途中の南側に、1800年代初期に建てられた宝塔神社があります。昭和48年に整備され、「一字一石塔」文化４年（1807）、「馬頭観世音菩薩」享和４年（1804）と記された碑が祀られており、今も信仰深い地域の方々に大事にされています。

【一字一石塔】

10　お三夜さん

妙見堂の登り口に、月を信仰の対象とする勢至菩薩像が祀られたお堂があります。一説では、この信仰は月の満ち欠けによる 23 日目の月を縁日として、人々が薄明かりの下で酒宴をしながら、月が上がるのを待ち続けたとされ、連夜の宴となることもあったそうです。今でも地域に残る「三夜待」「〇夜待」の言葉は、この集まりの名残と言われています。

【勢至菩薩像】

11　毘沙門天像（多聞天）

東吉田公民館近くのお堂に、鮮やかな色彩の毘沙門天像が祀られています。「毘沙門天」は、室町時代末期には日本独自の信仰として七福神の一尊とされ、江戸時代以降は、特に勝負事にご利益があるとして崇められました。戦国時代、上杉謙信は、自分の前世は「毘沙門天」だと考えていたともされます。毘沙門天は、持国天、増長天、広目天と並ぶ、四天王の１つで、多聞天の別名です。戦いの神様ですが、平和な時代には縁のない守護神のようです。像が奉献された時期などの記録はなく、地域の守り神として祀られているようです。

【毘沙門天像】

12　用水路の井堰：サナ井手（四寸ふう）

吉田川には、春日の百貫井堰から下野まで各所に井堰が築かれていますが、江戸時代、佐賀本藩・蓮池藩・鹿島藩と入り混んでいた吉田では、灌漑用水の水利慣行についても、複雑な取り決めがありました。取り決めには、佐賀本藩に有利となる取水しやすい井堰の位置や慣行があり、蓮池藩であった東吉田地区の水が不足する場合は、本藩である納戸料区に使用料を納めることが必要でした。納戸料は吉田川の落合井堰より取水し、途中に「四寸ふう」と呼ばれる四寸四角の取水口をもち、渇水期に水位がある一定位置まで下がるとそこを開

【４寸ふうとり決めの契約書：東吉田区蔵】

き、東吉田（蓮池藩）へ水を送りました。また、吉田川の本藩領へ取水する井堰は「板井手」で漏水が少ないように造り、本藩以外へ取水する井堰は「サナ井手」と呼ばれ、杭をうち水が漏れ易かったと伝えられています。東吉田へ取水する、一本松、二本松、三せ原の井堰は、「サナ井手」であったと伝えられています。

13　宇留戸の石地蔵

宇留戸地区には、平成30年に改築されたお堂の中に左右２体の「地蔵菩薩像」、中央に「薬師如来像」が祀られています。お堂前には六地蔵様も祀られています。ここは「子どもを守る神さん」とも言われ、地区民から大事にされてきました。

【お堂と六地蔵】

【３体の石地蔵様】

14　五輪塔と角宝塔

「五輪塔」や「角宝塔」は、供養や納経、墓などの目的に建立されたものです。

写真上の塔は、鎌倉時代中期頃に東吉田地域に栄えた領主の墓と考えられる「五輪塔」です。1300年代の作とされ、東吉田区に数多く存在する石祠の一つです。石祠の丸い部分（水輪）は壺状になり火葬人骨が納められています。その側面には“金剛界大日”（大日如来）を示す梵字が４ヵ所に刻まれています。遺骨が残る五輪塔は非常に珍しく、同様な五輪塔が下吉田の正教寺にもあるそうです。

【梵字】

【五輪塔】

写真下の塔は、西彼杵産の緑泥片岩で造られ、天文17年（1548）と刻まれています。全体が方形造りのため「角宝塔」と言われ、石をわざわざ長崎県から運んでいて、有力な領主による建立と考えられます。

当時の吉田と西彼杵の交易や文化のつながりも推測され、また石造美術史的にも貴重な存在だとされます。この塔の近くに破損した一部が残存していることから、同様にあと１基あったようです。なお、緑泥片岩で造られた角宝塔は、長崎県では３基しか見つかっていない貴重な塔です。

この五輪塔と角宝塔の２基は、共に嬉野市の文化財指定を受けており、嬉野の貴重な宝です。

【角宝塔】

15　馬頭観音像

まんぞく館から北を望む水田の中に、木立が見える場所があります。地域では、「守さん」と呼ばれている所で、「馬頭観音像」明治42年（1909）が祀られています。馬頭観音様は、牛馬の供養塔であったり、地域の守り神であったりします。この馬頭観音像は、頭上に馬の頭をつけ、複数の腕が左右背面側につき、顔は怒っているようです。煩悩を貪り食べる観音様だそうです。

像には個人名が記され、信心深い方が奉納されたものと思われます。また、この横には石祠が１基ありますが判読不明です。像の傷みが進んでいますが、地域では除草をするなどして守り続けています。

【馬頭観音像】

（2） 春日編

1　春日区について

【春日大明神　浮立奉納】

春日の地名は、春日大明神に由来する説と、それ以前から使用されていたとの説があり、定かではありません。しかし、打越遺跡や西久保遺跡などから縄文時代の石器などが発見されており、太古から人が居住していたようです。

1350 年の古文書には、今川直貞という武将が警固のために春日に兵を配したとの記述があり、近年確認された中世の「上春日城塞跡」につながるものと思われます。このことから、春日を通る街道は物と人を運び、古 より有明海と大村湾をつなぐ要衝だったことが窺えます。

江戸時代、春日大明神周辺の集落は、佐賀本藩領で春日村方と呼ばれ、山間部は、蓮池藩の所領で春日山方と呼ばれました。春日山方だった中山、柏原、霧谷、川上の地区は、1639 年頃に約 30 戸の家族が移住したとされ、地元ではこの移住を開拓と言っています。

霧谷には、藩の役所が置かれました。また、山方の人々は、山林の管理や木材・木炭の供給に従事したそうです。

なお、「嬉野区務所」の『村数戸数人口取調書』明治 11 年（1878）では、春日の人口は 479 人（世帯数 108 戸）と記されています。

【春日区地図】

2　春日分校

春日小学校は、明治８年（1875）に創立され、春日分校跡地の南西数百メートルの薬師堂が教室だったようです。学校は、次のような変遷を辿りました。

- 明治 19 年（1886）　公立尋常吉田小学校の分校となる。
- 明治 37 年（1904）　春日分教場は独立して春日尋常小学校となる。
- 明治 41 年（1908）　吉田尋常高等小学校と合併して春日分教場となる。
- 明治 42 年（1909）　現在の場所に校舎を新築して移転する。
- 昭和 34 年（1959）　全面改築され、閉校時の校舎の姿となる。
- 平成 14 年（2002）　嬉野町立吉田小学校春日分校が閉校となる。

※現在、薬師堂は県道脇に移設されています。

～　儒学者　谷口藍田　春日へ　～

春日の小川関三氏は、『春日の文献より見た今昔物語』（昭和 56 年）を著し、春日に儒学者「谷口藍田先生」が招かれ指導されたと記しています。谷口藍田氏は、大分県日田市にあった私塾の咸宜園で廣瀬淡窓門下として塾頭を務め、幕末・明治と全国で講義をするなど名を馳せた儒学者です。春日に招かれたことが事実であれば驚きです。谷口氏は、鹿島藩の弘文館教授として教鞭を執り、「鹿島近代教育の父」と言われました。鹿島高校前の公園には遺徳を偲ぶ碑が建てられています。谷口藍田は、副島種臣や大隈重信とも親交があり、維新前後は国事にも奔走したようです。

【旧校舎　昭和９年（1934）】

【閉校時の校舎の並び】

【春日分校の授業風景】

明治８年に開校した当時は、社会・家庭の状況が厳しく、２年生や３年生で修了する児童もいたそうです。また、春日地区以外に、能古見の西三河内や大野、大野原から通学する児童もおり、特に、大野区は、明治13年まで春日学校区に含まれていたため多くの児童が通学していたようです。

春日分校には小学校４年生まで通い、その後は吉田小学校に通いました。バスや自動車が普及してない時代は、全員が約４kmを徒歩で通学していました。

春日分校　児童数の変化

大正元年（1912年）	63人
昭和９年（1934年）	53人
昭和29年（1954年）	38人
昭和45年（1970年）	22人
昭和50年（1975年）	12人
平成元年（1989年）	10人
平成10年（1998年）	10人
平成13年（2001年）	7人

《昭和９年修了生の話》

当時は貧しかったため絣の着物で通学していました。修学旅行の行き先は、1･2年生が嬉野、3･4年生は鹿島祐徳神社への参拝でした。行きも帰りも徒歩でございました。

春の遠足は分校東の篠岳に、年度末は、分校西の鷹岳に登りました。篠岳からは遠く有明海が見え、佐賀平野の景観が美しく見えました。

《昭和22年修了生の話》

戦時中、1･2 年生はカラムシを採取し皮をはいで乾かしてから役場に届けました。カラムシの皮は兵隊さんの服になるとのことでした。3･4 年生は松の木の根を掘り出し役場に届けました。松の根からは油が採れ松根油と呼ばれていました。松根油は飛行機の燃料になるとのことで、みんな一生懸命働きました。

《春日分校修了生の話》

分校の歴史に終止符が打たれるのは残念なことですが、これも時代の流れであり、長い目で見た前進と受け止めなければならないでしょう。今、過去を振り返ってみますと、分校時代が一番充実していたのではないかと思われます。校庭のモミの木の枝に作ってもらったブランコが懐かしいです。

【カラムシ】

【敬老会「したく競争」】
昭和 52 年（1977）

春日地区では、春日分校が中核となり纏まっていたことから、昭和31年（1956）には、「春日分校教育振興会」が結成され、春日・赤瀬区民運動会や敬老会を主催するほどでした。しかし、平成14年（2002）３月14日に春日分校が閉校となり組織は活動を停止しました。

分校では、児童、保護者、卒業生、教職員等が参加して惜しまれながら閉校式が行われ、同時に「偲ぶ会」も開催され、開校から127年の歴史に幕を下ろしました。

現在、空き校舎は喫茶店として活用されています。

【春日分校　閉校式当日】

3　春日大明神

地区名の由来になったとの説もあるくらい、春日区のシンボル的な存在が春日大明神です。

神護景雲２年（768）に創設された春日大社（奈良県奈良市）には、平安時代に隆盛を誇った藤原氏の氏神として４棟の社殿があります。春日の小川関三氏の資料によれば、「その中の第３棟に奉られている天児屋根命の分霊を戴いて、奈良から春日村に運ばれて奉られたのが春日大明神とされ、祭祀の年代は不明です。また、分霊は三人の使者によって春日村まで運ばれ、御神体は一時的に村内の巨石の上に奉祀されたとされ、現在地に遷座されたのは、江戸時代になった元和元年（1615）、藤原基明による。」と記されています。　（写真：春日区　松本広渡氏）

【春日大明神】

【大イチョウ】

【春日大明神奉納浮立】

境内には佐賀県の銘木として、嬉野市の天然記念物に登録された大イチョウの木があり、春日大明神の御神木として大事に管理されています。ちなみに、雄株のため実はつけません。

4　一里溝

春日地区には、百貫井堰を取水口として篠岳（春日分校東側）の麓まで延びる灌漑用の水路があります。総延長が約４km に及ぶことから「一里溝」と呼ばれ、全て人力により造成された人工的な水路です。言い伝えでは、山間部に山方と呼ばれる一団が移住した承応３年（1654年）の後、1700年前後に造られたとされています。

【百貫井堰の取水口】

一里溝は、山間地の山肌を這うように造られた紆余曲折した水路ですが、極めて水平に近い高低さで造られています。その築造には相当な技術力を要し、僅かな勾配を付けて造られています。築造の方法は、次の通りです。

まず、水路の水平を計測する班を吉田川を挟んだ対岸の向野に配置しました。向野はカヤ（ススキ）の刈り場で、対岸の集落を一望できる場所だったようです。

次に、水路を造る班は、予め水路が通りそうな場所の雑木を幅 10m、長さ 20m 程度ずつ伐採して位置決めを行いやすくして、実際の位置決めは夜間に実施されました。

【山肌を縫うように造られた水路】

夜、伐採した場所に松明を灯した人が配置され、対岸の向野から松明の位置を目視で測量し、ほぼ水平になるよう太鼓の音を合図に、上下方向への移動を指示して決定したそうです。この手順を繰り返して行い、約４Kmの水路が造られたとされます。

即ち、数百年に亘って一里溝が存続できた最大の理由は、この水平を精密に極めた技術にあります。この技術がなければ、曲がりくねった水路に急な傾斜ができ、増水時にカーブした部分に相当な水圧（力）が掛かり水路の壁が壊れてしまいます。しかも、当時の水路は粘土を固めて造ったも

ので、著しく強度が低いものでした。従って、総延長約４Kmの曲がりくねった水路に、一年中安定して水を流すには、水路の傾斜をほぼ水平にし、押水と呼ばれる僅かな水圧差を利用する流し方が不可欠でした。現在の水路は、数百年経った今も現役です。もちろんコンクリートで補強されており、春日区の人々によって定期的な溝の手入れと除草などの維持管理がされています。

5　春日渓谷と吉田川の源流

【清流の春日渓谷】

多良岳山系の中腹となる、標高約 500mに位置する吉田川上流の一帯は春日渓谷と言われ、広川原キャンプ場から車で 10 分ほどの距離です。夏は、暑さを凌ぎ涼しい風の中で川遊びを楽しんだり、秋は、色鮮やかな紅葉と透き通るような清流を目指して訪れたりする家族連れもあるようです。

なお、この辺りは国有林であり、営林署の許可を得て春日渓谷からさらに５分ほど車で上った後、徒歩で 20 分ほど倒木を縫い川沿いの急坂を上ると、巨岩から水が浸み出る源流に辿り着きます。何ヶ所も水が出ていて、それらが集まり合流して吉田川の源流として小さな瀬となります。小さな水の流れは次第に支流となり、吉田川、嬉野川、塩田川に繋がり有明海に注ぎます。山の恵みと言われる栄養分が、永い年月をかけて運ばれ、田畑や海の幸を育んできたと思われます。

6　大村への街道

【「春日越え」の道標】

源流に辿り着く途中に、「春日越え　佐賀森林管理署」という道標があります。昔は、春日を通って大村藩と鹿島藩の交易が行われていたとされます。

大村市歴史資料館所蔵の大村藩藩政記録『九葉実録』寛政９年(1797) 12 月によると、交易に関する税について、以下の通り記されています。

「九州列藩悉ク検場ヲ設ケ、商買ノ物件ニ口銭課スルヲ以テ、左ノ人員ニ―令ス

他領　御領内江持込持出候商賣荷物之分不依何品口銭取候様被相極候　依之嬉野境　彼杵・千綿迄之間其方江支配被仰付候」

↓（現代語訳）

九州列藩がことごとく検場を設けて、商売の物件に口銭（※関税）を課すため、左の人員に命令する。

他領より領内へ持ち込み、または、持ち出す商売荷物は、どんな物であろうとも口銭を取るように決められた。そのため、嬉野境から彼杵・千綿までの間は彼らへ支配（※統治）を命令された。

（嬉野市歴史民俗資料館　学芸員 西村沙保里　訳）

【吉田川源流を目指して登る】

【源流：巨岩から浸み出る水】

7　春日村山方と春日村村方

【植林された木々】

春日村は、古代から続く集落で龍造寺氏から佐賀本藩の支配に代わり、さらに蓮池藩の成立で村方と山方に分かれました。吉田川の東側の拓けた辺りを本藩所領の村方と言い、南側の山深い辺りを蓮池藩所領の山方と言いました。

蓮池藩の塩田役所が設立されると、中山字より南の山林一帯に山方附役の人約30家族が移り住み、春日周辺の山の管理に携わりました。山林の松や欅は木材として、雑木は木炭にして出荷し、伐採した跡には杉を植林しました。蓮池藩初代藩主鍋島直澄公は、木炭製造を創始、奨励しました。

また、平地は畑に開墾し、藩営として朝鮮人参の栽培も行ったそうです。

鹿島郷大庄屋松尾源左衛門が、安政・元治年間（1854～1865）に記したとされる『蓮池家中郷村帳』では、春日村は地米１４石と少なく、湧水を利用した稲つくりだったと思われます。そこで、新田開発のために村方と山方が協力して「一里溝」が造られたと思われます。

中山・柏原・霧谷等の字地の山林には、山方役の人々の屋敷跡の石垣が点在していますが、江戸末期には、山方役は村方と同じ場所に居住するようになり、現在の春日区を形成したと思われます。

8　取り残されたカツラの大木

【カツラの木】

柏原の川の中に生育しているカツラ（かつら科）の木は、昭和20年代には上部を切って木馬道の中継柱として使われましたが、伐り倒されずに今も立派に成長しています。カツラは、幹が根元から何本にも分かれて伸びるものが多い樹木で雌雄異株で、春日のカツラは、雄株です。花は、葉が出る前に葉の付け根の部分に糸を束ねたようにつけます。

カツラは、佐賀県内では佐賀市富士町下合瀬、鹿島市平谷と奥山、嬉野町春日の４か所に自生が確認されている貴重な植物です。

9　春日の銭太鼓、鉦浮立、小浮立（踊り浮立）

【春日浮立】

【春日浮立の舞】

一般に浮立は、風流という語の転訛で、雅やかなもの、風情あるものを意味しています。春日の浮立は、明治初め頃から春日大明神に奉納されたと伝えられる踊り浮立で、花に蝶が舞う様子を表現し繊細さや柔らかさが感じられるのが特徴です。

銭太鼓は竹筒の中に硬貨4～5枚を入れ、竹筒を振ってジャラジャラ音を出しながら演舞します。鉦浮立は大小５個の鉦を打ち鳴らす浮立で、時には演舞しながら鉦を打ちます。小浮立（踊り浮立）は、笛、太鼓、鉦、謡に合わせて踊りながら奉納するもので15曲が伝えられていて、曲目により踊り手の人数は異なります。

最近では、８年ごとの葦筒神社での奉納が主な神事芸能の伝承としてかろうじて存続していますが、踊り手の減少で6～7曲しか奉納できなくなっているそうです。

ところで、県内各地に様々な浮立が伝播・発展した背景には、地域間の交流や独自の発展なども考えられます。『佐賀民俗学　第18号（平成13年８月）』に掲載の「沖の島慕情」（陣内林氏）には、春日の浮立の長い歴史を垣間見る内容が記されています。

○　昭和 20 年代まで鹿島の海岸まで遠く離れている山手の吉田春日地区が、沖の島詣りを実施していて、現在も地区では小浮立が伝承されています。
○　『鹿島市史・真実の記録』には、毎年、旧暦の６月 18 日各部落よりたくさんの鉦浮立や一声浮立が辻宿を通る時、必ず辻宿で熱心に演奏し休息してから、お島さん参りに沖の島に向かったが、その内で、吉田村の春日部落の浮立が一番熱心に一番盛大に辻宿で演奏してくれたことを記憶している。(原文抜粋)

「沖の島」伝説とは、昔、雨乞いのため「お島さん」という女性が人身御供となり、遺体が有明海の小島に流れ着き、その島に豊作祈願の神様として祀られたというものです。今でも、鹿島市七浦地区では、道の駅横の海岸から船に提灯を飾り付け、鉦浮立を囃しながら「沖の島」に参詣します。有明海沿岸の他の地域でも、この伝説や行事が残っているところもあるようです。

春日地区の古老数名にお尋ねしたところ、昭和 27 年、青年団や区の役員を中心に 40 名程で、早朝から出発して徒歩で能古見の大野越えを行い、北鹿島の海岸から船に乗って「沖の島」詣りをしたそうです。鹿島の街中や北鹿島のお寺で鉦浮立を囃したことや参詣が終わると夜通し歩いて日の出近くに春日に帰ってきたことが懐かしいと話されました。また、その方の父の代の時にも「沖の島」参りをしたらしいとのことで、浮立文化の長い伝統と継承が感じられます。

10　春日地区に纏わるお話

その１　《苗字の七不思議》

縄文時代から続く春日でありながら親類縁者の家族が大変少なく、苗字もばらばらである。昭和 18 年の頃も、49 戸のうち 36 の苗字があり同じ姓でも縁戚関係ではない家が多いことは不思議でした。

その２《参観道の幽霊》

昔武士が、今にも雨が降り出しそうな夜道を急いでいると、参観道の墓の入り口に差し掛かった時、目の前に「幽霊」が現れたので、武士は咄嗟に刀を抜き幽霊を切りました。切られた幽霊は青白い炎とともに消えました。幽霊を切った武士は、近くの森さん宅に寄りお茶を所望し、今しがた幽霊を切ってきたとの話をされました。翌日、森さん達が墓の入り口に行ってみると刀傷がついた石の塔が立っていました。

刀傷がついた石の塔が現在も残っており、そばに幽霊を弔い祀る観音様が置かれています。

その３《向野の狐の嫁入り》

向野はススキの原で、秋も深まる頃になると夜「キツネの嫁入り」が毎年見られたそうです。最初はところどころに白い火がともり、しばらくすると野原全体に広がり、点滅したり、波模様に広がったりする光の現象が昭和 30 年ごろまで見られたそうです。

その４《猪の田畑あらし》

文化 15 年（1818）には、春日村から塩田役所を通して、蓮池藩に猪が出没し田畑を荒らすので、駆除願いが申請された。ただちに狩猟鑑札が発行され、捕獲したイノシシの肉は藩に献上されたとのことです。

【一里溝から春日の集落を望む】

【刀で切った切り口に見える石】

【山方の旧集落跡地】

（3）上吉田編

1　上吉田区について

「鍋島報效会所蔵」【元禄国絵図】

【上吉田区地図】

昔に遡ると、吉田川が流れる上吉田区をはじめ、吉田村は嬉野の中でも早くから土地開発が始まったとされ、吉田村の発展は吉田川に支えらてきたと言えます。

江戸時代の上吉田村は、鍋島本藩吉田郷の邑主であった鍋島傅兵衛や鍋島隼人などが治める知行地でした。貞享４年（1687）の『御領中郷村帳』や万延元年（1860）の『郷村帳』にも地名が記され、早くから拓けた地域でした。

『慶長国絵図』慶長 10 年（1605）には、塩田や東嬉野、西嬉野、下吉田などの村名があり、各村の石高は「上吉田の内」と表記されています。これから見れば、上吉田の名は、政治的な面で吉田の中心とされたようです。また、「上吉田」の地名は、『元禄国絵図』元禄15年（1702）や「吉田郷図」嘉永６年（1853）では、吉田川西側に表記され、真上吉田区寺辺田辺りを指していて、当時の上吉田は、かなり広い範囲だったことが分かります。『上吉田村竈帳』文久３年（1863）に示される上吉田は、“寺辺田分、嶺分、川内分、岩下分、万歳分、赤瀬分、春日分”とあり、現在の峰川原区や真上吉田区にかかる広い地域を指していました。

『藤津郡村誌』明治 18 年（1885）によれば、明治４年に吉田村が誕生した時は、万歳・岩ノ下（含横竹）・赤瀬の地区でした。そして、昭和 30 年４月に吉田村と嬉野町の合併時に「上吉田区」となりました。上吉田の世帯数は、明治 11 年に作られた「嬉野区務所」の『村数戸数人口取調書』では、115 戸で、令和２年の 42 戸よりかなり多かったようです。

2　藩政末期の上吉田村

幕府は、天明３年（1783）に、代官→大庄屋→庄屋→約長→小頭、という農民支配の流れを作ったとされます。『嬉野町史』によれば、吉田には嬉野町でも珍しい『上吉田村竈帳』文久３年（1863）が残されていて、上吉田の人々の生活や田畑、人口、職業、５人組の様子などが記載されています。５人組の中に小頭の役、さらに５つの５人組を纏める役に約長が置かれたそうです。

〇田と畠：　田：53 町７反４畝 27 歩、　畠：33 町７反 15 歩半

○屋敷数：　223ヶ所（寺１、山伏の家１が含まれる）
○人口　：　男女合計 1,102 人（男 554 人、女 548 人）、作馬 28疋（頭）
○職業　：　農業 567 人、他の職業に僧、山伏、大工、大鋸、室糀方、鋳懸師、板割等
○組合数：　５人組によって住民を支配管理する制度で、上吉田には 45 組あった。

3　岩ノ下の井堰

鍋島藩政の頃、鍋島本藩と蓮池藩では農業用水の争奪も厳しく、水は鍋島本藩が有利になる井堰や仕組みが作られたそうです。上吉田は、佐賀本藩の領地で「岩ノ下」には佐賀本藩領の「寺辺田」へ水を送る井堰が造られていたそうです。この井堰は、水が漏れないよう岩をくり抜き作られました。強固な井堰により本藩の領地に水を多く流す仕組みでした。逆に、蓮池藩の農地には、少なく送る井堰と方法を用いたようです。例えば、本藩の納戸料から蓮池藩の東吉田の水田に送る井堰は、水漏れがある工法「サナ井手」でした。本藩と支藩の力関係が取水方法にも表れていたようです。

4　横竹ダム（横竹・赤瀬）

吉田川は、佐賀・長崎県境の国見岳に源を発し、昔から大水の度に被害が発生しており、昭和 37 年の梅雨前線豪雨、昭和 51 年の 17 号台風、平成２年の台風くずれの低気圧などにより甚大な被害を受け、抜本的な治水対策が強く望まれていました。

また、灌漑用水としても広く利用されており、近年は夏場の深刻な水不足などに見舞われるため、正常な水機能の維持を図ることも急務でした。横竹ダムは、これらの事情を解決するために建設された治水ダムです。ダムの形式は、重力式コンクリートダムで、総貯水量 429 万トンです。治水ダムは、洪水調節が必要なため、堰堤より 12m 下方が常時の満水位となっています。ダムは、まず平成４年に県道及び町道の付け替え工事が始まり、平成６年からダム本体の工事に取りかかり、完成したのは平成 13 年度になってからです。完成後は、下流域での大きな被害の発生も無く、地域住民の生活安定と産業の振興に役立っています。

ダム地域には、赤瀬・横竹地区が含まれ、移転せざるを得ない民家がありましたが、住民の皆様方のご理解とご協力によりダム完成に至りました。聞けば、吉田ダム建設構想から約 40 年の歳月がかかったそうです。

横竹ダムの周辺は公園化され、春には見事な桜が咲き誇ります。中でも「御衣黄桜」は、大島桜を改良し、緑黄色の花は花見客に人気です。言い伝えでは、日清戦争の折、明治 27 年頃に兵士が御衣黄桜を中国から持ち帰り、それが春日分校と春日大明神に植えられたそうです。

【ダム建設前の集落】

5　学びの家塾

『嬉野町史』によれば、藩政時代の勉学の場として、上吉田には「徳永梅軒」が開いた「家塾」があったそうです。皿屋にも「青葉庵徳泰寿」という人の「家塾」があったとされます。

当時、教育面では士族と一般庶民では学ぶ環境に大きな差がありました。士族の子弟は、蓮池藩学「成章館」にて勉学する機会が与えられ、習字、読方、珠算、儒学的なものから四書・五経に至るまで内容も様々でした。一般庶民には、各地域に夜間の手習所があったとされます。農家の子弟には、「農業往来」「庭訓往来」「手紙の文章」等、町人の子弟には、「商売往来」「庭訓往来」等、女子には、「百人一首」「女庭訓」などを学ばせていたそうです。習字を学ぶ場もありました。

6　薬師堂（万歳）

太良嶽一ノ宮の横に薬師堂があります。本尊は薬師如来像で、嬉野地区では温泉に関わる如来様ですが、薬草栽培などに関わる地区などでも祀られるようです。万歳地区の中でも、特に薬師堂付近は昔から「ゆのづ」（湯の津、湯の出、湯の鶴など諸説あり）と呼ばれており、地形的にもお湯が湧出してもおかしくない所なので温泉との関わりがあったのではないかと推測されます。

【薬師堂】

7　太良嶽一ノ宮（万歳）

吉田の南東部に位置する多良岳（標高 982.7m）の山頂には、太良町の太良嶽神社の上宮が鎮座し、古来より山岳信仰の対象でした。修験者（山伏）が入山するルートも幾つかあり、海岸沿いの太良嶽神社（一ノ宮）を起点とするルートの他、嬉野側の吉田からのルートもありました。

【太良嶽一ノ宮】

万歳の「太良嶽一ノ宮」延宝３年（1675）も多良岳に通じる北西ルートの起点で、祠は、道標の役割をしていたと考えられます。また、参拝できない人のための祈願所でもありました。地図も羅針盤もない時代に、この祠が目的地まで道案内をしていたのです。修験者たちは、赤瀬から入山し、「一ノ宮」→「二ノ宮」→「三ノ宮」……と道標を辿り、多良岳の太良嶽神社上宮を目指したものと考えられます。祠は、横竹ダム工事の道路拡張により、平成３年に修復されて文字も鮮明になって移設されました。なお、近くに「おじゃっさん」と親しまれてきた弘法大師像もあります。

〈赤瀬の地名考〉

地名に用いる「瀬」という文字は貝揃いの「揃」が転じたものと言われており、その昔、修験者が入山前に列を作り一斉にほら貝を吹き鳴らす儀式が行われた場所を示すと言われています。万歳の「一ノ宮」を出発した修験者一行が「赤瀬」の盆地から多良岳の方に向かって一斉にほら貝を吹き鳴らしたのではないでしょうか。

8　鹿大明神（赤瀬）

昔、奈良の春日大社より「天児屋根命」の御神体を分霊して、春日に運ぶ時、神の使いの鹿を伴っていました。長旅に鹿が死んでしまうと、赤瀬の人々は鹿の屍を丁寧に埋葬し、霊を奉る神社である鹿大明神を建立すると、赤瀬地区の守護神となりました。なお、平成４年に横竹ダム建設に伴い石祠が移され、社も新築されました。

【お社】

【大神宮】【八大龍王神】【鹿大明神】等

また、ここには祠がいくつも並んでいます。写真の一番左は、伊勢神宮参宮記念の「大神宮」が祀られています。江戸期には、人々が「伊勢講」を作り路銀を蓄え伊勢参宮の代表者を送り出し、戻ると、講に加わる人々がお札を頂くことが流行していました。大神宮は、参宮が出来ない人の祈りの場とも考えられます。「鹿大明神」の横には、恵みの水を乞い、または感謝して水神「八大龍王」の祠が祀られています。八大龍王神は、吉田では辰ノ口水源の横や皿屋の吉浦神社にも祀られ

ています。なお、石祠群は、ダム建設に伴い散在していた地域の人々の信仰心を示す祠が移座されたものですが、風雨に晒され、刻まれた文字も風化して読み取ることができない状態です。

9　八天狗（岩ノ下）

江戸時代の中頃、有志により塩田町谷所にある八天神社の御神体「火之加具突智大神」の分霊を岩ノ下に奉じた神社です。八天狗は、八天宮や八天神社とも呼び火伏せの神、家内安全の神として崇められています。

現在は、岩ノ下地区の神社として毎年７月 16 日に祭礼として「灯籠あかし」が受け継がれています。八天狗神は、吉田地区内では、皿屋や赤仁田、東吉田などにも祀られています。

【八天狗神】

10　岩屋観音堂（岩ノ下）

皿屋・西吉田方面から眺望すると、両岩・上吉田に連なる山並みの中で、一際高くそそり立つ岩が集合する標高約 300ｍの岩場に、蒲鉾型の高さ約４ｍ、間口約９ｍ、奥行き約 11ｍの洞穴があります。

【岩屋観音堂】

【弘法大師、千手観音菩薩】

洞穴内部には、「千手観音菩薩石像」延宝３年（1675）と「弘法大師石像」明治 38 年（1905）が鎮座しています。弘法大師像は、明治時代に皿屋で窯業を発展させた副島利三郎が奉献したものです。洞穴を形成している岩盤は、侵食風化などの影響を受けやすい凝灰岩で形成されています。

以前は、春と秋は白装束の「お遍路さん」が岩ノ下から細い道を登られていたそうです。現在は両岩からか、横竹ダムの横から林道を通って岩屋観音堂に行くことができます。

11　田島初太郎像とお堂（岩ノ下）

昭和初期、岩ノ下の田島初太郎氏は材木商を手広く行い、財を成した人物です。

田島氏は、岩ノ下に広い土地を寄付して地域に貢献したことから「祭田記念碑」昭和 10 年（1935）が、現在のダムに通じる道路脇に建てられました。

【田島初太郎像祝賀　昭和 12 年】

【田島初太郎像】

また昭和 12 年には、祭田記念碑が建つ道路近くの斜面を拓いて、「田島初太郎像」と「初太郎堂」が建立され、地区民は祝賀行事を行いました。写真左に写る初太郎堂は、今では小さなお堂に代わり、薬師如来像と２つの石像が祀られています。

今のお堂には、太平洋戦争前の昭和 15 年頃、住民が奉納したと思われる戦勝を祈る絵や写真（戦車）が残されていて、日本が戦争に向かっていた時代の一場面を垣間見るようです。

区の方によれば、お盆の頃、お堂前の広場で子ども奉納相撲大会も行われていたそうです。

（4）峰川原 編

1　峰川原区について

峰川原区は、『佐賀県遺跡地図』（2010 年）を見ると縄文時代の「上峯遺跡」があると記され、大古から人々が生活してきた地域です。

江戸期の『御領中郷村帳』貞享４年（1687）を見ると、この辺りは、佐賀本藩に属する鍋島傅兵衛が邑主として治めた知行地とされますが、峰地区は「峰山方」と「峰村方」があり、佐賀本藩と蓮池藩の領地が混在した状況だったと思われ、今ではその区切りははっきりしません。

藩政末期の吉田郷には、16 の小村がありましたが、明治４年、政府が村の統廃合を命じたため、「吉田郷」は「吉田村」となりました。この時、まだ「峰川原」の名称は無く、『嬉野町史』では「峯」「川内」に分かれ、「広川原」地区は、川内に含まれるとされています。

「嬉野区務所」の『村数戸数人口取調書』（明治 11 年）を見ると、川内と峰、広川原の総世帯数は 87 戸で、令和２年現在の 65 戸よりやや多かったようです。

昭和の大合併が行われた時期、吉田村は、昭和 30 年４月に合併して新嬉野町になりました。それまで 16 地区だった区は、現在の 10 の行政区になり、峰、川内（広川原）が合併し「峰川原区」が誕生しました。

【峰川原区地図】

2　広川原溜池

広川原溜池の成り立ちと改修、流域の水路築造は記録が十分でなく謎もあるようです。

①『嬉野町史』では、下岩屋『太田家文書』に“江戸期に太田弥兵衛資治は吉田村広川原溜池を築きし功により鍋島藩に召しかかえ”とあります。

【水が減った広川原溜池】

【広川原溜池再建碑】

②峰区区長が代々引き継いできた文書には、延徳３年（1491）に上峰と下峰に２つの水路を造ったこと、天和２年（1682）に「木正手」「丁ノ坪」「黒台」に３つの水路を造ったという記録があります。これらは、鞘川から引かれた水路と考えられますが、前者は、時期が早く疑問も残ります。

③嬉野町が広川原溜池に建てた碑文（昭和 63 年）では、「明治初期、谷間を堰き止めて下流域の新田開発と灌漑及び災害防止を目的に築造された。昭和 12 年から食料増産のため改築に着手され、戦時下の困難を乗り越えて施工されたが、完成目前の昭和 24 年に災害に見舞われ決壊、完成をみたのは昭和 28 年……（後略）」と、記されています。

これら①～③では、水路と溜池のどちらが先に造られたかの判断は難しいですが、先人の努力により水が田に供給され、今も恩恵に与っていることは素晴らしいことだと思います。

さて、この広川原溜池は、「斜樋」を通じて水を落とし、土砂が底に貯まり浅くなるのを防ぐため、「底樋」、通称「どぶ栓」から排出される仕組みです。長年に亘り灌漑や災害防止などの恩恵をもたらしてきた溜池は、今も水路と共に峰川原区により維持管理がなされています。

3　上峰水路と下峰水路

春日区には、吉田川から引いた灌漑用水路「一里溝」がありますが、同様に、峰川原区には、鞘川に取水口を作り、水を引いた「上峰水路」「下峰水路」が築造されて農業用水が確保されました。

【取水口近くの鞘川】

【下峰水路】

鞘川は、広川原溜池を発する水や山系からの湧水が一つになり流れ込み、吉田川に合流します。水路の水量は多く、水は先人の工夫により網の目のような細い水路を伝い、川内や峰の田畑を潤しています。また峰地区には、「上峰溜池」享保元年(1716)も造られ、農業用水の確保が図られてきました。川内と峰で分ける水量の割合は、昔からの取り決めにより励行されているそうです。

ところで、鍋島藩政の時期には、春日区の「一里溝」や西吉田区の辰ノ口水源からの「西吉田水道」、峰川原区の２つの水路のほか、いくつもの溜池や堤の築造が行われました。これらは、今も吉田地区の農業に欠かせません。吉田地区の先人の創生の努力と共に、これらの偉大な築造物などを代々維持してきた地域の人々の功績には敬意と感謝の気持ちが沸いてきます。

4　山方役所及び峰番所（峰地区園田さん宅付近）

佐賀鍋島藩の初代藩主鍋島勝茂公は、寛永16年（1639）に支藩の蓮池藩を設けると、勝茂公三男の鍋島直澄公が蓮池藩初代藩主となりました。蓮池藩は、塩田役所を置いて藤津郡、杵島郡、松浦郡にある蓮池藩領を統治しましたが、皿屋には「吉田皿山代官所」を置き、峰には支所として「山方役所」「峰番所」を置いたそうです。山方役所は蓮池藩の木材の搬出や山林の維持管理をする機関としての役割を果たし、峰番所は吉田で焼かれた陶磁器の大村方面への持ち出しの監視や旅人の検問などを行い、侍一人が配置されていたそうです。

5　広川原キャンプ場

広川原キャンプ場は、昭和50年からバンガローや炊事施設、管理棟、トイレなどの建設工事に取りかかり、昭和52年７月にオープンしました。平成13年には、利用者の声に応えて、トイレ・シャワー棟や電気が使えるコテージ、オートキャンプサイトなども新設されました。

【バリアフリー対応の施設】

【トイレ・シャワー棟】

その後、平成24年から順次バリアフリーに対応したバンガローに改築され、施設は、バンガローが５人用４棟、10人用３棟、30人用１棟、50人用１棟、コテージ３棟が用意されています。

利用期間は、４月末～10月末(土・日・祝日)、ゴールデンウイーク及び夏休み期間中となっていて、市役所にて申込みを受け付けています。利用者は、毎年３千人以上あり、半数以上は県外です。市民は、１割程度と少なく市民も気軽に利用できる場所となるよう期待されています。

6　峰川原区のお堂や石祠

（1）観音堂と八天狗神（川内）

川内地区は、斜面が多い中に田畑や家がある所です。水田の脇に建つお堂には、観音様（年代不明）が祀られます。観音様の手には何かあったとも思われますが、紛失したようです。ここは、人々の信仰と交流の場として８月に「灯籠まつり」を行い、「子ども相撲」もしていたそうです。

【観音堂】

【観音様】

【八天狗】

お堂横には、「八天狗」天保 13 年（1842）が祀られています。八天狗は、「八天神社」と繋がりがあり吉田地区内には多くの八天狗神が祀られています。八天狗は、八天宮や八天神社とも呼ばれ、火伏せの神や家内安全の神、江戸時代には旱魃で苦しんだ時には雨乞いの神としても崇められてきたようです。ここは、水への感謝と神への祈りが行われた場所と思われます。

（2）水田脇の阿弥陀さん（峰）

峰溜池から少し下の水田の脇に、「阿弥陀さん」と呼ばれる江戸末期の祠、天保３年（1832）が祀られています。200 年近く風雨に晒され朽ちていますが、今でも地域の方によって手入れがされています。祠には、「〇〇村中」と文字があり、五穀豊穣の神、用水路を開き管理してきた先人への感謝を込めて、村人により奉献されたもの思われます。祠は、水田整備が行われた際に移設されたそうですが、残念ながら阿弥陀像は紛失しています。

【阿弥陀さんの祠】

（3）観音様（峰）

峰地区の旧道脇のお堂には、“山中古賀中”と記された「観音様」明治 29 年（1896）が祀られています。首部分は補修されていますが、昔から守り神として崇められ親しまれてきました。お堂には、昭和 61 年に改修された上棟の札もあります。代々地区民の信仰の場所であり、今でも「灯籠明かし」などの祭事が行われ、以前は、奉納子ども相撲もされていたそうです。

【お堂】

【観音像】

（4）観音堂とカヤの大木（広川原）

広川原キャンプ場に行く道路脇には、巨石の窪みを利用した観音堂があり、皿屋の大定寺による勤行の場所で、「馬頭観音菩薩」像と「弘法大師」像が祀られています。お堂前の奉献塔には、寛保３年（1743）とあり、300 年余の歴史ある観音堂だと分かります。お堂は木々に囲まれ、近くに鞘川が流れる静かで厳かな雰囲気です。お堂には、巨石がそそり立つ隙間に観音様が祀られ、手前は自然石を重ねた台状の空間に奉献塔が立ち、自然への畏怖と敬意、観音様への思いが感じられます。

【観音堂とカヤの木】

「馬頭観音」は、牛馬が農耕や運搬などの労働力として大事にされたため供養塔として祀られるほか、煩悩から人々を救い息災と安全を願い祀られたとされています。ここに祀られる馬頭観音菩薩像は、頭部に馬の像が彫られた蓮華台の上に立つ立像です。

観音堂の横にカヤの大木が聳えていますが、高さ 18m、幹回り 2.6m、枝張り役６ｍもあり、恐らく神木として植えられたものと思われます。

7　広川原水源

峰川原区を流れる鞘川には、広川原溜池やキャンプ場、鞘川に沿う岩場などの水源から湧水が流れ込みます。キャンプ場から下った道路沿いの民家の脇には、湧水が溢れ出す水汲み場が造られ川頭水神が祀られています。ここは、昔から山道を利用する人々の喉を潤すオアシスでした。

また、近くには湧水が流れ込む池も作られ、静かで景観が見事です。

広川原の水源は、多良山系の伏流水と考えられ、水が涸れたことがないとされ、吉田地区では古来より農業用水や生活用水として利用しており、とても水を大事にしてきました。

【川頭水神と水汲み場】

【池に流れ込む湧水】

8　辻家垂柳檜葉（広川原）

辻家の自宅入口には垂柳檜葉の巨木が植わっています。ヒノキ科の樹木（ヒノキの変種）ですが、その名前が表すように枝や葉の先が柳のように垂れ下がるのが大きな特徴です。園芸種として庭園に植えられることも多く、成長すれば樹高は約 20mまで及ぶそうです。辻家の垂柳檜葉の樹齢は定かではありませんが、樹高 17m、幹回りは 2.5m、枝張り９ｍの大木です。

9　峰地区の昔の風景（野副 法継の手記から）

①〈春山の茶畑〉峰から水頭へ抜ける山の頂は、標高 380mぐらいだろうか、春山と呼んでいた。江戸時代以来、各家庭の屋根の葺き替え用の萱の刈り場でもあったが、大正時代になると、在来種の茶の種を蒔き育て、５月には、茶摘み娘が摘んだ茶を、男性は据え付けた唐窯で仕上げたという。大正９年５月の吉田小学校沿革史には、「峰区共同経営ノ春山茶園（約７町）茶摘並製茶状況視察ヲ兼ネ製茶実習に赴ク」という内容が記されている。

②〈みかんづくり〉昭和 30 年代の終わりから 40 年代初め頃、等高線に沿って雑木林をブルドーザーで切り開いてみかん畑が作られた。50 年頃に生産量も上がり、大草野や七浦の選果場まで運んでいた。東南向きの斜面がほとんどみかん園になり、共同配管による消毒散布が行われていたことや、昭和 43 年２月の大雪の重みで枝が裂けたため、５寸釘で補強して生き返らせたことなどをはじめ、若い後継者が峰の農業を支えてきたことが心に残っている。

③〈おとやさん〉１月15日の宵、親鸞聖人報恩講のとき、地域の子ども達は中学３年生に連れられて家々を回った。家では、仏壇にお参りをして座敷でお茶とお菓子、土産を貰いお話をする。どの家でも、子どもの人数分用意してくれるが、大人達も訪れる子ども達との交流が楽しみだったようである。風呂敷の中身が増えていき、とても嬉しかった。この行事を“おとやさん”と言って、今でも続いている自慢の風習である。

（5） 両 岩 編

1　両岩（諸岩）について

両岩は、西側には吉田川が流れ、吉田盆地の中央部に位置します。地名は、集落の中央部、両岩神社の後方に聳え立つ男岩（陽龍岩）と女岩（陰龍岩）の二つの山（陰陽の岩山）に由来するとされます。両岩の中央部では、縄文時代の斧研遺跡が発見されています。

平安時代、吉田地区は京都の仁和寺の荘園となり、両岩も藤津荘の一部だったとされます。また、両岩神社（権現さん）の社伝や言い伝えから判断すると、平安時代からの歴史が刻まれた地域だったようです。

時代を特定するものとして、両岩神社に残存している平安後期の作と推定される藤原仏の仏像等があります。これは、現在は県立博物館に保管されています。

【両岩区の地図】

また、両岩運動公園を上った場所は、寺屋敷と言われ、永洗寺があったとされ、寺に安置されていたとされる「不動明王坐像及び二童子像」（平安時代後期作：永寿寺所蔵　国の重要文化財指定）からも、両岩は平安時代からの歴史がある地域と推測できます。

ところで、戦国末期に田中源右衛門茂之（後に剃髪し安心と号す）は、５州２島（肥前、肥後、筑前、筑後、豊前、壱岐、対馬を指す）の太守として勢力を誇った龍造寺隆信から戦功により両岩を給っています。田中家は、江戸時代になると吉田郷で唯一の鹿島藩の領地として両岩を治め、領地は能古見郷の内とされていました。天保８年（1837）には、蓮池藩と鹿島藩での境界問題が起こり、庄屋六兵衛以下 51 人により鹿島藩に書状が出されたということもあったようです。

【岩ノ下から両岩を望む】

2　両岩神社（両岩権現神社）

両岩神社は、陽龍岩と陰龍岩の２大岩の麓に建てられた神社で、祀神は鸕鷀草葺不合命（山幸彦命と豊玉姫の子）です。社伝によれば、創紀は鎌倉幕府以前とされます。

『両岩神社縁記集』には、「最明寺時頼（鎌倉幕府第５代執権北条時頼出家後は剃髪し最明寺殿や最明寺入道と呼ばれた）が、諸国巡視の際に両岩にて病気になり、里の者が両岩神社で病気平癒を祈ったところ、忽ちに治癒し、時頼公は、そのことに感謝して神殿、拝殿を再建し社を護持する田等を寄進した」と伝えられています。なお、最明寺殿は八代執権北条時宗の父とされ、諸国行脚伝説（廻国伝説）が各地に残されているようです。

その後、寛永年間（1624～1644）、両岩神社は、キリシタン衆徒により神殿が焼失しましたが、この地を知行していた田中安心（鹿島藩付家老　田中源右衛門茂之）により神殿、拝殿、参籠殿等が再建されました。神社は、地元では「権現さん」とか「鎌倉殿、鎌倉様」と呼ばれて親しまれています。

ところで、明治４年に吉田郷が吉田村となった折、吉田村の村社は、神職在住の葦筒神社となりました。その時、村社の届けを神社庁へ出すために両岩神社の謂れを書いた文や狛犬が借用されたそうです。このため、両岩神社と葦筒神社の故事や謂れに類似点を見ることができます。

神社入口には、「両岩宮」と刻まれた「明神鳥居」に属する鳥居が建ち、最上段の笠木と２段目の島木の両端は、美しい反り返りが特徴的です。

【明神鳥居】

【太鼓橋】

太鼓橋は、神社前の小川に架けられていましたが、道路拡張や遊具場建設のため小川がなくなり石造りの橋だけが残っています。３本の胸石は弧状で等間隔に並び、その上に厚さ 8.5ｃｍの平らな角石１２枚を２列に引きつめ、橋の天井板が造られています。欄干は、五角形の石柱を橋の形に合わせて弧状にして平石の上に載せた造りになっています。太鼓橋も鳥居も文化 12 年（1815）の文字があり、石の材質が同じ安山岩であることから同時期に造られたものと思われます。

神殿は、欅、若しくは楠の彫刻のある材木で構成されています。その中に、平安時代後期に造られた五体の「木造神像及び仏像」が安置されていました。樟材の一木造りで、如来像２軀、菩薩像１軀、神像２軀からなります。これらは、平成元年、獅子の一木造りと共に佐賀県重要文化財に指定され、県立博物館に保管されることになり、現在の社殿には実物大の写真が置かれています。

【両岩神社の神殿】

仏像の３軀は衣の襞を簡単に表現し、首のつまったずんぐりした体軀をしています。如来像は、１軀が 89.5ｃｍ、他の４軀は、ほぼ 70ｃｍ前後です。菩薩像は左手、如来像は両手を欠失し、また、３軀とも足部が朽ちて欠損しています。

神像２軀は、腹部の懸帯の有無などに若干の違いはあるものの束髪や衣の襞の簡単な表現はほぼ類似し、また全体のずんぐりした体軀は仏像にも共通するものがあります。２軀とも両手を欠失しているのは残念ですが、この２軀は、県内最古の神像だとされています。これらの像の制作年代から、平安時代には、地方に仏師が存在していたと想定される作品です。

【木造神像及び仏像】

両岩神社は、神像と仏像が並座しながら、共に伝承されてきたという歴史から、神仏習合信仰の名残をとどめた神社と考えられます。

また境内には、天満宮や豊倉神社、生田神社も祀られています。昔の人々はこれらの神々に対し、風、蝗、水、旱、疫病等の除外祈願をしたものと思われます。

天満宮（天満神社）は、菅原道真公を祭神とした祠です。豊倉神（豊倉大明神）は、倉稲魂命を祭神とした穀物の神で五穀豊穣を祈願して祀ったものです。生田神社（疱瘡の神）は、当時流行した疱瘡から住民を守るために奉祀されたものと思われます。

なお、両岩神社の北側には、城畠屋敷跡や馬を訓練する場所もあったそうです。また、女岩の山頂には弁財天を祀った祠があります。

３　田中源右衛門茂之（田中安心）

田中安心公、〔弘治元年（1555）～寛永 16 年（1639）〕85歳没は、初期鹿島藩筆頭家老、俗名は田中源右衛門茂之と言い、龍造寺隆信に仕える近江佐々木源氏の末流とされ、もとは小城郡別府の城主でしたが、

龍造寺氏の傘下となり各地を転戦し、武功により両岩の地を給りました。
安心公（茂之）は生涯隠居せず、鍋島直茂公（佐賀本藩藩祖）に仕え、その後朝鮮の役に出陣した後、直茂公の二子忠茂公（12歳）の養育を任され帰国しました。その後、再び12歳の忠茂公に従い朝鮮へ出兵しています。
また、安心公は、忠茂公が鹿島藩初代藩主になると、付家老となり初期の鹿島藩を支えました。なお、忠茂公が寛永元年（1624）に死去すると剃髪して名を安心と号し、忠茂公の菩提を弔うため両岩の地に安徳寺を建立したとされます。
また、キリシタン衆徒により破却された両岩神社も再建しています。

寛永 14 年（1637）島原の乱の時は、83 歳の老体で鹿島勢を率いて鹿島市浜町から出陣するなど功績を残し、85 歳で鹿島の地で没しました。墓地は、鹿島市浜町泰智寺にあります。地元では、親しみを込めて「安心さん」や尊敬の念をこめて「安心公」と呼ばれています。

【掛軸　田中安心】

4　廣嶽山安徳寺（浄土真宗本願寺派）

両岩を知行していた鹿島藩家老職にあった田中安心（茂之）は、鹿島藩初代藩主鍋島忠茂公の菩提を弔うため安徳寺を寛永年間に創建しました。安徳寺には、安心に謂れのあるという次の品々が所蔵されています。

・田中安心の肖像画一幅（掛け軸）
・田中安心の業績を讃えた碑一基（境内）
・龍造寺隆信より拝領の鎧、或いは直茂公から拝領の卯花威の鎧

寺は、明治時代に火災に遭い、一部の貴重な資料が焼失してしまいました。

【廣嶽山安徳寺】

【安心の石碑】

境内には、吉田村出身で、佐賀県、さらに九州の俳諧の重鎮であった俳人森永杉洞師の句碑があります。杉洞師は、伊万里臨済宗円通寺の住職です。老師没後、弟子の福田無相氏らが、杉洞師が故郷の吉田を偲んで詠まれた「鳥雲に故郷の山高からず」の句碑を建立しました。

5　両岩の小字

両岩の小字 11 箇所は、正確な位置が判断できない所もありますが、ほぼ次の通りです。

1.外田（東吉田の境付近）、2.寺田（小井手川西側付近）、3.尾上（おおあげ: ライスセンター後方の山間部付近）、4.夜内平（尾上東側から殿ノ木庭の境付近）、5.斧研（よきとき:小井手川東側付近）、6.鞁石（グラウンドから東側を望む山間付近）、7.館（運動公園付近）、8.腰掛（鼓石の南側付近）、9.堀切（孕地蔵付近）、10.両岩（両岩神社の前付近）11.水口（両岩の南側吉田川沿い付近）

文献では、両岩の小字は上記を含めても 44 あるとされますが、今では場所は定かではありません。なお、『嬉野町史』には、両岩が諸岩と表記されることもあったと記述されています。

【両岩の小字】

6　宮ノ上の孕地蔵

【孕地蔵】

【孕銀杏のお守り】

両岩一隅にある地蔵尊には、哀れな民話が伝えられています。地元では、地蔵尊を大事に守り続ける方々により、語り伝えられてきました。その民話は、

『昔、この地蔵の前の道は大名行列が通る道でした。ある時、お腹に赤ん坊がいる女性がいました。女性は、大名行列が通る時に、お腹がじゃまをして頭を深く下げることができず、「頭が高い」と打ち首にされました。村の人々はお堂を建てて彼女を弔い、「孕地蔵尊」として祀りました。また、境内に銀杏の木を植えたところ、銀杏には腹帯を締めたように見える実がなるようになりました。

しかし約 200 年前、近くに民家火災が発生してお地蔵様は一部焼けて欠損し、銀杏の木は燃えてしまいました。とても残念に思い再建を願った “おシマさん” と言われる女性は、県内外を行脚して浄財を集め、それにより地区民で祠を建てて以前のように地蔵尊を祀った。』という内容です。

なお、その時植えられた銀杏の木は、今では巨木に成長しています。不思議なことに、再度植えられた銀杏の木にも腹帯を締めたような実がなります。現在では、「孕銀杏」として地元の方による手作りのお守りが作られ、参拝者はご利益を願って持ち帰ることもできます。参拝者記載帳には、遠い県外からの芳名も見られ、各地に「孕地蔵」のお話が伝わっていることが分かります。

ところで、この民話にある両岩を大名行列が通ったということには疑問も残ります。もし、この地を大名行列が通ったとすれば大村藩の殿様ではないかと思われます。『大村市史』には、承応元年（1652）江戸への参勤交代に出立の記録があり、経路は不明ですが牛津宿に泊まったとの記録が残っています。

この年以外は、諫早廻りや彼杵経由の経路が記録として残されています。

【孕地蔵の石橋】

地蔵尊の境内に入る所の小川の上に石橋が架けられています。幅 125cm、長さ 120cm の小さな橋ですが、渡された４本の石材は弧状に加工したもので、橋を横から見ると太鼓橋になっています。この橋桁の接地面は平らで、端の石材には 5cm ほどの凸が欄干らしく造られています。制作年代は不明ですが、石の性質をよく知った石工の作品だと思われます。

7　殿ノ小庭（殿の木場）

【殿木庭切開の記念碑】

江戸時代、殿ノ小庭は鹿島藩能古見郷でしたが、明治時代に吉田村に併合されました。昭和 28 年 10 月 1 日、町村合併促進法が施行されると、佐賀県でも 122 あった町村を 50 ほどに併合する案が進められる中で、昭和 30 年に嬉野町と吉田村が合併して新嬉野町となりました。しかし昭和 31 年４月１日、旧吉田村殿の木場地区（10 世帯の 64 人）は、五町田村へ編入され、昭和 31 年９月１日、旧塩田町、久間村、五町田村の３町村が合併し新塩田町となったため、吉田小学校・吉田中学校へ通学していた殿の木場の子ども達は、五町田村の学校へ通いました。

殿の木庭には、「宝永元年申年（1704）殿木庭切開、藤津郡吉田郷住人　中島長兵衛、野中五良右衛門　右二代目」と刻んだ石碑が建っています。昔は開墾のことを「切開き」と呼んでいたようです。

江戸時代、東吉田から山を越えて殿の木庭に入り、木を切り石垣を造り、畑や水田を作ったり、木炭を焼いたりしながら住みつかれたようです。殿の木庭から下ると大きな堤があります。堤の横には、貞享元甲子年（1684）に祀られた「弁財天」があります。

8　廃寺跡　真言宗永洗寺

【永洗寺跡地】

両岩神社から南東に数百メートル上った山間部の中腹は、地元では寺屋敷と呼ばれていて、永洗寺と呼ばれていた寺跡があります。寺跡は、５アールほどの広さがあり、石垣が巡らされた山岳沿いの地形です。現在は、杉や檜の林野ですが、その昔は、時代と共に先人が山を開き、畑を作り、谷の水が引ける所には水田があったと思われます。

この寺は、山岳信仰の拠点であったと推測され、平安後期の作と推測される「不動明王像」と「二童子像」（昭和２５年　国指定重要文化財）が安置されていましたが、現在は寺辺田の永寿寺に大切に安置されています。

ところで、平安時代の京都仁和寺は、天皇家より門跡（諸寺を統率する主僧）を迎え全国に多くの荘園を有していました。そして、嬉野鹿島藤津地域は藤津荘と言われ、仁和寺（真言宗御室派総本山）の荘園であったとされます。なお、鹿島市大殿分の蓮厳院のある所には、かつて金剛勝院という大寺があり、藤津荘の荘務が行われていたと考えられていて、永洗寺も寺跡の規模や真言宗ということから、山岳信仰の修行場であったと同時に、この地の荘園の管理を行っていたのではないかと推測されます。

9　六地蔵

【両岩神社前の六地蔵】

【常広の六地蔵】

制作年代は不明ですが、東吉田近くと両岩神社前の２カ所に六地蔵が鎮座しています。四角形の棹石２本継ぎでその上に蓮華状の台座があり、六体の地蔵が半肉彫り立像として円形に並び、頭上には笠石が載せられています。六地蔵は六道を輪廻転生する衆生を救い、室町時代から信仰されています。六道は天上道、人間道、修羅道、餓鬼道、畜生道、地獄道です。

10　城山　小路

両岩地区北部の常広地区は、通称「くうじ」と呼ばれています。その名の謂れとしては、常広地区から望む東側の山の頂にあったと伝えられている、山城から麓まで続いていた小路を「こうじ⇒くうじ」と呼んでいたところに由来するものと言われています。

11　岩肌に浮き出た「山・川」

【水神様の祠と岩肌の模様】

両岩神社の西側の県道皿屋三河内線沿いに岩肌が見える場所があります。その岩肌の下には農業用水の水路があり、水神様の石祠が祀られています。

岩肌には、「山」と読める白色と「川」と読める黄土色の滲みが見られます。これは鉱物の粒子がそれぞれ滲み出ているようです。白色は長石か陶石、黄土色は鉄分を含んだ鉱物と考えられます。遠い昔から両岩への親しみを感じさせる、ひとつの逸話とも言えるでしょう。

12　役所の設置

両岩は、鹿島藩領だったことから『鹿島私領村々畝数石高帳』天保３年（1832）には「藤津郡能古見郷両岩村」とあります。また、廃藩置県により、鹿島藩から明治４年７月に鹿島県となりました。直後の 11 月には佐賀全体が伊万里県(1871. 11. 14)となり伊万里に県庁が置かれました。その後、佐賀県(1872. 5. 29)、三潴県(1876. 4. 18)、長崎県(1876. 6. 21)、再び佐賀県明治 16 年(1883. 5. 9)と変遷してい

くことになります。

ところで、明治５年に各村に戸長役場が置かれましたが、吉田村は、上と下に分かれ２人いて、明治 15 年に井手平六氏が戸長に任命されると吉田村役場を寺辺田に設置し１つに纏めました。県道皿屋三河内線沿いの両岩消防団消防格納庫辺りに村役場が移転されたと、の説もありますが、その後の記録が分からず明確ではありません。

【現両岩消防団消防格納庫】

13　両岩の小浮立

（１）小浮立

両岩には、「小浮立」（佐賀県重要無形民俗文化財　昭和 35 年指定）が残っています。小浮立は、吉田地区の総氏神である葦筒神社の秋の例大祭において、８年に１度の吉田地区当番年に神事奉納を行います。また両岩地区では、毎年、氏神の両岩神社において「田祈祷」「風日」、「灯籠明かし」の日に鉦浮立も奉納しています。

【両岩の浮立】

小浮立は、神事芸能としてよくその所作を伝え、踊り浮立の中では、舞台舞踊的要素の特色が濃い踊り浮立の一派の外山流と考えられているようです。

演目は、道囃子、本囃子、払囃子、三番叟、恵比寿大黒、花笠、天人、幣奴、飛奴、鼓、大江山、扇回し、銭太鼓、狐忠信、綾竹、鬼神浮立からなり、ます。また、鬼神浮立は、現在伝承されていません。

演者は、笛３～４人、もりゃーし（小太鼓）３人、鉦５人、謡２名、踊り手は演目により異なり２名以上です。但し、本囃子と払囃子は一人にて行います。大太鼓を中心にし神前に向かって右側に鉦、左側に笛と謡、後方にもりゃーし（小太鼓）をコの字形に配置します。

小浮立の数多い演目の中で、本囃子、三番叟、払囃子を三囃子と呼んで重視しています。

また、両岩には面浮立も伝承されており、吉田公民館、横竹ダム、吉田小学校、吉田中学校の落成の折には、小浮立と共に奉納されました。

（２）由来

鎌倉時代に第５代執権北条時頼が諸国漫遊の途中、嬉野の両岩宮を参詣した折、病に罹り養生後に全快祝いとして、時頼自ら舞をなしたと言い伝えられ、この舞が払囃子、本囃子の起こりとされています。この時、北条時頼は、狛犬一対を献上したとも伝えられています。

（３）本囃子と払囃子

本囃子は「殿様踊」とも称され足一歩、笛一句間違えても次の動作に移ることはできず、昔は間違えれば御手打ちになったとさえ言い伝えられ、厳しさの中にも優雅さを漂わせるものです。

払囃子は、平調子と急調子とからなり極めて変化に富んだ踊りです。その特徴としては、他地区にある払囃子では踊りの急調子は片手で踊りますが、両岩では両手を用いて踊ります。

（４）現在

吉田地区では、例大祭の日に、８年に一度注連元となった地区が交代で旧吉田村村社で総氏神である葦筒神社に神事奉納がなされます。両岩区では小浮立を公開し、他の地区では伝承されてきた鉦浮立や踊浮立などが公開されています。両岩の小浮立は、昭和 35 年 3 月 24 日に佐賀県無形民俗文化財に指定され、今でも全区民で伝承を受け継いでいます。

（５）両岩小浮立が演じられた近年の記録

昭和 33 年 10 月 12 日　第８回　佐賀県芸能大会
昭和 36 年　4 月 30 日　天覧奉納小浮立（於和多屋別荘）
昭和 45 年　3 月 14 日　大阪万国博覧会（１週間）
昭和 54 年 11 月 15 日　常陸宮妃殿下御来町（於町体育館）
平成　2 年 10 月 14 日　第 32 回　九州地区民俗芸能大会

（6） 西川内 編

1　西川内区について

明治政府は、明治４年、村の統廃合を命じ、吉田郷が吉田村となる時、上西川内や下西川内、水頭、赤仁田の一部を合併して西川内名が誕生しています。明治 16 年の『藤津郡村誌』では、藩政期は、「肥前国蓮池藩主鍋島氏ノ所領に属ス」地区であったとあります。

また、右の『吉田郷図』嘉永６年（1853）の“古田”の地名など、48 の小字があったとされます。

西川内には、吉田の窯業が飛躍的に発展するきっかけとなった陶石発見の場所や狼煙が上がっていたとされる城山、信仰深い人達が参詣した滝の観音、戦後の開拓入植者により開けた水頭など、歴史を刻んだ場所が多数ある魅力的な地区です。

【吉田郷図一部】

↑

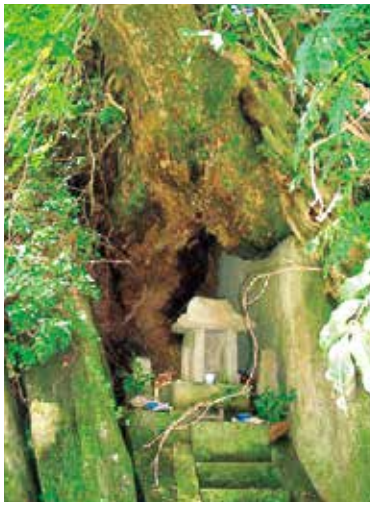
〈地図〉公益財団法人鍋島報效会／佐賀県立図書館寄託

【西川内地区と名所等】

2　藤の観音

西川内区の消防団倉庫横に聳える大楠は、巨石を左右に裂いたような場所から幹を力強く空へ伸ばしています。その根元からは、見事な藤が蔦を大楠に絡ませて伸び、時季が来れば見事な藤の花を咲かせる名所となっています。

楠の根元には包み込まれるように祠があり、大木に宿る神への信仰や水神様とも伝えられてきました。祠に彫られた像は、雨宝童子といい、天照大神が日向国（宮崎県）に降りたった子どもの時の姿とされます。これは、江戸時代に伊勢参り信仰が盛んだった“伊勢講”のために造られた祠だそうです。伊勢講とは、当時伊勢参りをするために路銀を出し合う集まりを言い、代表者がお参りして神札を持ち帰り全員に配布したそうです。祠は、参宮できない者がお参りした場所と思われます。藤の観音は、地域の信仰の場であり、11 月 15 日頃の日曜日に“御日祭り”が行われます。また、藤の花の季節には、ライトアップを試みるなど、地域の宝を大事にする気運が上がりつつあるようです。なお、藤の観音付近は、赤仁田（現在の西吉田）に属していたが、明治政府による村の統廃合の政策により、明治４年（1871）頃には、西川内区に編入されたようです。



【藤の観音】

【藤の花】

3　大師堂

【弘法大師像　他】

藤の観音前の大師堂には、明治22年（1889）建立の３体の像が祀られ、中央に「弘法大師像」、左右には「阿弥陀如来像」「十一面観音菩薩像」が鎮座しています。

大定寺のご住職によれば、明治12年頃に嬉野町下宿にあった大定寺が皿屋区に移転後、88 ヶ所の巡礼の場が設けられ、ここは、札所だったそうです。札所は、お遍路さんがお参りする場所で、今も大師像をはじめ、滝の観音や水頭地区にある不動明王像で勤行をされているそうです。今では、全ての巡礼地の場所は定かではありませんが、吉田地区の殆ど全てに札所があったそうです。札所は、大定寺を１番札所とし、南の山岳を越えて大野原地区を通って不動地区へと下り、嬉野町内を巡る順路で、最終 88 番札所は大定寺の「奥の院」です。なお、大定寺の 88ヶ所の巡礼地には、四国 88ヶ所の巡礼地の土を持ち帰り埋めてあるそうです。それは、四国まで行けない方々のため、嬉野・吉田の地で巡礼ができるようになされたそうです。そのほか、修行と信仰を兼ねて為される九州 88ヶ所などもあるそうです。

4　吉田焼発祥の陶石発見

【陶石採掘の跡地】

【白岩陶石採掘跡】

藤の観音から東を望むと、真上吉田との境に流れる西川内川（羽口川）が流れています。『嬉野町史』によれば、天正５年（1577）吉田左衛門太夫家宗は、龍造寺隆信の大村有馬攻略の道案内として吉田から大村へ通ずる間道を通る途中、羽口川の上流鳴谷川（西川内）にさしかかった時、川底にある陶石を発見し、馬を止めてこれを採り、軍を進めたのが吉田陶石発見の由来であると伝えられています。今も採掘跡地が近くに２カ所残っています。１つは、真上吉田地区に残る旧佐賀藩の所領地だったとされる白い岩肌が残る場所と、旧蓮池藩の所領地であったとされる藤の観音から下った左手奥に白く見える場所です。

言い伝えでは、西川内川の井堰近くには、馬を洗ったとされる“馬洗”（うまりゃー）や、何かを洗って干した“おさらし”と言われる場所もあったそうです。また、藤の観音から東（真上吉田側）の小高い山は、昔は狼煙を上げたと思われる城山であったとも伝わっています。

5　滝の観音

【清らかな水源】

【神聖な滝】

『嬉野・吉田郷土読本』によれば、1230年ほど昔、桓武天皇の時代、伍一という孝行者は、父の病を一生懸命看病したが治らず悩んでいたそうです。ある時、この里を弘法大師様がお巡りになり教えを開かれ、伍一に、『この村の西方に当たる滝の中に観音様がある。それは、昔役の小角という偉い行者が刻んだもので、ここでお祈りしたら病気が治るだろう』と申されたそうです。伍一は、早速その日から 37 日間祈願を立て、どんな天候でも厳しい山をかき分けて登り滝に日参しました。すると満願の日にはもう父の病は完治していたそうです。この後、誰言うともなく名前が知れて年々参拝する人が多くなってきたため、大正 10 年７月には、区民の力で休息所を建て参拝

客に便宜を図るようになったそうです。

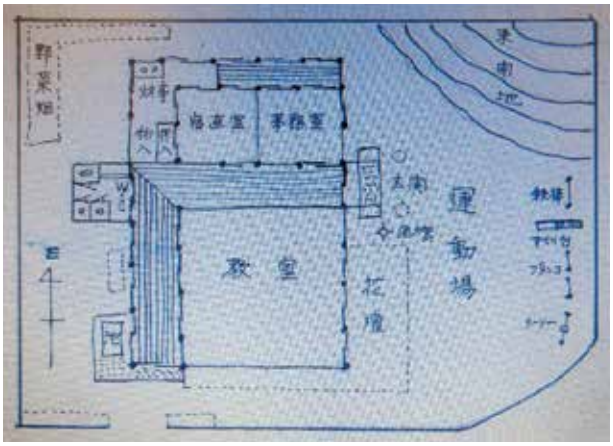
また、この滝の南側 200m ほど上流には、滝に流れ込む湧水を見ることができます。杉林の中にあり清らかな小川となって溢れ出しています。一帯には、過去に水田として開墾された場所があり、イタリアンライグラスという牧草の栽培地となっています。地元の方の話によれば、広川原キャンプ場近くの水源や西吉田地区の辰の口水源と並び、滝の観音に流れる湧水は、吉田を支える貴重な水源です。つまり、多良岳山系から続く水脈の恩恵により、自然豊かな郷土である吉田が存在していると言えそうです。

【地蔵菩薩像】　　【お堂内の、不動明王像や観音像、弘法大師像　等】

この地は、昔から大切な信仰の場とされ、滝の周辺には様々な像が祀られました。しかし、これらの像が風化している状況を心配した地元の方々により、今ではお堂を建て一箇所に納められています。ここの弘法大師像は、大定寺の勤行の地ともされてきました。

6　水頭開拓と吉田小学校水頭分校

昭和 20 年の終戦により、我が国は、外地引き上げ者や復員などによる人口の増加と食糧不足という社会混乱が生じ、開拓事業はその緊急対策として着手されました。『佐賀県開拓農業三十年史』を見ると、水頭開拓地には昭和 21 年に 25 戸の入植家族が入り、苦難の中に山野を開墾し茶園などを育成されました。以前居住された方によれば、入植者には、宮崎県や他県の方もおられ、中には苦しい生活に耐えられず南米ブラジルへの移住を決断した家族もあったそうです。



【校地と校舎の見取図】（閉校記念誌から）

ところで、水頭地区の子どもたちを学ばせるためには、離れた吉田小学校まで通う必要がありました。地区では、近くに学校設置が切なる願いでしたが、昭和 25 年 10 月 1 日、「水頭分校」が開校され住民の希望が叶えられました。校舎は、地元住民の奉仕作業で築造された部分も多く、教室 1 つと事務室、宿直室で、グラウンドもありました。この水頭分校の開校や施設などの充実には、地域住民が大きな力となったようです。

【閉校式当日の様子】

【昭和 44 年の分校】

分校では、初めの 4 年間は一人の担任が 1 年生から 4 年生までを教えておられましたが、分校 5 年目以降は、2 年生までが在学し、3 年生になると本校に通学するよう

になったようです。

しかし、時代の流れの中、昭和44年３月を以って20年間存続した分校が閉校となりました。分校を巣立った児童は54人を数え、11年間も勤務された百崎俊子先生には多くの修了児童がお世話になっています。先生は、何かと不便な山村での僻地教育に尽力され、その功績は大きく、昭和39年に佐賀県教育委員会からの「教育功労者表彰」は、先生の僻地教育への思いを綴った手記と共に新聞にも大きく取り上げられました。

閉校記念誌『水頭分校　足かけ20年の歩み』（太田保男先生編集：最後の担任・元嬉野町教育長）には、分校が人々を大いに勇気付けたことやその思い、分校と地区民の一体感が感じられます。

記念誌には、次のような回顧の手記が掲載されています。

「分校の用務員を終えて」　水島里平

主食は芋で照りつける残暑を浴びて分校の屋敷開きが、20数人の力で、それこそ汗と油の奉仕作業の連続であった。ただ、「この峠に分校ができる。学校が生まれる。」の誇りと嬉しさでこの強行作業も一人の不平不満もなく、一枚の瓦も１個のバラスも全部人の手にのり、肩にのせられ分校まで登ってきたのだ。こうして予定通り出来上がった。

当時の様子がほんの最近のような気持ちで居るのに、年月は 20 年近くも過ぎ去って居るのだ。この間にも、我々の生活戦線に見切りをつけて、１戸減り２戸減りして、ついに今日を招いた原因とも云うべきでしょう。我々の分校として、親も子も老人も変り行く世相に遅れじと分校に顔をよく出したものである。子どもたちの唄と共にオルガンの音が、この小さい谷を流れて来ると、親たちも童心に帰って仕事の手をとめて指先で調子をとりつつ子どもらの声に合わせて合唱とまでは行かないが、口元でさえずり苦しい農業作業の中にこれほど大きくなぐさめてくれるものはなかった。運動場での遊び叫ぶ子どもたちの声に部落の人々は如何程に楽しく力づけられたことでしょう。しかし、あれもこれも全てが終止符を打たれようととしているのである。いつまでも忘れ得ぬことでしょう。このさびしさ、有から無へのさびしさは現実に直面せねばわからないことです。（後略）

〈修了児童の思い出〉

【閉校式の時１年生だった　田代浩文さん】

分校には１年間通いました。山に行って落ち葉を拾ったり畑での理科の勉強をしたり思い出がたくさんあります。閉校式では一人一人が思い出の作文をみんなの前で読みました。とても緊張したことを覚えています。

【分校で３年間過ごした　小野　求さん】

寒い冬、優しい先生と炬燵で勉強した記憶があります。時々本校に行っていました。本校で映画「にあんちゃん」を観たこと、４年生から１時間以上かかって登校したことや帰りは遊びながら帰ったことが思い出です。働いている人たちに挨拶をしたら、とても褒められたこと等が記憶に残っています。

7　水頭池

水頭地区には、西川内区をはじめ、下流域の水源である「水頭池」があります。池の近くには、江戸末期の文政13年（1830）の竣工記念碑、明治24年（1891）の竣工記念碑、昭和30年の改修記念碑、昭和58年の改修記念碑があり今でも豊かな水を蓄え、昔から長年に亘って地区の水資源確保の努力がなされてきたことが分かります。吉田地区の人々は、工事用機械がなかった江戸時代から、人力によって山間地の水不足解消を目指す難しい工事の取り組みには、当時の人々の苦労が偲ばれます。

【竣工改修の記念碑】

なお、昭和58年の改修工事は、農地の水資源と共に防災の観点からも事業が推進され、水害や土砂崩れ防止のための事業でもあったと記されています。

（7）皿屋 編

1　皿屋区について

皿屋区は、世帯数 268 戸（令和元年現在）あり、吉田では最も大きな区です。寛永 16 年（1639）に鍋島直澄公が蓮池藩初代藩主となると藩の支援により窯業が大きく発展しました。時代に翻弄されて好不況はありましたが、現代まで窯業の歴史は絶えることなく続いています。

『嬉野吉田郷土読本』（昭和 10 年刊行）には吉田の昔話や言い伝えが細かに書かれ、町の様子については、次のような文が見られます。

> 皿屋には沢山の煙突が高く空につき立って、黒い煙をむくむくはいて居ますね。煙突が青空に突立っている景色、焼物のかけら等がごろごろとしている光景などは、吉田でしか見る事の出来ないものです。他の村にはめったにない景色です。皿屋があんなに盛んになったのは長い年月の間、沢山の人が色々非常な苦しみや悲しみに打ち負けないで一生懸命働いたからです。吉田にどうして焼物が始まったか、いつ頃から始まったか、又その始めた人は誰か知っていますか。（原文引用）

【皿屋区の史跡や名所】

右の写真は昭和初期の頃と思われるものです。煙突が聳え煙が風になびいています。

【煙が上がる皿屋風景】

【大定寺前で踊る人々】

【子ども神輿】

平成 28 年に開催された「皿屋地区写真展」の資料には、時期は不明ながら、大定寺や吉浦神社での「おやまさん祭り」の踊りや「おくんち」の風景もあり、住民挙げて祭りに参加し賑わいを感じます。昭和56年のおくんちから「子ども神輿」が始まり、祭りを盛り上げる人々のつながりや一体感が伝わります。

中学校教師だった副島和美様（昭和２年生まれ）に、昔の皿屋の様子をお尋ねしたところ、

> 幼い頃、皿屋は人通りも多く活気がありました。以前の皿屋の本通りは、皿屋代官所跡の碑が立つ道でした。通りには食料品や日用品の店があり、父は、「豆腐屋さん」をしていました。今の皿屋の大通りは、後に出来た道です。祖父は、皿屋公民館辺りにあった登り窯の窯元で働いていました。子どもの頃、皿屋の祭りは子ども相撲大会が盛んで、「大定寺」・「皿屋天満宮」・「下皿屋天満宮」・「羽口坂の地蔵様前」の４ヵ所で行われていて、出場するのが楽しみでした。

と話され、祖父の作の徳利と「県立佐賀好生館」と書かれた皿を見せてもらいました。祖父の仕事場は、江戸期に吉田山（皿屋辺りの総称）に３基あった登り窯のいずれかと思われます。

【徳利と皿】

別の方々に尋ねると、「今の本通りは、大正時代末頃できたそうだよ。」「本通りには、歯医者や床屋、魚屋、駄菓子屋等があり、おくんちの時は出店が並び賑やかでしたよ。」「砂利道だったので、石炭の燃えカスを道路に撒いてでこぼこ道を均していたよ。」「きれいな焼物片を持ち帰ったこともあったよ。」など、懐かしく話されました。

【未舗装の本通りと家並】

丸田誠一郎氏は、皿屋区の方々に聞き取りをして以前の商店を調査されています。県道嬉野吉田線の両側と旧本通り（馬場通り）にも多くの商店が並び生活の息吹を感じる町並みだったようです。

① 旧本通り商店

・田中医院
・山口菓子箱
・中村酒店
・溝上菓子タバコ店
・お芝居
・岩永豆腐店
・吉田郵便局
・谷歯科医院

（馬場通り）

② 現本通り商店街 **※時期は、戦後～昭和 40 年代頃**

・宮崎雑貨店
・田中畳店
・栗林板金・ガラス
・中野理容店
・副島松平タバコ店
・吉崎食料品店
・山崎豆腐店
・副島コト小間物店
・丸田酒店
・冨永商店
・鶴田魚店
・大串醤油・萬壽店
・石井履物店
・松尾青果店
・江口理容店
・パチンコ店
・岩永洋品店
・峯村電器店
・野中饅頭店
・清水豆腐店
・山口自転車
・副島金物店
・堤板金店
・小池時計修理店
・製材所
・映画館

下皿屋バス停　（**県道嬉野吉田線**）　上皿屋バス停　羽口バス停

・西島仏具店
・原自転車店
・田口理容店
・副島四郎魚店豆腐
・矢部商店
・田島米・タバコ店
・中島呉服店
・副島食料品豆腐
・岩永精米所
・佐賀銀行吉田支店
・大渡商店
・佐熊増美商店
・前田熊雄商店
・増田徳義商店
・魚貞井手魚店
・上滝酒店
・古田タバコ店
・上滝衣料品店
・宮崎理容店
・奥山製材所
・井手豆腐店
・白仁田石材店
・畑瀬美容院
・小原みつの質店

【呉服店】

【電器店】

左の写真は、皿屋区写真展の時に提供されたものです。商店街一覧は、聞き取りにより作成したため並び順や位置等、曖昧な面もあります。また、現在営業されていても、出店が新しい場合は記載されていません。

2　吉田焼のはじまり

皿屋区は、一帯を吉田山と称される蓮池藩の領地であり、近世から「伊万里焼」「有田焼」として焼き物を生産してきました。昭和 62 年、地元の人が偶然に「色絵陶片」を見つけたことがきっかけで、翌年、吉田の焼物の謎を解明しようと皿屋天満宮近くの「吉田２号窯跡」が発掘調査され、色絵磁器の陶片、碗や皿、瓶などが発見されました。色絵は、古九谷様式に類似するものであることから注目度も大きかったようです。その後、平成６年に発掘された納戸料の「森遺跡」や、未発掘ながら「祇園幽軒遺跡」も存在します。これらは、佐賀本藩の領地だった真上吉田の「吉田１号窯跡」と同様に、江戸期の吉田村の窯業が栄えた歴史を窺うことができます。

吉田地区の窯業のきっかけは、天正５年（1577）吉田左衛門太夫家宗により、西川内区の羽口川の上流鳴谷川で川底から白い陶石（鳴川石）が発見され、この陶石を使い窯業が発展しました。発祥と発展には諸説があり『嬉野吉田郷土誌』や『嬉野町史』には次のような記述が見られます。

（１）鍋島直茂公が慶長３年（1598）朝鮮戦役より帰陣のとき、陶工を連れ帰り、その中の一人を吉田山に遣わし、家宗が発見した陶土に、中通り鳥居原の礬土を加えて陶器を製造したのが吉田山の始まりであるという説

（２）寛永 16 年（1639）に鍋島直澄公が領主となった後、寛永 20 年（1643）に有田より招いた副島雲谷が吉田皿山を開窯した説

（３）鍋島直澄公が、蓮池領の五町田や久間に開窯の後、承応３年（1654）吉田焼を始めた説
（４）鍋島直澄公が、寛文年中（1661～1673）有田南川原から、副島、牟田、金ヶ江、家永の４名を指導者として迎え、従来の小窯を廃して２登の大窯を築造したとする説

いずれの説によっても、吉田焼の始まりと発展には、蓮池藩特に鍋島直澄公の功績が大きく、直澄公は吉浦神社に祀られるほどでした。直澄公は、隠居所として吉田山の背後の高地に「医福寺」を建立した後、蓮池藩士や副島等４人を加えた１６人に窯業を限定する「叢雲の鴉」という墨付を与え、吉田窯焼の権利を与え発展させたそうです。

３　吉浦神社

【吉浦神社鳥居】

大定寺隣には、塩田町五町田の吉浦神社から別院として分社された吉浦神社があります。これは、蓮池藩初代藩主鍋島直澄公（佐賀藩主勝茂公３男）が寛文９年（1669）に 55 歳で亡くなると、吉田皿屋庶民が直澄公の逝去を悼み祀った神社とされます。直澄公は、吉田に窯業を推奨し有田から指導者を招致するなど窯業発展の礎を築き、陶器山創業の祖神として尊崇されました。大定寺住職によれば、「皿屋の商人や窯業関係の人々は、五町田「吉浦大明神」に参詣していたが分社され喜んだそうだ。」とのことでした。

【吉浦大明神】

【八大龍王神】

神社には、直澄公の没後 250 年祭で「大正７年奉祝年」と記した鳥居が奉納され、奥には、「吉浦大明神」慶応４年（1868）の祠が祀られています。また並んで、水神「赤仁田辰ノ口八大龍王神」の祠があります。祠は、窯業に必要な西吉田区赤仁田の辰ノ口水源に感謝したものと思われます。

ところで、神社に祀られた直澄公は、藩主の座を嫡男直之公に譲ると、亡くなる 55 歳まで塩田五町田の別館にて余生を過ごしたそうです。その後、２代目直之公は、塩田町の「吉浦神社」に「秀天霊社之碑」を建て直澄公の霊を祀りました。近年、直澄公の没後 350 年を迎え、功績を見つめなおす行事が行われました。

４　江戸期の吉田焼

吉田焼は、蓮池藩の吉田山（皿屋）の焼物と佐賀本藩の家臣、鍋島傅兵衛家領の白岩山（中通り）の焼物とをあわせた総称です。白岩山の焼物は、18 世紀末から始まったとされ、皿屋の窯業が先に始まっています。元和２年（1616）、李参平により有田泉山で磁鉱石が発見されると有田では窯業が大きく発展しました。そして、有田の陶工達は各地に移り住み、窯業も広がりを見せることとなりました。鍋島直澄公は、吉田山（皿屋）にも陶工（副島、牟田、鐘ヶ江、家永）４人を連れて来て、焼物づくりを広げていきました。

なお、吉田の陶石の不足を補う有田泉山の陶石は量が限定されていたため、正徳２年（1712）肥後国の天草陶石が発見されると、塩田港で陸揚げされ吉田山でも使われるようになりました。

17世紀半ば、山林保護のために業者数が制限された時期の不況もありましたが、享和年間（1801～1804）の頃に、副島弥右衛門が統制を破って事業拡大を図り、新しい窯を始めると「文化文政時代」（1804～1830）の頃には大阪等へ販売が広がり盛況になりました。そのため、藩の収入が増えると藩から保護されるようになりました。その後、資金調達ができず衰退を見ますが、天保 15 年頃（1844）には、８代藩主鍋島直興公が再興に尽力したとされます。

5　明治以降の吉田焼

明治期になると、鍋島藩は廃藩置県により、明治４年(1871)に伊万里県、明治５年(1872)には佐賀県となりました。明治９年(1876)には三潴県、同年(1876)長崎県となりましたが、明治 16 年(1883)には、再度佐賀県となりました。長崎県となっていた明治 10 年(1877)、吉田焼は９軒の窯元が、水指、急須、せん茶碗、奈良茶碗、吸物碗、湯呑、蓋物などを「内国勧業博覧会」へ出品しています。明治６年（1873)、副島利三郎の発案により陶磁器製造会社「精盛社」が設立された影響もあって、白岩山の窯は、明治 13 年（1880）頃になると生産も落ちており、明治 14 年(1881)頃には、白岩山の窯元のほとんどは皿屋に移転したようです。一方、吉田山(皿屋)は、新たな登り窯を築窯するなどして中国への輸出に力を入れ、生産を上げた時期もありましたが、日清戦争〔明治 27 年（1894)～明治 28 年（1895)〕の影響で中国との取引は減少しました。

その後、大正初期には、朝鮮向けへ転換を図り生産がピークとなりました。その立役者が大串音松です。４カ所の登り窯を造ったり、石炭窯を取り入れたりと工夫改善をして、吉田山の生産額の 1/3 を売り上げ、生産に大きな貢献をしました。大正 14 年（1925）には、功績・人徳を称え「大串音松記念碑」が下皿屋地区に建立されました。なお、中通り区に立つ高倉稲荷神社入口の鳥居は、大串音松の寄進により建立されています。

【大串音松記念碑】

吉田焼は、明治・大正と製品の研究が進みます。明治 43 年（1910）には、有田黒牟田から迎えた梶原墨之助により「錦絵付」の技法を成功させ、どんぶりや菓子碗に用いました。しかし、安い美濃製品の進出に押されると、大正 12 年（1923)、窯元の大串脇次等５人は、美濃へ視察に行き、石炭窯を学び製法改善やコスト削減に努めました。その後、第一次世界大戦後の不況を受け、吉田焼は、朝鮮向けから国内向けに転換せざるを得なくなりました。

このような時、昭和２年（1927）に「皿屋大旋風」が発生し、皿屋の窯業に大損害を与えてしまいます

〈皿屋大旋風〉昭和２年１月７日深夜に発生した大旋風は、自然の猛威を受けた大災害でした。それは、急激な気圧低下の影響を受け、激しい雷雨の発生と突風が中通り辺りから皿屋を直撃したことにより大きな被害が出たというものでした。全半壊は６戸とされるも、家屋 190 戸に何らかの被害があったそうです。窯業用の煙突１２本、水車倒壊３棟の被害をはじめ、窯業に必要な用具や資材も被害が甚大で、皿屋地区の基幹産業である窯業は大打撃を被ったそうです。（参照：『嬉野町史』）

6　戦中・戦後の吉田焼

第２次世界大戦は、出征のため陶工の減少を招き、窯元は企業として後退せざるを得なくなりました。また、時代を反映して、窯元は企業合併を行い「吉田製陶株式会社」（社長石井精一）を設立し、軍需工場として軍用食器作りに励んだ時期もありました。

【吉田皿屋ひかりぼし】

終戦後は、「吉田製陶株式会社」は解体され、各窯元が個人で経営することになり、新規窯元も誕生して 20 余業者となったとされます。昭和 24 年（1949）「肥前焼窯元協同組合」が設立されると、組織として事業の改善や品質向上に取り組みました。しかし、不況の波もあり、昭和 35 年（1960）頃までに廃業した業者も多数あったそうです。その後、燃料が石炭から重油や灯油へ代わり、ロクロ技術も大きな変化を見せて短時間での焼成が可能となりました。

平成８年、窯元会館が作られ、「肥前焼窯元協同組合」は、「肥前吉田焼窯元協同組合」と改名されました。令和元年現在、吉田焼の発展と地域への多様な販路を見出すための取組みとして、４月

初めに「お山さん陶器祭り」(33 回開催)、11 月に「辰まつり窯元市」(31 回開催) が開催されます。また、平成 30 年から 10 月末に、窯元会館及び各窯元での「吉田皿屋ひかりぼし」や「えくぼとほくろ」と称する企画等により活性化を図っています。

7　吉田焼の発見と地域について

(1) 祇園地区周辺

【祇園社】

① 皿屋区の北部丘陵の祇園地区に「幽軒屋敷」と名づけられた所があります。蓮池藩に複数いた医者の中の一人で、鄭家の屋敷跡とも伝えられ、代々続いた幽軒の名が残ったようです。昭和 62 年頃、この周辺から偶然赤絵陶片が見つかり、調査・研究がなされ 1650 年～ 60 年代のものと分かり祇園幽軒遺跡とされました。赤絵発見の年代が早く、吉田の焼物が見直されるきっかけともなり、「吉田２号窯」や納戸料区の「森遺跡」等の窯跡の発掘につながりました。

② 下皿屋のお堂には、「祇園社」文化４年(1807)が祀られ、地区の方がお世話されています。一説では、「祇園社」は、病気や災厄を退ける牛頭天王の神(祇園精舎の守り神)を祀る京都の八坂神社の分社で、全国に分社があるようです。祇園社は、疫病を流行らせる行疫神を慰めることで疫病を防ごうと建てられたともされ、ある方は、「昔、吉田にコレラが流行った時、改めて祇園社が祀られたと聞いたことがある」と話されました。

③ 戦後、「祇園地区」は、西川内区の「水頭地区」と同様に外地引き上げ者や復員者などによる開拓団の入植があった地域です。『嬉野町史』にある『佐賀県開拓農業三十年史』には、18 戸の入植記録があり食料確保や困難な開墾に立ち向かい、お茶をはじめ農業に従事されました。

④『佐賀県遺跡地図』によれば、縄文時代の「祇園遺跡」の存在も確認されています。

(2) 吉田焼窯跡　吉田２号窯跡

蓮池藩の窯であった２号窯跡からは、1650 年代から明治以降までの物が出土しています。出土物は、草花文の皿や絵皿、また碗皿の中央に「日」の文字を描いた特徴的な出土品が見られます。色絵の製品も焼成され、陶片から古九谷様式に近い物が見つかり専門的な見地からも２号窯が話題になったそうです。九州陶磁文化会館館長の鈴田由紀夫氏の文献では、発掘の頃、２号窯の製品がインドネシアで見つかったとされ、国内・アジアへ流通販売に力を注いだ歴史が窺えます。右の「幕末の吉田皿屋村図」には、皿屋に３基の登り窯が描かれています。吉田２号窯は、その中の１つと考えられ、２基は、皿屋公民館やその周辺にあり、一帯が窯業の中心として栄えたと考えられます。

「鍋島報效会所蔵」【吉田郷図－皿屋村図】

(3) 八天狗

皿屋公民館東側、吉田２号窯跡近くに、「八天狗」元禄 14 年(1701)が祀られています。八天狗は、霊峰八山に住む天狗で修験道と関係が深いとされる想像上の霊神です。八天狗は八天宮や八天神社とも呼び、火伏の神、家内安全の神として崇められてきました。皿屋村でも守り神として祀られたと思われます。３つ並ぶ一番右の祠は、「天満宮」「正八幡宮」「稲荷社」を祀り、いろいろな願いを込め祀られた祠だったようです。

八天狗は、皿屋区羽口に、正徳元年（1711）、その他、峰川原区川内、東吉田区、上吉田区岩ノ下、西吉田区赤仁田にも祀られています。八天神社宮司によれば、神社に参詣出来ない人々のために、昔、吉田各地に「八天狗（大神）」が祀られたそうです。なお、現在の八天神社は、明治６年まで「唐船山八天狗神」、後に「唐泉神社」とも呼ばれたそうです。

【八天狗と天満宮稲荷社】

【羽口の八天狗】

8　皿屋天満宮（下の宮）

10 月に行われる納戸料の葦筒神社（和銅３年遷座：説）の例祭では、祭神である「国之常立尊・大国御魂命」を伴い、前日夕刻に下の宮の皿屋天満宮へ「御下りさん」が行われ、翌日朝に「御上りさん」が厳かに行われます。一説では、明治初期までは、神様は東吉田区の本木権現に祀られていたとも言われますが、長い間、葦筒神社と皿屋天満宮の間で祭事が行われてきたようです。天満宮の本宮内には梅の紋がちりばめられた「菅原道真像」宝暦３年（1753）が祀られ、お宮は、想像上の「麒麟」や「象」などの彫り物が飾られ静かに見守っています。拝殿は、昭和 48 年に改築され現在に至ります。

【天満宮鳥居】

【菅原道真像】

天満宮前には、「月夜見尊」や「猿田彦大神」慶応元年（1865）が祀られています。旧暦 23 日の夜に、講の仲間が集まり飲食を共にし、月の出を待つ行事を三夜待と言います。神道系では月夜見尊、仏教系では勢至菩薩が祀られます。

「猿田彦大神」は、平安時代から広まり、街道の出入り口に道祖神として祀られ、「災難が去る」「幸福が訪れる」という中国より伝来した庚申信仰となり、60 日ごとの庚申（かのえさる）の日に祭りを行ったそうです。その夜は、人間の体の中にいる三尸の虫が、人が寝ている間に体の外に抜け出し、天帝（古代中国の天上の最高神）にその人の罪や過失を告げ、寿命を縮めるという謂れに由来し、虫が出ていかないよう寝ずに夜を明かしたとも言われます。古来、貴族を中心に広がり、江戸時代に庶民にも広がったようです。これは、下皿屋天満宮や羽口坂にもあり、大事にされてきました。

【月夜見尊】

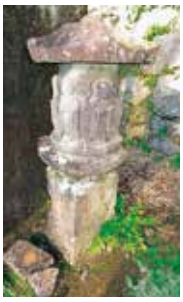
【猿田彦大神】

9　下皿屋の天満宮

下皿屋の道路脇に、幾つかの石祠が集められ祀られています。一番左には、下皿屋天満宮として「菅原道真像」享保８年（1723）が地域の守り神として大事に祀られ、祭事と共に子供相撲などの奉納行事もあっていたそうです。

【菅原道真像】

【猿田彦大神】



【六地蔵】

【天照大皇神】

その他、「十一面観音像」「一字一石塔」「弘法大師像」などの石祠が並び、住民の信仰の場として守られてきました。「十一面観音像」は、人間の十種の様々な不幸や災害から守り、４種の功徳が得られるという観音様だそうです。「一字一石塔」は、日蓮宗を尊崇した人々による祈りの石を土中に埋め込んだとされる仏塔です。独特の文字により“南無妙法蓮華経”と刻まれ、東吉田区の本覚寺や鳥越峠でも確認できます。また、嬉野地区でも珍しい“元禄”と読み取れる「天照大皇神」（伊勢講のためのもの）の石祠もあり、皿屋区の信仰の歴史に触れるようです。

10　羽口坂の石祠群

吉田郵便局を少し上ると石祠群が並ぶ場所があります。これらは、地域に散在していたものを集められたようです。その中には、「青面金剛」文化８年（1811）があります。これは、「猿田彦大神」と同様に庚申信仰により祀られたものです。「馬頭観音像」文政２年（1819）１体と大正 15 年（1926）２体の他、「弘法大師像」の石祠もあります。なお、ここでも奉納子ども相撲大会が開催されていました。

【青面金剛】

【馬頭観音像】

11　真言宗　姑射山大定寺

大定寺は、嬉野町下宿に慶長６年（1601）、嬉野領主の嬉野家通が開基となり、権大僧都阿金和尚の開山とされ、京都大覚寺の末寺とされます。蓮池藩の祈願寺として庇護を受けていましたが、明治４年の廃藩置県の際に寺領は没収され寺は荒廃しました。

【不動明王像】

【大定寺本殿と像】

寺には、皿屋区の檀家も多く、鍋島直澄公に縁ある医福寺（明治８年焼失）があった場所へ、要請があり明治 12 年（1879）に下宿から移転されました。

『嬉野町史』によれば、山門には、日本海軍の指揮官として日露戦争の勝利に貢献した元帥海軍大将東郷平八郎の直筆「姑射山」の寺額があり、これは、日露戦争直後の明治 39 年、将軍職だった方々と嬉野温泉来浴の際に書かれたそうです。

【山門額　姑射山】

本堂には、「不動明王像」があり、脇侍の矜羯羅童子と制吒迦童子の２軀の立像を従えます。境内には、八角形の十三佛永代供養塔や六地蔵、聖観音像、100 体以上の水子地蔵像も並びます。

【六地蔵】

「芭蕉句」碑もありますが、芭蕉が立ち寄った記録はなく、調べると芭蕉 47 歳の頃、琵琶湖西岸の大津に建てた「幻住庵」にて詠んだ句だそうです。

【芭蕉句の碑】

～「先堂のむ椎の木も阿り夏木立」（芭蕉）～

寺には、ご住職も見ていないと言われるほど代々の秘仏で、未公開の弘法大師親刻の尊像も安置されているそうです。

なお、下宿から皿屋に寺が移転後、「88ヶ所巡り」が始まりました。修験者は、１番札所を大定

寺として、88番札所の奥の院まで６日間で回ったそうです。しかし今では、社会が変わり巡礼者も少なくなって場所さえも分からない程になっているそうです。

寺内には、鍋島直澄公の位牌も安置されています。墓所は、塩田町五町田の光桂禅寺や吉浦神社（吉浦至誠山）、佐賀市蓮池町の蓮池藩の菩提寺である宗眼寺とされます。

12　大定寺　奥の院

大定寺の右脇の小道を上ると「奥の院」があります。整然と左右に並ぶ石仏は、以前は敷地周辺や奥の院への参道に散在していたものをご住職が集めたそうです。石仏の頭部は破損したものが多く、廃仏毀釈で破壊されたものであろうと思われます。

廃仏は、仏を廃（破壊）し、「毀釈」は、釈迦（釈尊）の教えを壊（毀）すという意味です。明治元年（1868）「神仏分離令」の布告を発端に、仏教を廃して神道を中心とした日本に戻そうとする偏った考えにより、一部の人々が仏教寺院や仏具、経典などを破壊する悲劇が発生しました。しかし、これは日本の仏教を考える機会となり、一時期を過ぎると落ち着きが見られたそうです。奥の院のお堂裏には、札所番号が刻まれた仏像も確認でき、吉田地区内の巡礼札所も被害にあったのではと想像されます。

【奥の院】

【奥の院　薬師如来像】

13　吉浦神社近くに建てられた碑

大定寺辺りは、“九州オルレ嬉野コース”で、一角に３つの碑があります。

（１）陶業に携わった方々へ敬意を表す「先人陶業人の碑」（平成３年）があります。また、若い陶業者の活躍を期して旧嬉野町が建立しました。

（２）陶器製「馬頭観世音菩薩像」は、昭和４年「朝鮮馬匹友愛会」から奉納されました。像は、裏面に「大川内山」とあり吉田焼ではありません。

（３）吉田出身「牟田文吉先生顕彰碑」元治元年（1864）が建ちます。
母校の教壇に立った後、長崎師範学校に学び明治 20 年から吉田小学校や古枝小学校など 24 年間、校長を務めました。

【先人陶業人の碑】

14　家永利三郎先生顕徳碑

下皿屋に、吉田出身の教育者「家永利三郎先生顕徳碑」があります。明治 36 年、学校教育に茶業を始めたとされ、また社会教育でも功労が称えられています。なお、家永利三郎先生の甥は、歴史教科書の記述内容等で裁判を長年行った「旧東京教育大学教授　家永三郎氏」だそうです。

１５　皿屋代官所跡の碑

旧本通りに立つ「皿屋代官所跡」の碑は、旧嬉野町が平成 11 年に建てたものです。寛永 16 年（1639）に支藩となった蓮池藩では、政治制度上、藤津郡・杵島郡・松浦郡の統治を行なう「塩田役所」を作り、「頭人」という役職を置き、藤津郡吉田と杵島郡成瀬には「代官所」が置かれ代官などの役人がいました。吉田に代官所を置いた理由は、財源となる吉田皿山と志田西山（現久間）を監督するためだと思われます。『蓮池藩請役所日記』には、有田泉山の陶石搬入の許可や量・製品の確認、紛争の調停などを行った記録が残っています。皿屋代官所では、年間 500 俵（25 トン）を毎月分割して渡される陶石の管理をしていたそうです。

【皿屋代官所跡】

（8） 納戸料　編

1　納戸料区について

佐賀本藩領だった納戸料区は、吉田川に沿った低地と斜面にあり、現在 30 世帯を有する区です。

“納戸料” の名前は、納戸料の年貢が佐賀本藩の御納戸方（衣服・調度の出納、献上品・下賜の金品の管理等を行う役職）の費用だったことに由来するそうです。佐賀本藩領の納戸料は、蓮池藩領だった東吉田から農業用水使用料を徴収するなど、優位な立場であったとされます。

【納戸料区地図】

2　葦筒神社 〈祭神：国常立命　大国御魂命〉

平安末期から鎌倉時代の頃には、吉田川流域に 60 町（丁）が開け、昔から、葦筒神社は吉田郷（村）の鎮守だったと思われます。明治 39 年、国が「村社は行政村ごとに一社とする」という政策を出すと、葦筒神社は村社となりました。

【明神鳥居と奥の本殿】

これは、日露戦争の頃で、国を挙げて神道が重んじられたことによります。

『嬉野町史』には、〔いつ神社が造られたか不明で、江戸期は吉田郷の氏神神社だった。社伝には、昔神社の場所を吉田村中通白岩にしようとしたら、〈松葦にせよ〉と神のお告げがあり、一夜で周り 50ｃｍ程、天に届く高さの大葦一本を御神体に祀り、名前を「葦筒」とした。また、葦が育った場所を「葦窪」、「葦田」と言った。その後、納戸料鍛冶屋敷に神社が移り、和銅３年（710）現在地に移された。鍛冶屋敷社地跡に柿の古木があり、毎年供物として捧げていること、正元元年（1259）北条時頼公が諸国巡歴の時、病になり神社に祈願したら忽ち治り、時頼公は木造の狛犬を献納したこと〕との記述があります。

両岩神社にも時頼公の伝説が残り、神社の繋がりも想像されます。なお、本殿は、鏡と思われる重厚な円形の御神体が祀られ、左右に従者が鎮座しています。

【左の従者】

【本殿内の様子】

【右の従者】

神社入口には、寶永年間（1704～1711）に寄進された「明神鳥居」が建ち、領主鍋島摂津守藤原朝臣直之（蓮池藩２代目）が、延宝４年（1676）に社殿を造営したことが刻まれています。明治 34 年と昭和 55 年に建てられた碑に神社由緒記があり、寛政元年（1789）に鍋島甲斐守藤原直温（蓮池藩７代目）が社殿を造営したことや由来が刻まれています。また、江戸期以降に寄進された奉献塔や石祠、昭和になっての新しい碑や狛犬等もあり、村の祭事の中心に葦筒神社があったことが分かります。

（1）百年事業記念碑・狛犬（石像）

昭和43年「明治百年記念事業」が行われ、宮司の吉富松恵氏は、本殿、拝殿、幣殿、舞殿の修理などのことや「一重に御鎮座以来 1260 年の永い間氏子の皆々を守り導き、氏神様への思慕奉賽の誠至なり」という言葉を碑文に記しています。また、昭和 60 年に奉納された狛犬一対があります。堂々とした風貌で境内を見渡しているようです。

【百年事業碑】

【狛犬】

（2）清国軍艦の艦号文字

拝殿には、清国軍艦の艦号「鎮南」額が奉献されています。この艦号は、明治27年の日清戦争の時、日本軍が黄海海戦で勝利した後、清国の威海衛の軍港から捕獲し、佐世保港へ回航された９隻の中の１隻とされます。艦号は、戦勝記念として艦艇から外されたもので、明治33年に佐世保鎮守府から奉献されたと艦号枠に説明が記されています。

【艦号名「鎮南」】

なお、葦筒神社に奉納されたものと同様な艦号額が小城市にもあり、昭和 45 年の『小城市歴史広報誌』には、そのほか、８隻の艦艇の名前や終戦時の逸話、小城市の牛ノ尾神社に「鎮南」額、天山神社に「鎮西」額が奉納されているという記述が見られます

（3）「天照皇太神」・「葦筒大明神」等の石祠

本殿裏には、下吉田村寄進の円形の「天照皇太神」元禄14年（1701）が祀られています。「天照皇太神」は、太陽神として自然への脅威と崇拝、五穀豊穣や健康安全などを願い信仰されました。また、上吉田村寄進の「葦筒大明神御寶前寄進」寛文13年（1673）のほか、「山の神」天明元年（1781）、「稲荷社」文化９年（1812）などの石祠も奉納されています。

【天照皇太神碑】

秋の例大祭では、下吉田区を含む８地区が輪番で葦筒神社の氏子としてお供日を仕切ります。当番地区は、周到な計画と準備、練習を行い五穀豊穣や安全等を祈願するために特色を生かした浮立や踊りを奉納します。なお、前日夕方に、皿屋天満宮を下の宮として「御下りさん」、当日朝に「御上りさん」を行い、鉦・太鼓・笛などの音を響かせ神輿行列が行われます。祭事を一目見ようと神社は参拝者で賑わいます。

例大祭の日は、「活き生き吉田会」を中心に、農産物の紹介や販売を行い祭りを盛り上げると共に地域活性化に努力される姿が見られます。

一方、８年に１度の当番地区は、高齢化と人口減少により、古来から伝わる伝統芸能の後継者が少なくなり、両岩区の佐賀県重要無形文化財「小浮立」をはじめ、各地区の浮立についても、今後が危ぶまれる状況となっています。

【神輿】

【賑わう境内】

3　百年桜

鳥越トンネルから見える納戸料の茶畑の中腹には、樹高13m、樹齢100年以上を誇る八重桜が立っています。昔から、地域の人々にはよく知られた桜でしたが、広報誌で取り上げられると一躍有名になり観光スポットとなって、多くの観光客が訪れるようになりました。そのため、地元では、

美しい一本桜を残そうと枝の補強や土壌改善、除草などに力を入れ保全に努めると共に、支援を受けて百年桜の周辺にも桜を植え、観光客を楽しませる場所にしようと努めています。開花の時期には「百年桜まつり」が開催されます。「地域コミュニティ運営協議会」や「活き生き吉田会」では、百年桜の魅力を引き出し、地域の宝を住民や観光客に見てもらうため、数年前からライトアップの取組みも始め、観光客も年々増加傾向にあります。しかし、令和２年の台風被害は、地元民にとって大きな痛手でした。

【百年桜とお堂】

４　納戸料の石祠

（1）百年桜近くの堂

百年桜の大樹の真下には、お堂が造られ石祠５体が鎮座しています。これらは、近くにあった石祠を纏めたと思われ、お堂の左脇には、朱色が微かに残る「馬頭観音菩薩像」が祀られています。

【お堂】

【馬頭観音菩薩】

【如来像】

堂内には、青色が微かに残る「不動明王」像のほか、「住吉大権現」「阿弥陀如来」等の石祠が祀られています。

また、駐車場近くの倉庫横のお堂に２つの石祠があり、１基には梵字と「為」の文字が読み取れ、供養塔の「阿弥陀如来」だとされます。

この周辺は、多くの石祠や像があり、先人の神仏への信仰の深さを感じることができます。

【阿弥陀如来】

【住吉大権現】

【不動明王像】

（2）納戸料公民館前のお堂

お堂には、９基の仏像や石祠が祀られます。江戸期に祀られたものには、奉献塔の「地蔵大士」貞享元年（1684）があります。２基１対が普通なので１基は紛失したようです。その横には、「地蔵菩薩」享保 10 年（1725）が鎮座しています。「観音様」元禄 16 年（1703）などもあります。

中には、“地蔵祭り”で祀られる「束帯姿の像」享保 10 年（1725）があり、冠、笏を持ち、太刀を帯びた気品ある姿は「菅原道真」だと思われます。『嬉野町史』では「天神講塔」の類と記され、納戸料の天神社として信仰されたものと思われます。

【公民館前のお堂】

明治期以降のものは、「弘法大師」（明治 22 年）と「十一面観音菩薩」（明治 22 年）があります。「十一面観音菩薩」は、鎮護国家や病気治癒等を祈願したとされるもので、頭頂部には 10 の仏様がおられ、後頭部には悪行を笑い飛ばす「大笑面」というユニークな仏様もおられるそうです。

また、「毘沙門天像」寛保元年（1741）が、堂の右奥に祀られています。毘沙門天は、帝釈天に使える四天王の一つで、「多聞天」の別名があります。四天王は、邪鬼などから四方を守護する神とされ、毘沙門天は、武装して武器を持ち北方を守る神だそうです。

【地蔵大士塔】

【弘法大師】

【毘沙門天像】

5　納戸料区の祭り

納戸料区では、1月24日（暦“初地蔵”の日）に石祠がある5ヶ所で「地蔵祭り」を行います。祭りの対象は、皿屋区にある「弁財天社」の左の石祠と祇園の石祠、葦筒神社奥の石祠、お堂横の念仏塔（念仏聚會）、お堂内の束帯姿の像であり、様々な石祠や像です。

祭りは、地蔵様を清め三角おにぎりを供えお参りします。地蔵祭りは、東吉田区など、他地区でも伝統を引き継ぎ実施されています。地区の伝統的祭事は、次世代に引き継いでいくことが必要です。

【弁財天社の地蔵】

【祇園の地蔵】

【葦筒神社地蔵】

【念仏聚會】

【束帯姿の像】

地蔵祭りの対象である「念仏聚會」元禄8年（1695）の祠は、念仏塔と呼ばれ、鎌倉時代末期から造られ始めました。念仏信仰（浄土信仰）を行う人々の集まり（念仏講）では、造塔すれば信仰心が深まるといった功徳も説かれ各地に広がりました。

なお、納戸料区では、6月に豊作祈願の「田祈祷」、8月に「地蔵御大師さん」祭りも行われます。

6　森遺跡

皿屋区編で紹介した森遺跡は、納戸料区から皿屋区にかかるバイパス道路坂道辺りにあり、江戸期の焼き物の遺跡です。遺跡は、蓮池藩所領の「吉田2号窯跡」から北へ600m程の場所で、今では道路造成により確認できません。平成6年度（1994）に遺跡の発掘が行われ、井戸状遺構や溝状遺構が確認され、吉田2号窯で焼成されたと思われる瓶の完全品（写真）なども見つかりました。『森遺跡調査報告書』平成8年（1996）によると、住居跡も見つかったことから、18世紀末頃までは集落が存在したのではないかと記されています。

【森遺跡発掘の瓶】

【森遺跡発掘現場】

7　吉田地区の保育施設

吉田地区に子どもが多かった頃は、4つの保育施設があったそうです。1967年に開設された旧町営吉田保育所は、私立皿屋保育園と共に、平成12年3月に閉所となると、園児は、同年4月に開園した吉田保育園に通うことになりました。

【小学校横の旧吉田保育所】

【吉田保育園での吉田夏まつり】

令和元年度、吉田保育園には90人が在園し、半数が吉田の子どもたちです。残念ながら、出生数の減少により吉田地区の過疎化は進行中です。子どもは、地域の宝と言われます。若い世代が吉田地区を背負っていけるよう子どもたちを応援したいものです。近年、この吉田保育園は、吉田夏まつり会場として地域の方々の交流の場となっています。

（9） 西吉田 編

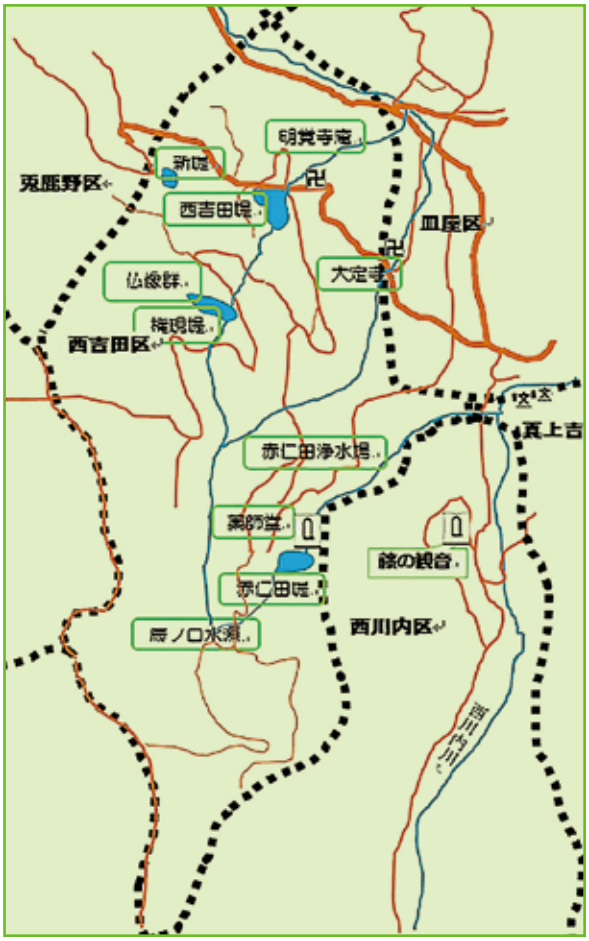
1　西吉田区について

西吉田区は西湯岳の南東部に位置し、『元禄国絵図』元禄 15 年（1702）には西吉田村と記され、蓮池藩領地でした。赤仁田地区は、佐賀本藩領で、鍋島傅兵衛の知行地だったとの記録もあります。明治４年に、吉田村となりました。

【鍋島報效会所蔵 元禄国絵図】

『藤津郡村誌』では、西吉田村は21の字があり、江戸期は、「兎鹿野」も含まれたという文献もあります。なお昭和 30 年には、赤仁田村・西吉田村などが合併し西吉田区となりました。『嬉野吉田郷土誌』には以下の記述があり、昔から「辰ノ口水源」の恩恵により生活が成り立っていたことが分かります。

> 「西吉田・赤仁田・皿屋は西北部高地にあり。土地高燥にして赤仁田堤より皿屋に流下する赤仁田水道、辰ノ口水源地より発して湯岳 堤に流入し、皿屋に流下する西吉田水道がありて、土地よく開け農産物豊富なり。戸数 300 に近く、名高き陶業地皿屋は此の高地の東端にありて、両岩の絶景を望み吉田盆地の関門を捉す」



【西吉田区図】

西吉田や皿屋は高地のため、吉田川の水が使えず生活・農業には苦労が多く、いくつも堤や溜池を築造したり、水路を造ったりして灌漑などに利用してきました。

2　辰ノ口水源地と水路

辰ノ口水源は、西吉田区南部、標高 250 mにある水源で、地殻を割って滔滔と噴出する清水は、干ばつでも涸れることがないそうです。50 mほど離れた所には、吉浦神社に祀られる水神「八大龍王神」と同じく文政３年（1820）と記された「八大龍王神」が祀られています。

【八大龍王神】

【湧出る水】

辰ノ口水源の水は、「西吉田水道」を通って、１本は赤仁田堤の方へ流れ、１本は、西吉田区、皿屋区の方角へ流れます。西吉田区や皿屋区は、吉田川の水を利用できない高地にあるため、農業や窯業、生活用水などは、この水源が頼みであり恵みでもありました。今でも湧き出る水量は多く、水路を伝って流れています。

なお、1700 年前後、吉田川水系の春日には、高い技術で約４㎞の「一里溝」が造られたとされます。年代は不明ですが、広川原を水源とする峰地区にも「上峰水路」「下峰水路」が造られて地域を潤しました。また、西吉田村や赤仁田村には灌漑用水の堤として、赤仁田堤や権現堤、湯岳堤、

新堤が造られました。

貴重な水は、取り決めが作られ、『嬉野町史』には、「今般、西吉田村に新田を開くが赤仁田村、皿屋３ヶ村への引き水は、辰ノ口より」天保 13 年（1842）、と記された史料が赤仁田区にあると記されています。

【水源に立つ看板】

ところで、鹿島藩３代藩主の鍋島直朝公は、1600 年代中・後期に、春日の「一里溝」と同様に、上流から山の中腹を通した４㎞程度の水路を築き、高地の古枝や高津原へ水を引いて水田開発や堤の築造を行っていることから、蓮池藩や佐賀本藩、鹿島藩等は、技術・情報を共有して新田開発や用水路築造を成し遂げたと思われます。『嬉野町史』によれば、佐賀藩士南部長恒著の『疏導要書』天保５年（1834）には、吉田村、上峰や下峰の用水路についても書かれているそうです。

昭和 62 年（1977）、辰ノ口水源は、「佐賀県肥前名水」に選ばれ、水を求める方もいたそうです。

なお、これまで水が涸れることが無いとされてきましたが、令和元年度は入梅が遅く、堤の水量が激減して、６月末まで田植えをずらしたり、中には出来なかったりする田もありました。

３　西吉田を潤す堤

（１）赤仁田堤

窯元会館の先の道を左折すると「赤仁田堤」につながり、堤の土手には、皿屋と赤仁田をつなぐ道路竣工記念碑（大正 10 年）があります。堤は、『嬉野吉田郷土誌』では、〈貞享４年（1687）皿屋天上にある「天照皇太神宮」寛文 13 年（1673）、赤仁田堤の地鎮祭に際して、斎き祭りしものにして、此の堤は、延宝２年（1674）その工を竣へたりと云ふ。〉と経緯が記されています。　（※斎き≒尊い、清い、大切）

【赤仁田堤と道路竣工記念碑】

『赤仁田堤水口書附帳』文化 12 年（1815）には、水を、赤仁田村・皿屋・西吉田と西川内で７対３に分けるとあります。天保 13 年（1842）には、赤仁田村・皿屋村・西吉田村の庄屋・誓伺（紙）・年寄の村役３役、大散使利兵衛により、４項目からなる『約定一札覚』も作られました。

① 辰の口溝より水を引くときは、従来通り芝堰などせず互いに我儘な水引はしないこと
② 廻し水のときは、赤仁田・西吉田２か村にて話し合ってすること
③ 湯岳堤水少ない時は、皿屋・西吉田申し談じの上、権現堤より筌を抜き下堤へ流し込む。
④ 干魃のときは、新田干しあがっても古田を大事に引水すること

このように、水利権の取り決めをして村同士の水争いを避けていました。今でも取り決めは生かされており、大切に守られ引き継がれているそうです。

堤の横には、「八天狗大権現」宝永７年（1710）と「天満宮」文化 13 年（1816）の石祠があります。「天満宮」は、学問の神様のほかに、雨の恵をもたらす雷の神ともされ、赤仁田村の水を守る神様でした。また、赤仁田と皿屋天満宮とも密接な関係も窺えます。ここは、今も奉納行事が行われ、昔はお堂もあったということです。

【天満宮】

【八天狗大権現】

（２）西吉田堤（湯岳堤）

『嬉野吉田郷土誌』には、〈湯岳堤の築造は、寛文12年（1672）、皿屋瓢箪原に天照皇大神宮を祭りて地鎮祭を行ひ、延宝５年（1677）その竣成を見たりといふ〉、とあります。この堤も辰ノ口水源の水が流入し農業等に不可欠な水源です。以前の名前は湯岳堤でしたが、今は西吉田堤と呼ばれています。地域には、湯岳・湯尻の地名から、近辺には湯が出ていたのでは、という説もあります。

【西吉田堤（湯岳堤）】

（３）権現堤

辰ノ口水源からの水を湛える権現堤は、江戸時代に造られたと思われ、西吉田堤とも水路で繋がっています。堤は、西吉田の権現様と仏像群を見上げる位置にあり、堤の土手から権現様に通じる参道もあって権現堤と称されたようです。以前、西側の山は、権現様一帯が見えたそうですが、今では植林されているため様子を窺うことができません。

【権現堤】

西吉田区内の堤は、水不足の場合は、『約定一札覚』天保 13 年（1842）により補完する取り決めがされています。堤の土手や近くの棚田を見ると、板のように割られた石が丁寧に積まれています。ある方は、「一帯の棚田は、昔祖父が発破で石を割り石垣にして水田を造ったことを聞いた」と話され、山間地一帯の方々が田畑開墾・築造に苦労されたことが分かります。

4　権現さんと 13 仏

権現堤の西側の山には鉄塔が見え、そこは、嬉野オルレコースの休息所、遊歩道があります。そこから権現堤の方に下ると、神秘的な雰囲気の中に「権現様」と「13 仏」が鎮座しています。一帯は、西吉田区の守り神、神聖な場として大事にされてきました。権現様が祀られる近くの岩盤の隙間からは、湧水が流れていて、貴重な水源だったのではないかと思われます。

【権現様に上がる階段と石仏像】

権現様の祠は、厚い岩盤に囲まれ厳かさを感じる場所にあります。祠の側面には、貞享４年（1687）の文字が刻まれ、長い信仰の歴史が窺えます。権現像は色鮮やかな木製で、やや中華的な感じが漂う色・形をしていて、横に並ぶ 13 仏とは違う雰囲気です。祠の中奥には朽ちた金箔の木像１体も安置されていますが、古い時代に崇められていた権現様ではないかと思われます。また、この権現像は、熊野三山（和歌山県）の神像の 1 つに類似しているので、熊野権現の信仰によるものと思われます。

【石祠と権現様】

ところで、「権現様」は、仏や菩薩が人々を救うために仮の姿（神様）になって現れたもので、その現れた神様を「権現様」と呼ぶそうです。これは、平安時代の「本地垂迹説」によるもので、あらゆる神様と仏様が関連付けられ、元の仏様を本地仏と呼ぶようです。

13 仏は、像の横の円柱の碑に「昭和 17 年」と刻まれた文があり、像はまだ新しいようです。碑文には、天明 3 年（1783）の文字もあり、江戸期からの歴史が窺えます。なお、13 仏は、亡くなった人の追善の法事を修めるとき、その年忌に配当された 13 の仏を信仰するものです。ここの 13 仏もご供養の意味と様々な像のご利益を信じて奉献されたものと考えられます。近くには、明治 13 年に皿屋区で陶磁器製造会社の「精盛社」を設立した副島利三郎氏が奉献した「弘法大師」像をはじめ、数体の像も祀られています。

近くには改修された東屋があり、旧東屋から移された１対の獅子頭が一帯を見守っています。一説では、獅子は、16 世紀初頭の正月に伊勢国で飢饉や疫病除けに獅子舞を舞ったのが発祥とされ、縁起ものとして祝い事や祭礼で獅子舞が行われたそうです。恐らく、東屋の獅子頭は、西吉田地区の安泰や災難除けを願い、建て替え前の東屋、又は、その昔奉納されたものと思われます。

なお、西吉田区では、8 月 14 日の「灯夜」、8 月 31 日の「風日」の際は、一帯の清掃を行い、仏様の“前掛け”も新しい物に取替えるなどして、伝統を引き継いで奉納行事を行うそうです。

5　薬師堂（赤仁田）

赤仁田堤の 100ｍほど下に、赤仁田青年団建立の「薬師堂建築記念碑」（昭和７年）とお堂があります。お堂は昭和 50 年頃に修復を行い、薬師如来像２体、弘法大師像、地蔵菩薩像、観音菩薩像等、５体が鎮座しています。薬師如来の特徴は、左手にどんな病気も治す万能の薬が入った「薬壷」を持つことです。医療が十分でなかった時代は、仏様に頼ることも多かったと思われます。また、温泉に関わる仏様とか、薬草栽培が行われる地区に祀られる仏様との説もあります。

【記念碑】

【薬師堂の像】

赤仁田地区では、8 月 23 日、このお堂と堤の天満宮で豊作祈願の「燈篭明かし」を行い、12 月 12 日の「辰祭り」では杵餅をついたり、辰の口水源の「八大龍王神」前で感謝の祭りをしたりするそうです。なお、地蔵祭りのように三角に盛ったご飯をお供えする慣習も残っています。

6　赤仁田浄水場

家庭に水道水が供給される前は、井戸水や湧き水が一般的でした。衛生的な浄水施設が期待されていた折、昭和 36 年（1961）「赤仁田浄水場」が完成すると皿屋区では、祝賀パレードを行い、大いに喜びました。

【赤仁田浄水場落成式】

【祝簡易水道落成　皿屋】

吉田の上水道は、春日簡易水道（昭和 58 年）、岩ノ下浄水場（昭和 59 年）、横竹ダム（平成 13 年）と逐次作られ水道水供給の流れが整いました。その後、給水が遅れた地域も整備されました。

7　明覚寺庵と周辺

「明覚寺庵」は、『嬉野町史』とご住職によれば、井手川内の「浄土真宗東獄山明覚寺」天文２年（1533）創建の庵寺で、嬉野町上岩屋に「岩泉庵」もあるそうです。

明覚寺開基は、明覚寺庵住職の祖先で、肥後国出身の「釈慶」と言い、俗名富永庄左衛門尉采邑です。西湯岳に住み仏門に入ったそうです。庵は、明覚寺の分家で、明覚寺より 100 年ほど後にできています。

【明覚寺庵】

【弘法大師像】

聞けば、明覚寺庵本堂は、戦後、西吉田公民館ができるまでは、地域の青年団に集会所的な場として開放し会議や談話、寝泊りも可能だったそうです。

明覚寺庵の下の広場では、西吉田区に合併する前は各地区の祭りだった「灯夜」（8 月 14 日）や「風日」（8 月 31 日）も合同でするようになり、鉦や太鼓を使った浮立の奉納があります。以前、灯夜では「葦筒神社」への奉納もしていたそうです。弘法大師を祀る祠もあります。

（10）真上吉田　編

1　真上吉田区について

真上吉田区は、吉田川が流れる吉田の中央部にあり、縄文時代の白岩遺跡が確認されるほど、古代の人々も居住した所です。

藩政期は佐賀本藩吉田郷の邑主、鍋島傅兵衛家代々の知行地として行政や産業の中心として栄えました。地区には、“家老”や武家だった家があったり、令和２年に弓や砲術の指南書と思われる武術の史料が見つかったりと武家社会の時代を彷彿とさせる地域です。

明治４年に吉田郷が吉田村となった時は、中通り名、寺辺田名として別々でしたが、昭和 30 年に旧吉田村が旧嬉野町と合併し嬉野町となった時に、２つの地域が合併して「真上吉田区」が誕生しました。

【真上吉田区の史跡等】

2　吉田公園

吉田公園は、昔の面影が残る場所です。学校に近く、子ども達はじめ、誰もが楽しく過ごした場所でした。

『嬉野吉田郷土読本』（昭和 10 年刊行）には、公園から見た様子や慰霊碑のことが記されています。

> お父さん等が学校に行く頃は、藁葺のきたない家で天井等も張ってなくて暗いような部屋の中でならっていたものだよ。一号校舎の建ったのが明治 40 年で、２号校舎が大正１２年、３号校舎が出来上がって落成式をあげたのが大正１４年の４月・・・（中略）此処には吉田村の人で日清・日露・日独等の戦争や、近くは日支事変等で名誉の戦死をした人等をお祀りしてある。私等が平和な月日を送る事ができるのも、こんな忠勇な人達のお陰だ。

『嬉野町史』には、第２次世界大戦での嬉野町内の戦死者は、623 人、内 212 人が吉田出身者とあります。また、「嬉野町からも多くの出征兵士を送り出し、数多くの勲功を立てられたが、フィリピン沖で輸送船が撃沈され、漂流しているうちに〈藤津郡吉田村〉と書かれた醤油樽にしがみついて、九死に一生を得た。」との記述もあります。その人は、旧鹿島町の医者だったようです。

【遊び場だった吉田公園】

【雨宝童子】

【六地蔵と中央に釈迦如来像】

公園内には、いろいろな石祠があります。墓地の脇には六地蔵と釈迦如来像、南側の坂道を登る左には、明治期に造られた弘法大師像や釈迦如来像が祀られています。坂道の右側には、徳大勢至菩薩像や観音菩薩像、珍しい線刻の雨宝童子像も祀られています。徳大勢至菩薩像は、月を信仰対象に 23 日を縁日として集まったという祠です。雨宝童子（天照皇大神の幼少の姿）は、伊勢神宮参拝に縁あるもので、人々が講を作り路銀を蓄え、代表が参宮して札を配った記念とされ、参宮できない方々の祈りの場だったと思われます。

3　聖福山永寿寺

寺辺田の曹洞宗永寿寺は、江戸時代初期から上吉田一帯を治めた鍋島傅兵衛茂教（鎮教）が、慶長19年（1614）に開基、佐賀高伝寺９代・天國泰薫が開山とされる寺です。本寺は、伊万里鍋島家菩提寺であり、13代の墓が本堂裏手の高台に建てられています。

『嬉野吉田郷土読本』には、寛永年中頃、寺辺田に茂教という人が邑主となり代々領内を治めたとあります。

茂教は、武雄鍋島家の後藤家信の次男として育ちましたが、伊万里鍋島家を継いだ鍋島傅兵衛茂成（傅兵衛家始祖）の養子となりました。茂成は、邑主として上吉田を知行地として治めていたため、養子の鍋島傅兵衛茂教（鎮教）が跡を継ぎ上吉田村の邑主となると、代々が傅兵衛と名乗りました。後には、鍋島隼人と名乗った邑主もいました。

茂教の義父となった茂成の父は信房と言い、佐賀本藩祖の鍋島直茂と兄弟です。また、鍋島傅兵衛茂教を育てた後藤家信の父は、戦国時代に勢力を誇った龍造寺隆信と言われています。

寺は、寛政５年（1793）に梵鐘、14代明応智鑑の代に鐘楼が造られ、本堂は明治28年（1895）に改築されました。

【永寿寺本堂】

【不動明王像と二童子像】

不動堂には、平安後期の空海の作とも言われ、昭和25年国重要文化財指定の榧の一本造の木像３軀が安置されています。中央に紅蓮の炎を背にした不動明王像が坐し、脇侍として右側に矜羯羅童子と左側に制吒迦童子の２軀の立像を従えています。これら３軀の像は、元々廃寺となった旧両岩村の真言宗永洗寺にあったとされます。本堂には、達磨像や大権修理菩薩像も祀られています。

また、寺の北側丘陵地には、８代目鍋島傅兵衛（親房）が隠居所とした「友楽庵」の碑や楕円形の墳墓があり、文化６年（1809）と刻まれ、『嬉野吉田郷土誌』には碑の全文が記され詳しく読み取ることができます。

【友楽庵主の墓と碑文】

4　山王神社（山王社）

山王神社は、鍋島傅兵衛茂教の義祖父である鍋島信房を祀った神社で、永寿寺近くにあります。信房は、父の鍋島清房や弟の直茂（佐賀本藩祖）と共に龍造寺隆信に仕え、天正４年（1576）に常広城を北鹿島に築きました。

その後、鍋島信房は、慶長13年（1608）に佐賀藩の領地であった肥前国高来郡神代（現：長崎県雲仙市）に移り、佐賀藩神代鍋島家の領主となって神代鍋島家の隆盛の基を作ったとされています。

【英彦山大権現】【山王大権現】【孝岳霊神・三得霊神】

信房の死から約250年、鍋島傅兵衛家10代鍋島隼人忠房は、弘化４年（1847）に信房の霊を慰めるため、菩提寺に近い場所に山王社を建立しました。ここには、信房の法名に因んだ「孝岳霊神・三得霊神」や「英彦山大権現」「山王大権現」の石祠が祀られています。昔は、長崎からの参詣者もあったようですが、今では荒れてしまいました。東側道路脇の山王社入り口には、高さ２メートルほどの鳥居がありますが、一度倒れた後は下半分が地中に埋められた状態で立っています。

5　丸尾山から移転された石祠群

永寿寺から見下ろす小高い丸尾山（鎧塚）には、様々な石祠が祀られていましたが、道路拡張のため、平成13年に北側の一角に移転整備されされています。

①【移転された石祠群】

②【徳大勢至菩薩】

③【雨宝童子】

④【講衆】

写真②の徳大勢至菩薩（安政３年）、③雨宝童子（寛延３年）、④講衆（延宝３年）のほか、弘法大師像（明治39年）や諏訪大明神（享和元年）などの多様な神仏像が祀られ、地区での信仰心の篤さが感じられます。

6　吉田１号窯跡

吉田公園南側には、18 世紀後半に造られた登り窯の「白岩山吉田１号窯跡」があり、一帯は皿屋と区別するため「上吉田山」と称されました。

ここは、平成元年に、佐賀県立九州陶磁文化館が発掘を行い、平成７年度、嬉野町も発掘して窯の全容並びに北側谷地の物原の調査を行いました。平成５年度と８年度には、東へ 70mほど離れた窯跡遺跡の調査も行われました。窯は、窯幅約８m、奥行約 5.2mです。入口は、登りに向かって左（西側）、全長約 70mでした。

【吉田郷図の一部：白岩山周辺】

『吉田郷図』嘉永６年（1853）には、白岩山は９部屋の登り窯が描かれ、明治 14 年の調査では 14 室だったとされます。１号窯出土の陶片等からは、蓮池藩だった皿屋区の吉田２号窯より新しい時代に造られたと推察されています。佐賀本藩が領した吉田１号窯と、蓮池藩の吉田２号窯（皿屋区）の磁器は共通点が多く、交流を図っていたようです。

【登り窯があった周辺】

有田の『皿山代官旧記覚書』文政 12 年（1829）には「上吉田山登」の記述と共に、吉田１号窯の修復費用を有田皿山代官所に願い出て費用が出された記録も残り、鍋島本藩が白岩山の窯業を大事に守っていたことが窺えます。しかし、藩政が終わり明治になると白岩山の窯元は生産が落ち、明治 13 年頃には徐々に皿屋に移転していったそうです。

7　高倉稲荷神社と水山稲荷神社

広川原へ通じる中通りの道路脇の鳥居（明治 38 年建立：皿屋窯元　大串音松氏寄進）をくぐり、急坂を登ると高倉稲荷神社があります。『嬉野町史』では、元禄６年（1693）建立とされ、明治維新の頃まで永寿寺の社僧が管理したとされています。

神社は、平成 30 年に地域挙げて新築され見事な姿となり、厳かに落成の祭事が行われました。社殿前には、文政５年（1822）の石祠、石像の狛犬一対、「弘法大師」（明治29年）や「菅原道真」

像も祀られ、地域の方々の深い信仰の場であったと推察されます。

神社南の赤鳥居群の先には、“奥の院”があり、「高倉稲荷大明神」「高影稲荷大明神」「三船稲荷大明神」の３つの社が並んでいます。

【道路脇に建つ鳥居】

【改修前の本殿】

言い伝えでは、神社は、佐賀本藩吉田邑家老等３名が伊勢神宮参拝の帰路、京都の高倉稲荷神社より分社されたとか、祐徳稲荷神社から分社されたとかの説も伝わっていますが、歴史的資料がなく、今となっては解明することが難しいことです。実際、祐徳稲荷神社に尋ねたら分社の記録はないとのことでした。

【奥の院への鳥居】

【１対の狛犬】

【菅原道真像】

なお、高倉稲荷神社との関係は不明ですが、『嬉野吉田郷土読本』には、“吉田公園から水山稲荷神社が見える”と記述があります。また、『嬉野吉田郷土誌　下巻』には、水山稲荷神社の由来として、“佐賀藩公が、海路にて江戸参勤をされた時に大嵐に遭い、押し寄せる怒涛に舟が難破しようとした際に、白狐が忽然と船首に現れ、危機を救ってくれた。藩公は、白狐を徳として稲荷神社を祭られた。”、“中通りの水山稲荷神社では、昭和２年２月に300年祭が挙行され、社殿が改修された”と記されています。

また、皿屋在住の古老の方によれば、水山稲荷神社と高倉稲荷神社の両方に御参りしたことがあるとの話もあり、今となっては不明な点も多い神社です。

８　吉田小学校

『吉田小学校沿革誌』には、明治６年12月に、吉田村中通りの中村周平宅を借り受けて「原思小学校」が創立されたとありますが、明治７年７月に火災に遭い、直後、皿屋に「吉田小学校」と寺辺田に「岡元小学校」が創立されたとあります。また、明治９年７月には、吉田小学校は納戸料に新築移転されています。その後明治20年３月、吉田・岡元両校が合併して中通りへ移転して「公立尋常吉田小学校」となっています。

【戦後の吉田小学校全景】

【現在の吉田小学校】

昭和16年４月には「吉田村国民学校」となり、戦後、昭和２２年に新学制により「吉田村立吉田小学校」、昭和30年合併により、「嬉野町立吉田小学校」と改名し、さらに、平成18年に嬉野市になると「嬉野市立吉田小学校」となって現在に至っています。

児童数は時代と共に変遷し、多い時は昭和34年（922人）本校851人、春日分校63人、水頭分校８人でした。昭和39年、鉄筋３階建て鉄筋校舎が落成した時は、本校641人、春日分校39人、水頭分校６人だったそうです。

平成 13 年の新校舎落成時は、本校 221 人、春日分校 7 人でした。地区は、過疎化により児童数も激減し、水頭分校は、昭和 44 年 3 月、春日分校は、平成 14 年 3 月を以って閉校となりました。令和元年の児童数は 101 人です。戦後新制となり、平成 30 年度までの卒業生は 5,270 人です。

9　吉田中学校

【村立吉田中学校落成式　昭和 28 年】

戦後の教育改革により、昭和 22 年５月に新制「吉田村立吉田中学校」が開校し、旧嬉野町と合併すると昭和 30 年４月から「嬉野町立吉田中学校」となりました。

『嬉野町史』によれば、戦前においては、大正年頃から高等科や青年学校での窯業実習があったようです。また、新制中学校でも、職業実習として農業や窯業の授業がなされたようです。指導した教師の話では、皿屋出身の生徒が窯業を学び、窯は独立窯で石炭は配給で不足したため薪を利用したそうです。また、当時の吉田中の校門と玄関の表札は、中学校発足第一回目に焼成した表札だとされます。その後、教育課程の改訂等により窯業科は廃止されていきました。

昭和 22 年、新制吉田中学校として開校した時の生徒数は 327 人、最多人数は昭和 37 年の 491 人、令和元年の生徒数は 48 人で大きく減少しました。平成 30 年度までの卒業生は 5,435 人となっています。現在、吉田小学校と吉田中学校は、小中一貫教育をめざして、体育大会等様々な行事、授業の交流、乗り入れ等に積極的に取組み、教育成果を上げるよう努められています。

10　吉田村役場の変遷と公民館設立

【吉田村役場落成式】

『嬉野吉田郷土誌（吉田編）』では、明治維新後、明治４年に郡県制が敷かれると明治７年に「戸長役場」が寺辺田に設置され、南部・北部に戸長を、各区に惣代を置いたとされます。明治 15 年、町村制実施と共に戸長も統一され、明治 22 年には、吉田村役場が中通りに設置され、井手平六氏が初代村長となりました。

大正 15 年、郡制が廃止になると藤津郡内を纏めていた「藤津郡役所」（鹿島市）も撤廃され、郡内のつながりは弱くなり町村が基本的行政単位となりました。

直後の昭和初期、吉田村役場は落成式を行いました。落成式写真には、女性相撲の姿もあり、盛大な祝賀会だったようです。そして、昭和 30 年に旧嬉野町と合併するまで村の行財政、産業、生活等の中心として吉田村民の生活を支え、合併後、嬉野町役場吉田支所（出張所）となりました。

なお、現在の吉田公民館南側には、大正９年に実施された国勢調査の記念門柱１対、公民館東には、県議会議長として活躍し、吉田地区にも貢献された大渡熊次氏の寿碑が建てられています。

ところで、吉田公民館設立の動きは、昭和 20 年９月の「新日本建設ノ教育方針」（文部省）に始まります。さらに、公民館設立に青年団の働きかけを期する旨の文部次官通達が出されると、吉田村の青年達も戦後の復興と郷土を守り育てたいと立ち上がりました。

『吉田公民館沿革史』には、戦後の社会的混乱の中、昭和 21 年に吉田地区青年団の中心だった大渡鐵郎、井上満男、前田忠夫等により、「吉田村立吉田青年学校」の職員室に仮設公民館を発足したとあります。青年団の情熱と行動力は目覚しく、青年団長大串繁雄が核となり、地域の理解を得て、無報酬での労働、物資、建築等により、昭和 23 年 3 月役場横に公民館を作り上げました。４月には吉田村役場に移管し、初代館長は、村長の東政男氏が兼任でした。昭和 30 年の町村合併後は、嬉野町公民館支館として運営されました。戦後初、佐賀県下で結成された吉田地区青年団の波は県下に広がり、吉田村の青年団長が県連合青年団長を務めるなど青年団活動を牽引されました。

（11）下吉田　編（番外編）

吉田地区が現在の10の行政区になるまでには、「下吉田」が吉田から下野へ、「殿ノ木庭」が谷所へ移った経緯がありました。「殿ノ木庭」は、両岩編に記述があります。現在の「下吉田」は、嬉野町大字下野として位置づけられていますが、藩政期の史料には吉田郷であったと明記されたものがあり、吉田郷の中の１村でした。名前の由来は、吉田川の最下流にあることに因むとされます。

令和元年度は、「葦筒神社」の当番氏子として例大祭の大役を果たすなど、今でも歴史的、文化的に吉田地区との深い関わりがあります。以下、下吉田の名が記されている史料を紹介します。

１　下吉田村が記載されている史料

（１）『慶長国絵図』慶長10年（1605）……〈鍋島報效会、佐賀県立図書館寄託　絵図から〉
　絵図の中に「下吉田（上吉田ノ内）」と記され、吉田郷と考えられます。

（２）『御領中郷村帳』貞享４年（1687）改　〈元文３年（1738）記写〉……〈嬉野町史から〉
　①上吉田村……鍋島傅兵衛給
　　（納戸料村・寺辺田村・峯村・川内村・岩ノ下村・赤瀬村・春日村）
　②下吉田村（**志河内村**・松尾村）　③東吉田村（下ヶ棚村・両岩村・宇留土村・中村）
　④西川内村　⑤吉田皿山　⑥西吉田村　⑦赤新田村

（３）『郷村帳』万延元年（1860）……〈嬉野町史から〉
　①上吉田村……鍋島隼人殿知行所
　　（納戸料・葉口・寺辺田・峯・水山・中通・岩ノ下・赤瀬・川内・萬才・春日）
　②下吉田村（松尾村・**七勺川内村**）　③東吉田村（宇留土村・下ヶ棚村・中村）
　④西川内村　⑤吉田皿山　⑥西吉田村（湯岳共）

２　下吉田村について

『嬉野町史』の藩政期の吉田村の状況を記した史料は、（２）が貞享４年（1687）、（３）が藩政末期の万延元年（1860）、共に下吉田村を確認できます。また、廃藩置県の詔書が公布された明治４年に行われた村の統廃合後の一覧では、下吉田村は下野村の内とされ、この時に吉田郷から下野村に編入されたと考えられます。

（２）の志河内村の場所は、今の住民も全く分からないそうで、七ツ川内を指すとも考えられます。（３）の七勺川内村は、今は七ツ川内と表記される場所だと思われます。

編入は、今となっては民意か行政主導かは分かりませんが、下吉田村は蓮池藩領のため、隣接する蓮池藩だった下野村や井手河内村と合併して新下野村となったと思われます。

しかし、『角川日本地名大辞典』によれば、『明治７年取調帳』には、下野村と吉田村の両方に枝村として「下吉田」の名前があり、社会的には混乱があったようです。なお、明治11年の記録では、「下吉田村」には、戸数162戸、人口776人となっています。

ところで、下吉田区は、令和元年10月の葦筒神社の例大祭では、氏子当番として伝承されてきた「下吉田小浮立」を披露しました。幅広い年齢の演技者が、練習してきた成果を発表され、皆様から大きな拍手が送られました。

【下吉田区による小浮立】

現在は吉田地区ではなく、史跡や名所、学校跡等の紹介は割愛しますが、下吉田辺りは、嬉野地域でも早い時期に開発が進んだ吉田川下流域であること、葦筒神社とのつながり、嘗て一部の地区で吉田小学校に通っていた世代があったことなど、興味深い歴史的事実や関連が見出せそうです。

6 吉田の思い出を語る 〈◎執筆者の年齢は、令和2年の執筆時のものです〉

育った地区は違っても、吉田のおおらかな自然の中での遊びや昔ながらの行事を体験された方々は、ふるさと吉田への思いが溢れています。思い出を語ってもらいました。

（1）「おコトばっちゃんはコゴトばっちゃん」

神奈川県藤沢市在住　真上吉田区出身　吉村正寛　昭和 23 年生（71 歳）

丸田誠一郎氏作成の皿屋の商店街再現地図を拝見すれば、皿屋区がいかに殷賑を極めていたかがよく分かります。映画館、芝居小屋、パチンコ店、時計修理店、仏具店、質屋まであったとは、今さらながら驚嘆を禁じ得ません。あの賑わいは今、どこへ消えてしまったのでしょう。猫の子一匹いません。

子どもの頃、よく足を運んだ店は「副島コト小間物店」です。「おコトばっちゃんの店」です。何しろ、この店には、とりわけ男の子の好きな独楽、めんこ（方言で言えば「ぺちゃ」）、パチンコ（方言で言えば「ゴム銃」）、メジロを獲る鳥餅、魚釣り道具、それに駄菓子などが販売されていました。放課後、土・日曜日には子どもたちがわんさと押し寄せ、商品にたかり、触りまくっていました。

おコトばっちゃんは、子どもたちに万引きされはすまいか、いじくり回されて壊されはすまいかと気が気でないらしく、目を光らせ、しょっちゅう子どもたちに小言を言い、叱っていました。おコトばっちゃんは文字どおりコゴトばっちゃんでした。

しかし、そこはガキども。どこ吹く風。馬耳東風。お構いなく押しかけていました。かくいう私もそのうちの一人でした。

これらの商店や酒屋などを見ていると、親戚の方々を思い出すとともに、そこで生まれ育った同級生、年齢の近い先輩や後輩の顔、顔、顔が懐かしく思い出されます。

（※殷賑・・賑わうこと）

（2）「石垣だごと頬被り饅頭」

東吉田在住　梶原靖則　昭和 19 年生（76 歳）

終戦から 75 年も経ちます。私は、終戦直前の昭和 19 年に生まれ、幼年期には食糧難の時代でしたが元気に育ちました。当時を遡り思い出すと、戦後は食糧も少なく、祖母や父母には大変な時期に私を育ててくれたと頭が下がります。当時の思い出はいろいろあります。家族総出のお茶炒りは、楽しい思い出の一つです。今でも家族が忙しく働く姿や祖母が作ってくれた芋のおやつの味を時々思い出します。

お茶は、今では嬉野茶として特産になっていますが、自宅でも作っていて、お茶の時期には近所の人に加勢受けることがありました。５月には、近所のおばさん達が手で生葉を摘んでいました。それを父がフンドシ１枚の裸で、唐釜で炒っていた様子が思い起こされます。とても暑い中で大変な作業であったろうと思います。その作業で私も一役、父に命令され大きなダルマ団扇で扇風機代わりに扇ぎ、弱かったら「もっと強く」と、どやしつけられました。そのお茶は、途中で１回出されて家の外庭の“ねぶく”に広げて、おばさん達が茶を分け、右へ左へと手揉みをし、再度父が唐釜で仕上げをしていた気がします。

その作業の途中で“中憩”があり、「石垣だご」や「頬被りまんじゅう」が出てくるのです。近所の子どもも、その時間帯に自然と人数が増えていたようです。未だにこの芋の味を忘れません。食糧難の時でもあり、貴重品の芋は副食品としてたくさんの料理がありました。「だご」の他、「芋ねったくり」、餅と混ぜた「芋だご汁」「芋飯」「焼き芋」等です。今の時代では考えられませんが、今では先祖に感謝しつつ、当時の芋の有難さをしみじみと思い出しています。

（3）「夏の思い出」

皿屋在住　丸田誠一郎　昭和 27 年生（68 歳）

夏になれば、子供の頃の楽しかった行事を思い出します。

まず、“とうらかし”、皿屋には通り路や抜け路としての横道小路が多く走っており、その小路の枝分かれするところ（角）辺りには、観音様、恵比寿様、大師様等の地蔵様達が祀られている場所があちらこちらにあります。その角々で夏の“とうらかし”が始まります。まだ暑さの残る夕方頃、ゴムゾウリ、半ズボン、ランニング姿の子供達がビニール袋を手に“とうらかし”へ向かいます。そこで提灯のあかりに照らされたお地蔵様達へ手を合わせお参りします。そのごほうびにエプロン姿の世話役のおばちゃん達から、持ってきたビニール袋に煮豆や美人豆、スズメのタマゴなどを頂きます。お参りの目的は、もちろんそれらお豆さん達です。

次は、“子供相撲”。皿屋では、大定寺、上皿屋天満宮、下瓢箪天満宮、弁財天（べじゃたん）、羽口坂（馬頭観音）の５ヶ所で行われていました。

夏虫が飛びかう裸電球の下、皿屋では行司役で有名な、おんちゃんの仕切りで相撲が行われます。幼児、小学各学年、中学各学年に分かれて個人戦から３人抜、５人抜の勝抜戦だ。個人戦では、自分の相手が誰になるかハラハラドキドキしながら土俵際でテンパッテ出番を待っていました。賞品は、まんじゅう、餅、丸ぼーろ、いっこっこなど食べるものが主です。また、これらの行事の時には、どこにも情報通の子供が必ずいて、その情報のもと皿屋の子供達は会場へ走って行きました。

これら行事が終われば２学期、そして秋の時季へと巡っていきます。

（4）「春日の思い出」

春日出身　下宿在住　中尾嘉伸　昭和 29 年生（65 歳）

令和２年４月より、故郷の吉田地区で働くことになった。同じ事務室内の館長より、“春日で過ごしたこまんか時のことば、きゃあてくんしゃい”と依頼され筆を握った。

そこで、春日分校で過ごした４年間の思い出を探ろうと思う。

同級生は、春日から私と女子の２人、赤瀬から男子１人と女子５人だった。

授業は、複式学級で先生は二人だったと思う（1・2 年時、光岡先生夫婦、3・4 年時、佐熊先生夫婦）。１年生に授業している時は、２年生は与えられた問題を解くという感じだった。教室での授業はあまり思い出さないが、体育のことはよく覚えているから不思議だ。

人数が限られるため、冬は主に雪合戦（よく雪が降っていた。）やボール遊び、他はチャンバラごっこ。天気が良いと近くの野原へ遠足するなど長閑なものだった。遊びといえば川で「うなぎのつけばい」や「ぎっちょつい」、山での「かっちゅう罠かけ」や「めじろとい」等々、何れも先輩と一緒だった気がする。とにかく、山村での遊びはほとんど先輩と一緒だったし、自然と色々なことを学んできたのだろう。現在の社会での子どもたちのニュース報道にふれると、古き良き時代だったと言えるだろう。

ところで、ひとつ書き忘れていたが、新入生は春日から当初４人だった。一人は残念ながら病気で亡くなり、もう１人は私の家に近く川沿いであったが、確か、37 水害にて被災し福岡へ転出された。植林君といったが、よくお互いの家で遊んだものだった。

ある日、彼の家に遊びに行く途中、したたかに転倒し右目の上を深く傷つけた。若いころは眉毛が濃く目立たなかったが、60 歳過ぎてから傷痕が目立つようになり、それを見る度に当時の事を思い出す。下宿での生活が春日に居るときより長くなったが、前述したように吉田地区での職を得て感謝である。

字数に限りがあり筆を擱くが、「きゃあて」と依頼された館長に感謝である。

（5）「納戸料の思い出」

納戸料在住　松元廣己　昭和 15 年生（79 歳）

５歳の時、昭和 20 年に終戦となりました。父親は、戦地から体調が悪いまま復員し、年の暮れには亡くなり、何かとせわしい年でした。まだ幼く、父を亡くした意味や状況はよく分かっていませんでした。今では、父の顔の記憶も薄くなっています。

小学校の思い出は、地区の同級生や先輩、後輩たちと缶蹴りや独楽まわし、ペチャ、竹馬などしながら良く遊んだことです。山へ出かけては、「鳥罠」を仕掛けて“ひよ鳥”などを取ったり、メジロ取ったりも楽しい思い出です。夏、吉田川の三せ原井堰堤防に行って水遊びをしている時、飛び込んで頭を砂利にぶつけて痛かったことを思い出します。この堤防では、皿屋の子も一緒に泳ぎました。また、川での魚取りも楽しい思い出で、網で捕まえたり、石の下に逃げ込んだ魚を手掴みで取ったりしていました。

その頃、子どもは田んぼや畑で手伝いをしていましたが、子どもも働くのが当たり前のような時代でした。懐かしい思い出として残っています。

ところで、納戸料では、１月 24 日は、地蔵祭りをし、早朝４時から地区の家周りで、３戸の方々がご飯を炊き、地区の境の５箇所のお地蔵様へ地区民の安全を願い、お祈りをして３個のゴックさん（おにぎり）とお神酒をお供えし、朝７時から全戸の方が朝ご飯を頂いておりました。しかし、平成23年からは、少子高齢化とイノシシの出没で、朝９時からお地蔵様へお供えをするようになり、午後には区民総会を開き、地蔵祭りの宴会をしているところです。

また、百年桜が有名になり、今では各地からお見えになり賑わうようになりました。期間中の土、日は、ライトアップをしていますので、ぜひお越しいただきたいと思います。

（6）「西吉田に住み、昨今思うこと」

西吉田在住　田中　一法　昭和 16 年生（78 歳）

西吉田は、兎鹿野や西湯岳（大字下野）と接し、皿屋から上ると大定寺やお山さんを通過して湯岳堤へとつながり、子供の頃の呼び名は「湯岳」だった。当時、湯岳堤では村の水泳大会があっていて、青竹をつなげてコースを造ってあったことが懐かしい。

さて、最近の西吉田の世帯は 70 戸を割っているが、昔は 77 戸 ～ 78 戸の家があったように思う。近頃は子供達も激減し、伝統芸能の浮立も存続が危ぶまれている。

しかし、変わらぬものもある。辰ノ口水源だ。赤仁田、西吉田、皿屋、西川内（別当地区）の命の水源になっている。

西吉田の年２回の大きなお祭りは、夏の灯夜と 12 月の龍まつりだ。また、もう一つは、権現さんが地域の宝だ。巨石が立ち並び、圧巻の風情の中に静かに鎮座する。素晴らしい自然の中にある権現さんの祠は、地区の守り神である。権現さんがある大岩の下には 13 仏が座してある。８月 14 日の晩は、通夜、浮立が奉納され灯籠が点される。近年、オルレコースのポイントとして紹介されているようだ。

権現さんで御参りを済ませ遊歩道の山道を上がれば、広大な坊主原の茶園が広がる。茶畑は、標高４～500ｍで服１枚脱いで作業が出来るくらいに涼しい。昔は車もなく摘んだ茶葉を牛に背負わせたり、ダテボを背負ったりして上り下りしたものである。

近年吉田では、後継者不足を含め荒地が目立ち、イノシシが畑を荒らすことも増えた。

他方、世界緊張とコロナ禍の思惑か「食料安保」の活字を目にした。数十年前にも書本にも登場したが、時代の繰返しだろうか。災害の絶えない現代と、耕作放棄地と人口減少の歯止め、吉田の未来は如何になるのであろうか？

（7）「小・中学生ころの思い出」

春日在住　堤　勝　昭和 25 年生（70 歳）

小・中学生の頃の懐かしい思い出は、自然の中で遊びまわったことです。

夏は、川遊び、つけばい、ちゃんばら遊び、三角ベース野球をしたり、自然の恵みが多い秋の季節は、仲間と山に行って栗や柿を採ったりしました。

冬は、正月に友達と凧揚げ、ビー玉、独楽まわしなどをして遊びました。子どもも多かったので、集まればすぐ遊びが始まりました。山での遊びは、楽しみの一つでした。鳥ワナを仕掛ける方法は、先輩に教えられたと思う。今なら危ないと言って持たせてもらえない鎌や肥後守（小刀）を持って山へ行き、場所を探して仕掛けを作りました。

春日は、雪も多かったのでソリ遊びも冬の楽しい思い出です。昭和 43 年の冬の大雪は記憶に残っています。1.5m以上の雪が積もり、かまくらなどで遊びました。

春の思い出は、鹿島の松陰さんに花見に連れていってもらったことです。出店や見せ物小屋がたくさん並んでいたので花見よりも店が気になってまわりました。

学校の思い出は、遠足があると春日から山を越えて広川原の堤を通って水頭分校で本校生と合流して、大野原高原まで行きました。弁当を食べるのがとても楽しみでした。

学校では、年に１回芝居や映画鑑賞会が行われていて、待ち遠しいものでした。わくわくしながら見たのを思い出します。

春日の生活を思い出してみると、今みたいに水道は無く、飲み水は川まで汲みに行っていたのでとても大変でした。風呂は、班ごとに共同で使い、そこが地域のコミュニケーションの場であったように思います。

中学生になると自転車通学でしたが、学校帰りは、登り坂ばかりで大変でした。

また確か、春日にバスが来るようになったのは、小学校２年生の時でした。最終のバスは、ひと晩、春日に留まり、始発バスが出ていたようです。

どれも、断片的な記憶ですが、懐かしい思い出を辿ることができました。

（8）「吉田川での水浴び」

真上吉田在住　小野末樹　昭和 28 年生（66 歳）

子供の頃の思い出として一番思い出に浮かぶのは、夏休みになると川で泳ぐというか、水浴びをしたことです。今までは、手を着いて体を水に浮かせていた自分が、小学４年生の時に泳ぎ方を教えてもらい、犬かきとはいえ、泳げるようになった時の感激は今でもはっきりと憶えています。一緒に覚えた友達の泳ぎ方を見ていると、本当に犬が泳いでいるようで、自分もこんな風に泳いでいるのか、と滑稽に思えたことを思い出します。

ある時は、仲間と朝の10時頃から、昼は大人の人の監視で地区の遊泳場所へ、また夕方近くにと、１日に３回川へ泳ぎに行くこともあったような気がします。さすがに夕方には、唇が紫色になり、もう上がろうかという合図になっていました。

あの頃は、今のような猛暑ではなかったと思いますが、他に楽しみも無く、また暑さから逃れるには「水浴び」が一番手っ取り早い方法だったと思います。時間を気にせず、ただ一心不乱に水に浸かって遊んでいたあの頃が本当に懐かしく、今となっては羨ましくさえ思えます。

（9）「少年の日の思い出」

西川内在住　山口正次　昭和 22 年生（73 歳）

家にはテレビもラジオもない小学校時代。田植えが終わったらすぐ夏休みだった。帰ったら宿題もせず、仲間と一緒に一本松、おちや（おちあい）に魚釣りに行くのが一番の楽しみで毎日のように釣りに行っていたが、釣れるのは、鯰ばかりでフナ、コイはあまり釣れなかった。仲間が、赤仁田の堤に行けばコイが釣れると話をしていたので、堤まで２～３人で山道を登って糸を下ろし、１時間もすると大きなコイが次から次に釣れて、バケツにはいれないよう釣れて大はしゃぎしているところに、地区のおんちゃんが来て、「ここで釣ってはいかん。」と怒鳴られて、釣った魚はその場で全部逃がされて、その時の悔しさは今でも覚えている。そのあと２度と堤には行かなかった。

また、稲刈りの収穫が終わると山遊び、アケビ、ガネブ、栗拾い、冬になると今度はメジロ取り。オトリと鳥餅を持って上西川内、水頭まで取りに行った。数人で行っていたので山の中でも怖くなかった。メジロ取りの楽しさは、オトリに近づいて来る時の緊張感、そして鳥餅に付いた時の喜びだ。その頃家に 5～10 羽程飼っていた記憶がある。

正月の遊びと言えば、ペチャ。負けてしまうと皿屋のおことばっちゃんの店に良く買いに行ったもんだ。他に、クギネンポ、家の広場はクギの穴ばかりで親から叱られたら道路でよくやった。その時代、車が通ることもあまりなかったので、道路も遊び場所。他にもビー玉遊び。雨の日は、お堂で相撲をとったり、かくれんぼしたりして家に居ず、外での遊びばかりだった。一緒に遊んだやんちゃな仲間達の顔が懐かしい。

（10）子供のころの思い出」

上吉田在住　江口幸一郎　昭和 25 年生（70 歳）

私たちの子供の頃は、家ごとに同年代の友達がおり、それは賑やかなものでした。

当時を振り返ってみると、ゲーム機、テレビなどはなく、もっぱら山や川の自然を相手に出来る遊びをして過ごしたものです。

他地区の同年代の方の過ごし方も似たり寄ったりでしょうが、私が記憶にあるものの一つに「チャンバラごっこ」があります。

先輩が大将になり、２つの集団に分かれそれぞれの集団が山に隠れ家を作り、竹で作った刀で斬りあいをしました。斬られれば、先輩が「起きてよかぞ」と言うまで地面に伏せていた記憶があります。ある時は、数人の仲間と白い布をポケットに押し込み、近くの岩山に登り、持って行った白布を木切れにくくりつけ岩に立て、降りて下から見上げたものです。ただ、勝敗の判定がどうされていたかについてはよく覚えていません。

また、三角山（岩）と言われる山には良く登り、遊んだ記憶が懐かしく残っています。

さらに、もう一つ記憶を辿ると、長い夏休みには、ウナギてぼ（竹で編んだ細長い丸い筒の中に餌のみみずを入れて）の入口を下流に向け、１人で６～８本鰻の通りそうな所へ仕掛けました。朝になると、学校があっている時は早起きできないくせに、早朝でも自然に目が覚めたものです。当時、鰻はよく獲れていましたが、大きな鰻が入っている時、てぼを振ると「ことこと」という音がして、今でも耳に残っています。獲れた鰻は、びくに入れていた（長く入れていると痩せてしまう）ものです。

振り返れば、物は決して豊かな時代ではなかったと思います。しかし、１年中遊び惚けていましたが、たくさん友達がおり、大変楽しかった時代だったと思います。

（11）「幼いころの疎覚え」

峰川原在住　野副道夫　　昭和 12 年生（83 歳）

私が産声を上げたのは、昭和 12 年１月とされています。あれから 83 年の歳月があっと言う間に経ってしまいました。

小学校は国民学校であり、入学前は先輩の方達から「来年から国民学校１年生になるのか、よかにゃー。」と言ってからかわれたものでした。当時、峰には45～6戸あったと思いますが同年は９人おりました。そして、いよいよ国民学校１年生に入学。戦争中の学校では毎日警戒警報、空襲警報等々、とても勉強する余裕なんてありませんでした。唯一勉強と言えば音楽がありました。

「僕は軍人大好きよ　今に大きくなったなら　勲章つけて　剣さげて　お馬に乗ってハイドウドウ」等、軍人さんの歌を嫌と言うほど歌わされたものでした。今、考えてみますと、年齢に達した時は、兵隊さんになる身で、その時に喜んで入隊出来るように洗脳されていたような気がします。

そして小学校を卒業し、中学校を卒業して進学する者、就職する者、家業を継ぐ者、それぞれでしたが、進学する者は、経済的に恵まれていた家の子どもが進学し、殆どの者が家業（農業等）を手伝って労力の一翼を担ったものでありました。

そして次に待っていたのは、青年団の入団でありました。当時の青年団は、毎年４月始めに、５～７日間、花見の期間として青年クラブで呑んで食って、寝て遊んでいました。新しく入団する者は、初日の夕方、親に引率されて親は酒２本持って、今日から子どもがお世話になります。宜しく頼みます、と挨拶して入団したものでした。

花見の期間が終わると、いよいよ各家庭では、田植えの準備に入りますが、集落では水路の補修を主とする区役が始まり、３日も４日もかけての作業に出夫したものでした。

出夫に対する区役賃金は、青年団加入者は１人前、未加入者は、0.7人前として計算され、組織加入の重要性を集落挙って応援されていたもので、その流れは峰の中には残っていると思っております。

因みに青年団活動の目的は、自己形成と社会形成にあると言われておりました。私は、今でも組織活動の要であると信じております。今日では、青年団こそありませんが、消防団にしても老人会にしても、組織の重要性を感じることができます。

青年クラブには、毎晩７～８人の青年が寝泊りしておりましたが、私達新米は、場所的に一番悪い所、冬は北風が吹付けて、雪の降る夜は、朝起きると肩まで雪が吹き込んでいた事が度々あっていたが、今は笑い話、でも懐かしい思い出です。

振り返ってみますと、私が子どもの頃は、小学校１年生から中学校３年生まで「タテ」の系列で遊んでおりましたので、善も悪も先輩から叩き込まれて育てられたものでした。

私の家の前には共同風呂（五右衛門風呂）があって、水は、小川というより小さな溝の流れ水を使用されていて、雨降りの風呂は濁り水の風呂で、今では考えられない事が当時は常でした。

夕方になると、地区の老人達が４～５人風呂に入りに来ておられて、私達子どもも一緒に入って、老人達の背中を「おんちゃん、ごちゃーば流してくりゅうか」て云うて流しておりましたので、老人達からは、可愛がられて育ちました。

反面には、悪餓鬼も教わり、夏みかん、干柿、スイカなどを取って来るコツ等々、今思えば、全てが思い出です。

（12）「おもいで」

両岩在住　森脇一弘　昭和 37 年生（58 歳）

私は、５歳～10歳までは春日で暮らし、両岩での幼少期の思い出は少ししかありません。ですが、今私が暮しているこの両岩は、他の地区と比較しても決して引きをとらない素晴らしい所だと感じています。

まず歴史的な旧跡です。永洗寺（寺屋敷跡）や両岩神社（通称：権現さん）の成り立ちは平安時代まで遡るものです。現在もその歴史性は、権現さんや孕地蔵さんの灯籠明かしや浮立などの地区行事の中に受け継がれています。両岩で育った者たちは、ほとんどこの地区行事の中で育ち、目に見えない強い絆で結ばれています。

もう１つは、里山の風景です。両岩は権現山に代表されるように名前のとおり岩だった山とその麓を流れる川に広がる里山の集落です。一昔前までは、地区の大部分を占める山は、畑作業や薪などの燃料を確保する場所、川は洗濯するなど大切な生活の場でしたし、山や川や田んぼも子ども達にとっては身近な遊び場所でした。今でも幼い頃の思い出は、この里山の中の自然とそこでの出来事と切り離すことができません。今も昔と変わらず依然として目の前には山も川もありますが、日常の生活の中や意識の中に本来豊かな山や川の自然が占める割合はとても少なくなって一抹の寂しさを感じています。

最後の思い出は、その中で暮らしていた人たちです。私の暮らす上古賀も今の倍以上の戸数があり、古賀内で海水浴など、日帰り旅行などが楽しい思い出です。今ほど、どの家も決して豊かではなかったと思いますが、地区の子どもを当たり前のように褒めたり叱ったりと、近所のおじちゃんやおばちゃんの存在は、今の親戚以上の存在だった気がします。

～～～　昔の景色　～～～

7 吉田の昔話（民話）

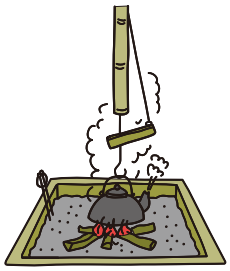
〈はじめに〉

『嬉野の民話』（嬉野町教育委員会編　平成９年３月刊行）には、旧嬉野町内各地の聞き取りで語られた民話が多数収められています。その民話は、「動物昔話」、「本格昔話」、「笑い話」の３種に類別されるようです。

吉田地区からは99名が語られ、種類や数の多さと共に、中には残酷な話や信じ難い話も含まれているので驚きです。

各地で伝わる民話は、吉田地区であっても微妙な違いがあったり、町内各地に類似する話が語られていたりなど興味深いものがあります。類似する理由は、「嬉野町の昔話解説」の頁には、長崎県東彼杵や波佐見方面との交流、温泉の里であることから影響を受けたからだと思われます。

また、昔話の伝承方法は、寝床・いろり端・お日まち・お逮夜・庚申祭り・正月・盆・供日などの他、行商人や盲僧が宿泊する木賃宿などとされ、祖父母が孫への語り、茶摘や茶もみの場で語り、交易・商売の途中で語られることもあったようです。



なお、民話は語りを書き起こしたものなので、方言がいっぱい使われています。今は使われていない方言や言い回しなどもありますので、じっくり読み進めてほしいと思います。

話－①　お釈迦さん話「雀と燕」…（春日　井藤 ツルさん）明治28年生まれ

むかし、むかし。

お釈迦さんが、ご病気になられたと。雀はぼろ着て、大急ぎで行って、

「お釈迦さん、大丈夫ですか」と言って、聞いた。

すると、お釈迦さんは、

「お前が、いちばん早く見舞いに来てくれたけん、お米ば食わい」と、おっしゃった。

ところが、燕は紅つけ鉄漿つけ化粧して遅れて行った。

すると、お釈迦さんは、

「虫けらどん食うとけぇ」と、おっしゃたげな。

話－②　お釈迦さん話「十二支由来」…（上吉田　杉原 英次さん）明治40年生まれ

なし牛がねぇ、虎やね、早く行たかちゅうとは知らんわけですよ。しかし鼠は、こすかもんじゃっけん、あの、お釈迦さんの涅槃に、あの、牛の尻尾に、あの、つかまって行きよったて。

そいぎぃ、牛がお釈迦さんとけぇ行たてから、後ん者は来よろうかと思うて、くるって後ろ見さしたて。そうしたら、尻尾が後ろになって、鼠がいちばん口にお釈迦さんの前に行っとったらしかもんねぇ。

そいで、子・牛・虎ちゅうて、順序のなったとかいう。そいぎぃ、猫が遅れて来らいたて。そいぎぃ、

「お前はその、遅れたけん、お前はその、十二のあぎゃんては入れん」て言うて。

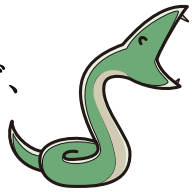
そして、猫は、猫の年ちゅうてなかて。

話－③　お釈迦さん話「蚯蚓と泥」…（上吉田　杉原 英次さん）明治40年生まれ

　むかし。
お釈迦さんの涅槃の時に、動物たちが集まったと。すると、お釈迦さんは、
「お前は、何食え」と言って、決められていた。蚯蚓が側から
「私は、何ば食うてよかでしょうか」と言って、聞いた。お釈迦さんは、
「お前は、泥食え」と言われた。すると蚯蚓は、
「泥ののうなっぎぃ、何ば食おうか」と言った。お釈迦さんは、
「泥ののうなっぎにゃあ、土用のうちに道に出て、寝とれぇ」と言われた。
だから、泥はなくならんけれども、蚯蚓が余りにも欲を出したから、夏の土用に道端で死んどっと」
　そいばっか。

話－④　お釈迦さん話「ひらくち」…（上吉田　林田 政豊さん）明治41年生まれ

　むかし。
ひらくちは見たところ、赤くしてきれいかった。お釈迦さんは、
「こりゃあ、立派かもんねぇ」と、言われて、手に取られたら、食いついたと。すると、お釈迦さんは、
「もう、わりゃあ、一生は、わいとはあがんせん」と、言われた。
だから、お釈迦さんの涅槃の時に、いろいろな動物がやってきたけれど、ひらくちだけは呼ばれておらんと。
　そいばあっかい。



話－⑤　親不孝蛙…（東吉田　梶原 ハマさん）明治29年生まれ

　むかし。
蛙の何処ぇ、お母さんの、「山行け」て、言いなっぎと、今度あ、川行きおったたいね。
今度あ、「川行け」て言いなっぎぃ、山行きおったて。昔、その蛙が。
そいぎとは、こりゃあほんなこと、いっちょん言うこと聞かじい、反対ばっかい聞くけん、俺が死んだこんな、川端ゃ埋めてくいろと、言うたらば、死んだ時どま川端ゃ埋めんどんと思うて、その、「今度死んだいどん、ほんなこて聞かんばにゃあ」ち言うて、川端ゃ埋めらしたて。
そいぎんと、この雨の降ったんびに、
「お母やんのきゃあ流れなっ」ち言うて、ギャアギャアギャアと、せわして鳴くてやもんね。
　そいばあっかい。

話－⑥　かっちゃんとけたか …（皿屋　宮崎 マツノさん）明治36年生まれ

　むかし。
あるところに、継母と継子がおったと。
ある日、継母が継子に髪をといてやっていた。継母が櫛で継子の髪をひどく力を入れてけずっていた。継子は、
「とけたか。とけたか」と言って、鳥になって飛んでいってしまった。
次の年、見かけたことのない鳥が木上で、
「かっちゃんとけたか。かっちゃんとけたか」と、鳴いていた。
村の人たちは、誰もその鳥の名を知らなかったので、物知りの和尚さんに聞いた。和尚さんは、
「それは、『母ちゃん、とけたか。髪の』と、いう意味たい」と言って、教えてくれたげな。

話－⑦　西瓜のじご食わん …（皿屋　副島 久八さん）明治38年生まれ

　馬鹿者がおったと。
ある暑い夏の日、
「よかんびゃあに西瓜の熟れとるばい。こい、食べんしゃい」と言って、出された。
すると馬鹿者が、
「俺ゃ、そがん西瓜のじごどま食わんばい」と言って、皮を食ったげな。

話－⑧　水鼻の甘酒 …（皿屋　中尾 ツヨさん）大正６年生まれ

　むかし。
お茶講に和尚さんが来んさったと。
その時、婆さんがご馳走しようと思い、ご飯を炊いた。そのご飯をお櫃に移す時に、婆さんが水鼻をその中に落としていた。和尚さんは、ご飯をいただかないで帰ってしまった。婆さんは、そのご飯でもったいないから甘酒を作った。
　七日後、婆さんは和尚さんを家に呼んで、甘酒を出した。すると和尚さんは、
「ほんに甘酒のおいしか」と言って、飲みました。婆さんは、
「この前、ご飯ば炊いたぎぃ、和尚さん、あなたのご飯ば食べじぃ行きんさったけん、もったいなかけん、甘酒ば作ったあ」と言った。
　和尚さんは、後の祭りでどうすることもできなかった。　そいばっかい。

話－⑨　親孝行の竹の子掘り …（東吉田　中島 末廣さん）明治30年生まれ

　あや、何月ごろこちゃい、竹ン子ば親の食いたかてなたあ。そいぎばい、今時分な竹ン子は、なかいどん、掘いぎゃ行こうかにゃと思うて、行かしたもよう。親孝行で。
　そいぎ、何月何日かにゃ、12月か。まあーだ　生えん時分に。そいば掘り出しんさったてぇ。

話－⑩　食わず女房 …（春日　両岡 カチさん）大正３年生まれ

　むかし、むかし。
欲の深い親父がおったと。その親父の一番の願いは、飯を食わないで一生懸命に働く嫁御をもらうことであった。
そのような嫁御を捜して歩いているところ、
「私がそがんと」と言って、親父の嫁御として来たもよう。
その嫁御は、たしかに親父の前では飯は食べなかったのに、どうしたことか、米櫃はゴンゴン減っていった。不思議に思った親父は、嫁御に内緒で 2 階からじいっと台所を覗いていたところ、米を釜いっぱい炊きはじめた。そして、ご飯をおにぎりにしては、自分の髪を振り乱し頭の口からドンドン放り込んでいた。
親父は、はじめて女房が蜘蛛であったことを知り、恐ろしくなり何処へともなく逃げた。そういうわけで、「夜蜘蛛は親に似ても殺せ。朝蜘蛛は親に似とっても殺すな」と言うげな。　そいばあっきゃ。

話－⑪　狐の難産 …（納戸料　堤 ナミさん）明治42年生まれ

　むかし。
あるところに、狐がおったと。その狐の難産だったもよう。そのため仲間の狐が、産婆さんを迎えに来て、
「ごめんなさい。せきよっけん」と言って、助けを求めて戸を叩いた。すると産婆さんは、
「使いはきつねではなかごたった。人間さまのお産たのみ」と、独りごと言って、難産に立ち会った。お産が無事終わってから、そこの家の者が、
「今夜はもう遅かけん、泊まっていたてくいろ」と言った。すると産婆さんは、
「泊まろうかあ」と、言いながら立派な布団に寝かせてもらっていた。
翌朝に目を覚ますと、自分が寝ていた布団は、柴の葉を敷いてあった。
人間の使う本当のお金は、柴に包んで枕元に置いてあったげな。

話－⑫　久惣十話「そりゃあ・稲担ぎ」…（真上吉田　林田 豊さん）明治24年生まれ

　林久惣十さんという人は、峰川原で生まれたと。久惣十さんは体も小さかったが、大変肥えて力持ちだったので、殿様の駕籠担ぎと農業をしていた。
　ある日、鍋島公が上京なさる時、久惣十さんは駕籠担ぎをした。駕籠担ぎは二人で担ぐものだが、久惣十さんは自分の気に入らない時、駕籠を自分ひとりで持ち上げながら担いだ。そして石垣の上から、「そりゃあ」と言った。すると殿様は、
「そりゃあ、してくるんな」と、言われた。
　それから久惣十さんは、稲を刈ってから、それを大きな棒で担いで山を回って、家へ着いた時、稲の穂も落ちてしまっていた。
「久惣十、何も稲の穂はついとらんじゃなっかあ」と言った。
　久惣十さんの子孫は、今もいるということさ。

8 ふるさと吉田　思い出の写真

（1）ふるさと吉田の風景

吉田の郷の朝日

納戸料から東吉田方面を望む

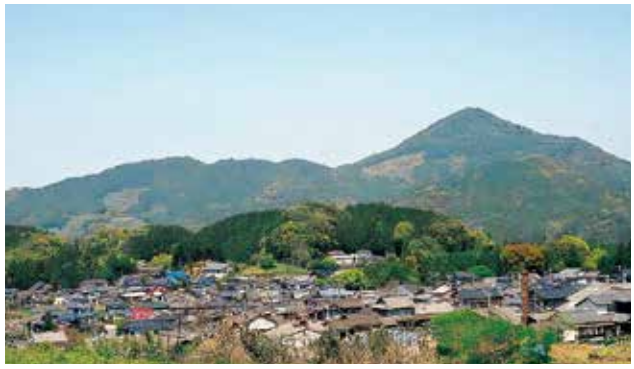
東吉田から学校方面を望む

岩ノ下から学校方面を望む

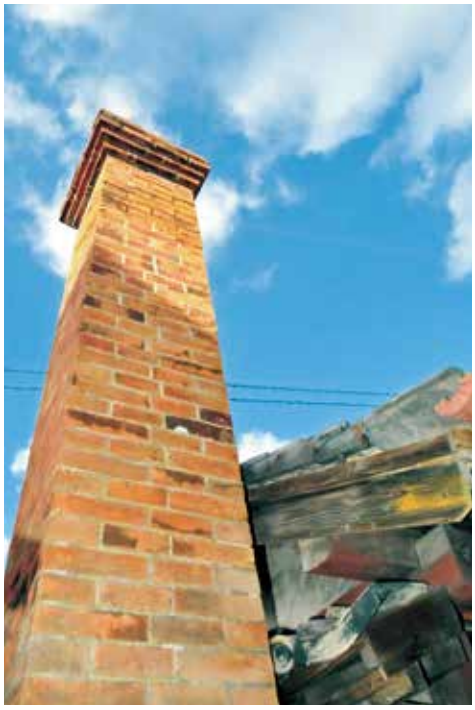
棚田の風景

百年桜と菜の花

三角山（皿屋）から東吉田を望む



西吉田から皿屋の家並と唐泉山を望む



皿屋の煙突

皿屋の焼き物工場

肥前吉田焼窯元会館（平成７年完成）

（2）おくんち＆浮立

子ども神輿（みこし）（昭和 61 年）

子ども達の踊り（昭和 61 年）

天満宮と神輿（みこし）（昭和 61 年）

子ども達の行列（昭和 61 年）

葦筒神社　例大祭

神輿（みこし）　お上（のぼ）り

春日浮立総連中

東吉田浮立

両岩小浮立

（3）吉田小学校と吉田中学校

現在の吉田小学校

吉田小学校　旧校舎　航空写真

旧小学校講堂　昭和 15 年落成

吉田小学校　（昭和 34 年）
児童数　922 人
本校 851 人、春日 63 人、水頭 8 人

小学校新校舎落成（昭和 39 年）
本校 641 人、春日 39 人、水頭 6 人

本校 397 人、春日 12 人（昭和 49 年）
卒業生と職員

小学校体育館落成（平成 7 年）
本校 261 人、春日 8 人

吉田小学校全景　航空写真（平成 12 年）
本校 214 人、春日 12 人

吉田小学校落成（平成 13 年）
本校 221 人、春日 7 人

吉田小学校給食風景（平成 28 年）
全校児童数　110 人

春日分校校舎（昭和 9 年）

春日分校（昭和 9 年）53 人（於本校）

春日分校新校舎落成（昭和 34 年）
児童数　63 人

春日分校（昭和 45 年）
児童数　22 人

春日分校（平成 13 年）児童数　7 人

春日分校　閉校式（平成 13 年）

吉田中学校（現在）

吉田中学校新校舎落成式（昭和 28 年）
新制　吉田村立吉田中学校（昭和 22 年創立）

吉田中学校　学校田　田植え作業

吉田中学校　運動会

小学校の学芸会（講堂）**（昭和 30 年代）**

中学校　中庭テニスコート

第 15 回小中合同体育大会（平成 27 年）

女面浮立保存会との共演**（平成 27 年）**

５・６年　ソーラン（団体演技）**（平成 27 年）**

体育大会　リレー**（平成 27 年）**

吉田おうえんたい出発式（平成 28 年）

「吉田おうえんたい」**によるあいさつ運動**

みんなでラジオ体操（峰区公民館）**（平成 28 年）**

椎（しい）の木（女性部による裁縫指導）**（平成 27 年）**

町民体育大会　大玉送り

小学校　郷土芸能学習（両岩公民館）

（4）思い出の風景・できごと

吉田村役場の落成（昭和初期）

土俵造り

旧吉田村役場（昭和 37 年）

旧吉田保育園（昭和 42 年～平成 13 年）

旧佐賀銀行吉田出張所

吉田町民運動会（仮装行列）**（昭和 30 年代）**

公民館横での吉田夏まつり（平成 6 年）

女面浮立と百年桜（平成 30 年）

龍頭泉遠足（昭和 37 年）

小・中学校　合同運動会**（昭和 36 年頃）**

皿屋青年団　雲仙旅行（昭和 50 年頃）

吉田地区婦人会の活動**（昭和 60 年頃）**

旧吉田郵便局落成

赤仁田上水道竣工祝賀（向方組）**（昭和 36 年）**

雪だるま（昭和 46 年）

第１回どろんこビーチバレー大会（平成６年）

第２回吉田地区文化祭

第９回吉田地区盆踊り大会（小学校にて）

第５回吉田地区盆踊り大会（雨天体育館開催）

吉田地区青年団研修会（昭和 41 年）

9 吉田の今　あれこれ

吉田の歴史や吉田の今を知ることは、吉田の良さに気づくことでもあります。

以下は、現在の吉田地区の一面ではありますが、地域内の団体等を知ることにより、さらに吉田の発展のために何ができるか考えるきっかけにしていただけたらと思います。

（1）吉田地区地域コミュニティ運営協議会

本会は、平成 21 年に結成され運営されてきました。目的は、「吉田小学校区を範囲とする吉田地区の住民相互の交流と親睦（しんぼく）を図り、共通の利益の増進、生活環境の保持・改善に努力し、文化・福祉の向上と豊かで住みよい地域づくりに寄与することを目的とする。」とあり、５つの部会と女性が主体となる「笑ってＹわい会」により運営されています。

どの部会も、会の目的に沿い事業を実施し、交流や親睦をはじめ、吉田の人々の健康で文化的な地域づくりを目指し活動をしています。

令和元年度には、任意に抽出（ちゅうしゅつ）した住民アンケートを行い、実態を確認しながら「吉田地区地域コミュニティ運営協議会 10 年計画」を策定し、令和２年度からその方針・計画に沿って運営されています。

【各部の主な事業】

総務・広報部会	公民館活動部会	青少年育成部会	健康福祉部会	地域づくり部会
防犯・安全講習会 防災訓練・講演会 情報誌発行 防犯青色パトロール	吉田地区体育大会 ミニバレーボール大会 ウォークラリー ふるさと吉田作成	あいさつ運動推進 こども夢会議	健康福祉講演会 グラウンド・ゴルフ大会	魚の放流 不法投棄看板点検 吉田夏まつり 百年桜ライトアップ

①　総務・広報部会

地域住民の安全や防災、住民相互の連帯を目的に事業を展開しています。住民参加の防災訓練では、地理的な状況に応じた避難方法の確認、炊き出しや避難所の運営について学びます。青色パトロールは、地域コミュニティ役員、ＰＴＡ役員、学校運営協議会等の各委員が輪番でコミュニティの車を使い地域を巡回し子どもたちの安全な下校を見守っています。

【青パト講習会】

【地区防災会議】

②　公民館活動部会

主に健康増進を目指す事業を実施しています。体育大会は、平成 30 年度から午前中で終了することになりました。ミニバレーボール大会は、参加チームの減少が見られ残念です。ウォークラリーは、早春の時期に、ふるさとの良さを歩いて感じる取組みで、参加者には好評です。「ふるさと吉田」誌を活用して、令和元年度のウォークラリーは、地域の歴史探訪が企画されました。

【吉田地区体育大会】

【ミニバレーボール大会】

③ 青少年育成部会

吉田小学校・中学校の子ども達に対し、将来の夢を膨らませ、希望が持てる内容を聞かせてくださる方を講師に招き「こども夢会議」を開催しています。吉田出身者の多彩な活躍を聞くこともあり毎回充実しています。あいさつ運動も欠かせない活動です。地域の子ども達への温かいまなざしを感じます。

【あいさつ運動】

【子ども夢会議】

④ 健康福祉部会

高齢化する吉田地区の住民は、健康への関心も高く昼夜２度の健康づくり講演会は、参加者であふれます。100 人を越えるグラウンド・ゴルフ大会は、ホールインワンをめざして住民で賑(にぎ)わいます。参加者の一喜一憂(いっきいちゆう)する笑顔が成果と言えるでしょう。

【健康講演会】

【G ゴルフ大会】

⑤ 地域づくり部会

吉田保育園の園児たちに、ふるさとの自然を体感させることを目的に、吉田川の上流、上吉田の堰(せき)でツガネやウナギの放流体験をしています。初めて触る生き物に、おずおずと手を出す園児の姿は、微笑(ほほえ)ましいものです。

【吉田川　魚の放流】

【吉田夏まつり】

夏まつりは、役員・実行委員が総動員で企画・準備をします。地域住民や応援してくださる企業・団体様がいて開催できます。吉田を愛し、支援してくださる方々に感謝です。吉田川の上空に上がるきれいな大輪の花火を毎年見たいものです。

⑥〈笑ってＹわい会〉（女性部）

吉田地区地域コミュニティ運営協議会には、５つの部会があるものの女性が主体となって活動する部会はありませんでした。そこで、令和元年に女性の活動の場を模索(もさく)して人を募(つの)り共通理解を図り「笑ってYわい会」が誕生しました。名称は、“笑顔で何でも言える会”にしたいという会員の願いです。元年度は、グラウンド・ゴルフ大会参加者への郷土料理“だご汁”の振る舞いや講演会開催、また県外への視察研修等も行いました。今後、会員を増やし、経験と英知(えいち)を生かした活動に取組まれ、継続･発展していくことが期待されます。

【郷土料理づくり】

【県外視察】

（２）ヨッシー号の運用（巡回バス）

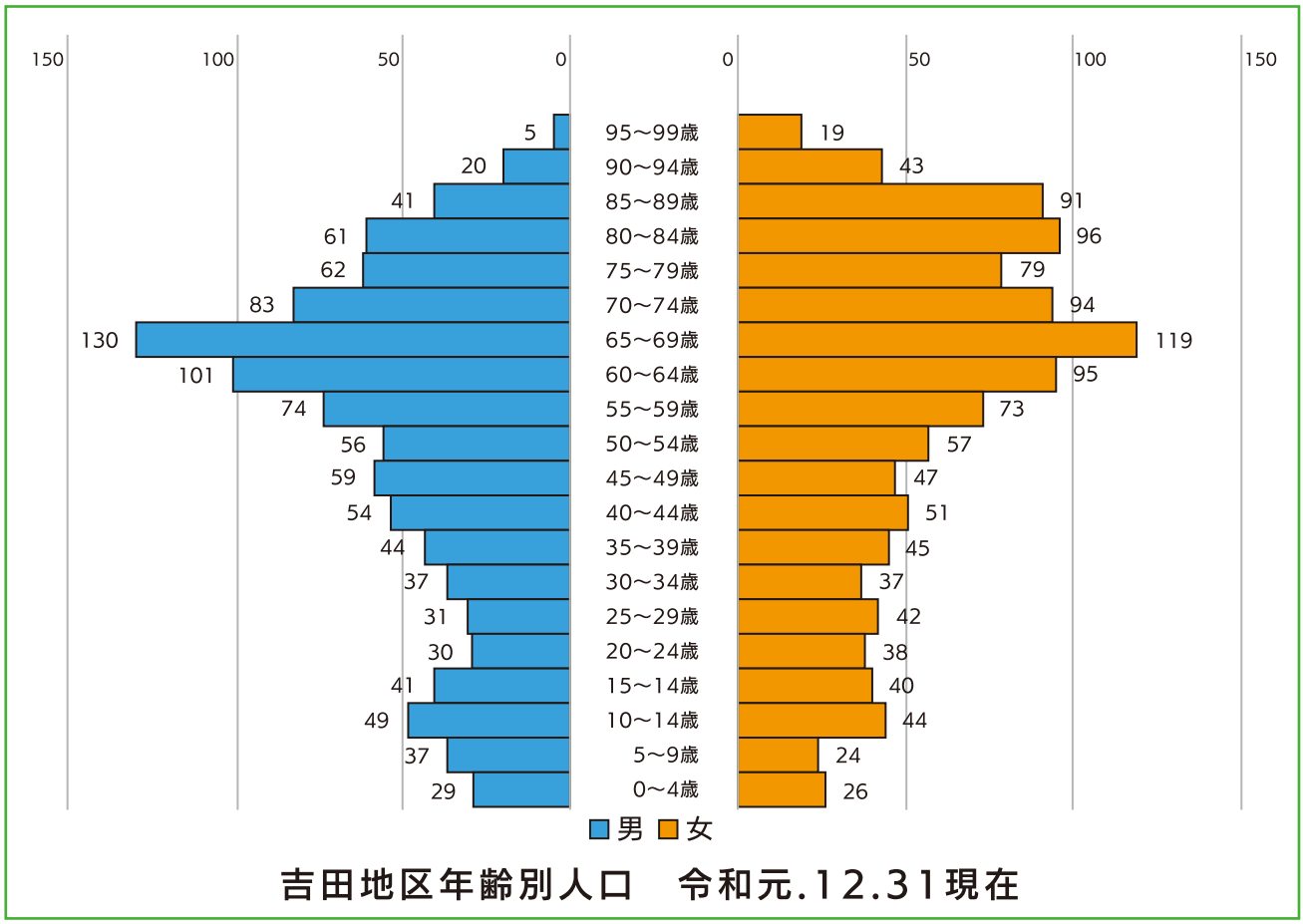
吉田地区は、山間地のため車がないと買い物や通院には不便です。そこで、平成25年９月、吉田地区地域コミュニティ運営協議会は市と協議を行い、吉田地区内の移動手段を確保するために無料巡回車「ヨッシー号」の運用を開始しました。

「ヨッシー号」は、谷あいに沿って５つのコースで運用されています。「春日線」「西川内線」「東吉田・下吉田線」「峰川原線」「西吉田線」です。しかし、運転の回数は限られますし、土・日や祝日は運転がありません。また、車は、行きの便と帰りの便の間に所要の時間を見積もって時刻表が組まれていますが、利用する人は時刻表を見落とさないようにする必要があります。

運転手は、安全運転に心がけていますが、天候不順や大雨の後などの状況により巡回ができない場合もあります。今後も自家用車での移動手段がない交通弱者に対し、笑顔で運転に専念して住民から感謝してもらえるヨッシー号でありたいと思います。

【ヨッシー号】

（３）吉田地区の人口構成（総数 2, 204 人）　男性：1, 044 人　女性：1, 160 人



〈グラフから読み取れること〉

○ 吉田地区の住民数は、女性が 100 人ほど多い。年齢構成では、60 歳から 74 歳までに集中している。65 歳～69 歳の総数が 249 人と最も多い。
○ 59 歳以下は減少し、働き盛りの人が減る傾向にあると言える。
○ 全体としては、若年齢ほど人口が少なく、４歳までの総計が 55 人である。
○ 吉田地区の人口減少は急速に進み、過疎化が一層進むことが予想される。

（4）吉田地区で活躍する人々（団体）

① 活き生き吉田会

活き生き吉田会は、吉田地区地域コミュニティよりも成立は早く、吉田地区の良さを児童・生徒、若い世代に伝えたいという思いを持って結成されました。最近では、春の「百年桜まつり」や「葦筒神社　おくんち」では、地域の特産品販売や羽釜ごはんを炊くなど食のイベントを行い地域の活性化に力を注いでいます。また、農業体験を企画したり、“れんげ米”を推奨したりして、地域農業の充実と新しい試みにより吉田地区の発展に寄与されています。また、学校行事へも積極的な協力を行い、青少年育成にも貢献しています。

【表彰状】

活き生き吉田会は、このような実績が認められ、令和元年６月には、佐賀県より第 12 回佐賀県食育賞が授与されました。この賞は、地域で食育活動に携わり、顕著な功績があった個人や団体を表彰するものです。

② 吉田まんぞく館

東吉田区の小字「下万属」地区にある「吉田まんぞく館」は、近隣の市町からのお客さんをはじめ地元の方々が多く訪れる商業施設です。地元の新鮮で旬な農産物、弁当や惣菜、さらには吉田焼など、多くの商品が店頭に並びます。店内には、名物「だご汁」を提供する食堂も備えています。平成 15 年当初の組合員は、80 人ほどでしたが、令和元年度は 240 人と増加し、それに伴い商品や種類も増えています。

【吉田まんぞく館全景】

まんぞく館の方は、「働く人は、吉田地区ばかりでなく他の市町からも通勤し、お客様の要望に応えられるよう奮闘しています」、「まんぞく館では、新鮮で安全・安心な食材の提供ができるよう組合員の意識と実践を高める研修会なども取り入れています。食の安全を第一にしながら、商品の充実と販売促進を図るよう頑張っています」と語っておられました。

③ 肥前吉田焼窯元会館

平成７年に造られた「肥前吉田焼窯元会館」は、窯元で焼かれた焼物の展示・販売を行い、手びねりや絵付け体験コーナーを設置し、焼き物を身近に感じられる場所となっています。ロクロ体験は、近くの窯元で行うことも可能です。窯元会館は、窯元組合の事務局としても活動されています。最近では、窯元の連携により「えくぼとほくろ」の事業も推進しておられます。これは、丁寧に作った商品でも釉薬をかける際に気泡が小さな窪み（えくぼ）になったり、原料に含まれる鉄分などが小さな黒い点（ほくろ）になったりすることから名づけられ、これらを格安で販売するために企画されたそうです。

【肥前吉田焼窯元会館全景】

また、窯元会館と窯元では、４月に「おやまさん祭り」、11 月には「辰まつり」を開催し

ています。これは、各窯元がそれぞれ企画するより、地区全体で取組むことで成果が出せるようにと始まったそうです。400年以上の歴史を誇る吉田焼が、さらに成長・発展していけるよう、吉田焼に携わる皆様方の活躍を大いに期待し見守りたいと思います。

④ 吉田ふるさと文学展示館〈窯元会館の展示コーナー〉

窯元会館には、吉田出身の３名の文学者の作品の展示コーナーが設置されています。

○ **作家 ： 前田 珠子 氏** 1965年生まれ　吉田在住

鹿島高校から佐賀大学へ進み、1988年に「宇宙に吹く風 白い鳥」で文庫本デビューされました。以後、「眠り姫の目覚める朝」、「破妖の剣」シリーズ、「聖石の使途」シリーズ、「天を支える者」シリーズ他、少女小説、ＳＦ小説等、多数の作品があります。

これからも、すばらしい作品が作り出されて、読者を魅了されていくことでしょう

【前田 珠子氏】

○ **俳人 ： 大串　章 氏** 1937年生まれ　　千葉県在住

中学生の頃から「毎日中学生新聞」に投稿するなど、早くから文学への関心が高かったそうです。昭和30年１月１日の投稿では、

俳句「打ち合うて　はねてまた寄る　けんか独楽」
短歌「昨夜まで窯場は攻火見えいしが今朝は寂かに初日浴びおり」

の作品で一等を受賞されています。短歌は、吉田の窯元の風景を詠まれたもののようです。また、大学在学中に俳誌「濱」同人、大手鉄鋼メーカーの勤務を経て俳人となると俳句会「百鳥」を主宰をされ、今でも毎月、窯元会館には「百鳥」の会報誌が届いています。

なお、日本文藝家協会や俳人協会理事、「朝日俳壇」の選者等でもご活躍されています。

【大串　章 氏】

○ **文筆家 ： 中島 虎彦 氏** 1953年生まれ

大学在学中、器械体操中の事故により頚随損傷となり障害を負われました。治療入院中から地元紙への短歌投稿をはじめ、県文学賞　詩部門一席（1979年）・小説部門三席（1982年）を受賞するなどの経歴があられます。その後、小説「卑弥呼まで」や評論集「障害者の文学」等を執筆され、2001年には、歌集「夜明けの闇」を出版し、障害者の視点に立った小説や口語体の短歌づくりなど、幅広い活動をされておられました。世相を厳しく見つめるコラムなども書かれていましたが、2007年若くしてに急逝されました。

【故 中島 虎彦氏】

10 「ふるさと吉田」年表

西暦	和暦	
太古		明治20年頃、吉田小学校校庭の井戸の底に浅利貝の化石が見つかり、太古の時代では、有明海（筑紫海）が吉田・嬉野地方に入り込んでいたと思われる。しかし、吉田川流域においては、貝の化石や海に関する地名が一つも残されていないことは不思議なことだ。吉田地方は、他の地方よりも開発が少し遅く、人が住み付いた時は海は陸と変わり、既に川の状態であったものと見られている（嬉野略史）
神話時代		嬉野温泉は嬉野に於ける唯一最大の地下資源である。泉脈は、白山火山脈の瀬戸内火山帯に属し、神話時代の昔より涌出していたものと見られている。温泉古湯は、其の昔旧豊玉姫宮の境内にあったとのことであり、温泉に因む地名として湯野田、湯宿（温泉区）西湯岳、湯岳等の地名が残されており、春日にも鉱泉が出ていたとのことである（嬉野略史）
縄文時代 ・ 弥生時代		嬉野地方に石器の出土したるところは、大野原、鹿谷、陣野、一ノ坂、温泉遊園地、山王（温泉二区現嬉野館所在地）下宿、井手川内、祇園、春日、水頭等であり、殆ど縄文時代のものが多く、彌生時代のものは二・三に過ぎないようである（嬉野略史） 縄文時代の遺跡として、祇園遺跡が分布している。土器の発見はない（嬉野町史） 塩田川に面する的場遺跡、陣野遺跡、祇園遺跡からも石鏃、石匙、石斧などが出土している（日本地名大辞典）
古墳時代		藤津地方での古墳は、有明海周辺に確認され、嬉野町では存在が確認されない。農耕社会の発達が遅れたことによると考えられる（嬉野町史）
		吉田川、村ノ南極字川上ヨリ発シ、村内ヲ串流シ下流塩田川ニ入ル。最深所丈余（中略）、水清淡ニシテ急流タリ、長サ三里半バカリ（藤津郡村誌）　塩田川水系、延長十一．七キロ
540		藤津郡は、葛津立国と呼ばれ、火国に属したと考えられる。大化の改新後には、藤津と高来の2郡となる（嬉野町史） ※塩田町史では、葛津立国は、藤津・高来・彼杵の3郡を含む一帯とされている
645	大化元	大化の改新（年号の始まり）　※県主・国造は廃止され、肥前国を治める国司が任命される
653	白雉4	八天神社創建（社伝）
698	朱鳥13	藤津郡が設定される（嬉野歴史観光ガイド）
709	和銅2	葦筒神社遷座（葦筒神社由緒記） 祭神は国之常立神・大国御魂神。もともと吉田村「マツヨシ」にあったのを「カヤシキ」に移し、和銅二年今の地に社地を定めたと伝える （日本歴史地名体系第四十二巻佐賀県の地名）（嬉野町史）
710	和銅3	葦筒宮建立（納戸料）元明天皇和銅三年葦筒宮建立さる（嬉野略史）
713	和銅6	律令制下の嬉野は、和銅6年（713）の「肥前国風土記」の藤津郡（角川日本地名大辞典）
715	霊亀元	「肥前国風土記」の成立時期は、霊亀元年（715）から天平11・12年（740）までの間（角川日本地名大辞典）
734	天平6	734年～740年頃に書かれた肥前風土記には、肥（火）国が、肥前国と肥後国の2つに分かれたとの記述がある。「藤津郡」が文献上初めて見えるのは、肥前風土記である（嬉野町史）
871	貞観13	この頃、藤津郡は仁和寺の荘園となったと推定される（嬉野町史）
平安時代		永寿寺、不動明王及び二童子造立と推定（国宝：大正5年、国重要文化財：昭和25年指定） 藤原氏によって摂関政治が行われ、貴族文化が栄え、貴族や社寺の荘園が増加して、公地公民の制度は廃れた（嬉野町史）
1191	建久2	両岩神社「創祀の年代は詳らかではないが鎌倉幕府以前であることは疑いはない」（両岩神社縁記集）
1249	建長元	この頃、両岩神社の拝殿再建される（両岩神社縁記集）
1259	正元元	北条時頼、葦筒社にて病平癒祈願、木造狛犬を奉賽（社伝）
1274	文永11	龜山天皇　文永十一年文永の役に白石六郎（六代）通泰出陣す。嬉野郎党等軍兵六百余騎を率い博多に出陣し戦功を建てた（嬉野略史）
1281	弘安4	御宇多天皇弘安四年弘安の役に白石通泰戦功を建て藤津郡の地を賜る。　藤津郡の内能古見、吉田、嬉野を賜り湯野田権現山（西公園）に支城を設け此れを治めた（嬉野略史）
1284	弘安7	佐志村女地頭宇久曽、父勇の元寇勲功の地、筑後国上妻庄忠見名地頭職の替え地として、肥前国吉田村の地頭職を与えられる（嬉野町史）
1289	正応2	宇礼志野氏の蒙古合戦勲功地、神埼荘に10町以上。嬉野の地名初現（肥前国神埼荘史料）
1292	正応5	「藤津荘六百丁、但除吉田村定、木宮四丁」（河上神社文書） 「河上宮造営用途支配惣田数注文」この資料が吉田という地名の初現　（河上神社文書）（佐賀県大百科事典佐賀新聞社） 「惣田数注文」（河上神社文書）には「藤津庄六百丁但除吉田村定」「吉田村六十町」「木宮四丁」とある（日本歴史地名体系第四十二巻）

1292	正応5	この頃、肥前の総田数17，918町歩、嬉野庄600町、吉田村60町（嬉野町史） 藤津郡のほぼ全域が仁和寺の荘園であったことが推定される（嬉野町史）
1298	永仁6	綸旨により肥前藤津荘は仁和寺領となる（嬉野歴史観光ガイド）
1335	建武2	建武の中興で、足利尊氏に味方。その恩賞として吉田の地を給わり、支配を始める。吉田左兵衛尉雄国（かつくに）と名のる（藤津郡志襍俎） 雄国ー左兵衛尉、吉田姓となる。建武の乱に尊氏に属し、肥前国白川に於て軍忠、之に依り恩賞として肥前国藤津郡を給わり、筑後国より肥前国藤津郡吉田邑に移り、始めて吉田と号す（嬉野町史）
1351	貞和7	吉田村上方の平町彦次郎兼谷跡の田畠が武雄神社に寄進（武雄神社文書）（嬉野町史）
1382	弘和2	国印や正倉の鍵を保管した「印鑰社」（大和町尼寺1382建立）、「印鑰天神社」（鹿島市納富分）があるが、東吉田にも「印鑰社」が残存し、12～13世紀頃のものと見られている（嬉野町史他）
1404	応永11	7月5日福田兼親の子兵庫介兼家、吉見彦次郎に属して彼杵俵坂に馳せ参じ、探題を軍忠する　このとき大村・白石の凶徒と合戦する　次いで藤津郡の丹生河・井手・小河内・宇礼志野・吉田と転戦する（福田家文書）
1440	永享12	唐人平戸より皿屋敷谷（皿屋谷）に来り陶器を焼き自家用の飲料として小量の製茶をなす。後明人紅令民南京釜を持ち来り唐式製茶盛となる（嬉野略史）　※茶の栽培の始まり
1481	文明13	東吉田の無量寺は、橘親平が本光坊大和公に証状を与え、住持職を安堵し用地を寄進したとされる。本光坊は、八天神社の一坊である（嬉野町史）
1494	明応3	この頃、藤津の武将は有馬氏に従う。
1507	永正4	真如山本覚寺創建「藤津郡吉田郷先領吉田太良左衛門尉蔵人永正年中建立」（寺伝） 真如山本覚寺　吉田郷刺史　吉田太良左衛門尉蔵人を開基とし、佐賀本行寺円蔵院日良を開山として建てられたという（日本歴史地名体系第四十二巻佐賀県の地名）
1533	天文2	明覚寺創建、その後、西吉田に「明覚寺庵」が建てられる
1574	天正2	田中安心（田中茂之、源右衛門）、龍造寺隆信より吉田諸岩の地を拝領する（嬉野町史）（日本歴史地名体系第四十二巻佐賀県の地名）　江戸期、両岩は鹿島支藩領に属する
1576	天正4	嬉野は龍造寺隆信の所領となる（嬉野氏、吉田氏本領を与えられる）（嬉野町史） 吉田城山の戦（元可と吉田の争）（田中源右衛門茂之は八十二才にして卒し浜町泰智寺に墓あり）嬉野氏五代越後守直通の舎弟元可嬉野与右エ門通治は直通戦死後浅浦に封ぜられ領域を拡げんと千五百七十六年頃、両岩上方夜討平にて両岩地頭田中源右エ門茂之と戦った。両軍とも勇猛にして仲々雌雄決せず多数の戦死者を出したが元可は遂に諦め浅浦に引き揚げた（嬉野略史） 横造城の戦（有馬氏と龍造寺氏の争） 龍造寺隆信は、1万余騎にて須古を立ち、藤津へ進む。・・宇礼志野越後守直通という者、有馬にいたりしが龍造寺の陣に馳せ加わる。吉田左衛門大夫も越後守と一つになり相戦う（嬉野町史） 東吉田本覚寺を内蔵院日良上人開基建立（嬉野略史）
1577	天正5	吉田左衛門太夫家宗、吉田陶石発見（嬉野町史） 龍造寺周家は大村、有馬攻略のため間道を通り羽口川上鳴谷川にて磁土玉石発見せり。其のときの道案内は吉田左エ門太夫家宗である（嬉野略史） 安徳寺を田中安心師開山建立（嬉野略史）
1579	天正7	龍造寺隆信、肥前・肥後・筑前・筑後・豊前5国、壱岐・対馬2島の太守（嬉野歴史観光ガイド）
1580	天正8	藤津衆、鍋島豊前守信房を先として塩田津より出陣　筑後の陣を発して肥後に討ち入る　原、吉田、永田、辻、久間、嬉野の一族等が従う
1584	天正12	原・嬉野・吉田等藤津衆龍造寺軍に加わり島津勢と戦う（嬉野町史）※沖田畷の戦い 龍造寺隆信戦死するや吉田郷は必然的に吉田太郎左エ門尉蔵人に帰り蔵人は吉田郷の地頭職となった（嬉野略史）
1588	天正16	吉田太郎左エ門尉、龍造寺政家の命により、藤津郡飯田（七浦）の砦を守った（嬉野町史）
1591	天正19	秀吉征韓の令を出し鍋島直茂公の部下として両岩の地頭田中源右衛門茂之、嬉野（六代）休蔵通直、同舎弟嬉野孫作通清等韓土に出陣し数々の武勲を建てたが嬉野孫作通清は韓土にて戦死した（嬉野略史） 鍋島直茂公に率いられ、藤津から出陣した諸士の中に、吉田太郎左衛門がいた。鍋島三郎兵衛組に配された（嬉野町史）
1595	文禄4	郷村帳が作成される　後の貞享4年（1687年）と万延元年（1860年）に改められている　東分は七浦郷、能古見郷、鹿島郷、西分は塩田庄、嬉野庄、吉田郷 秀吉征韓の時、吉田太郎右衛門　文禄年中に戦いに加わる（嬉野町史）

1598	慶長3	鍋島直茂、朝鮮より陶工を連れ帰り、吉田で陶器を作らせる（開窯説）
1600	慶長5	「上吉田・下吉田」の名がみられる『慶長肥前国図絵』（佐賀県大百科事典佐賀新聞社）
1601	慶長6	嬉野下宿に大定寺創建　開基は嬉野家通、開山は権大僧都阿金（大定寺坂の地名起こる）。明治12年（1879年）に皿屋の医福寺跡地に移転した
1605	慶長10	幕府は、「慶長国絵図」を作らせた。上吉田が記され、下吉田、東嬉野、鍋野、西嬉野の地名には、石高は全て、「上吉田ノ内」と併記されている
1614	慶長19	禅宗聖福山永寿寺創建　鍋島傅兵衛一門の菩提寺　開基は鍋島傅兵衛茂教　開山は佐賀高伝寺9代天国泰薫大和尚　茂教は武雄鍋島家、後藤家宣の二男（嬉野歴史観光ガイド） 辺田に親房公九世の孫宗藩地頭職鍋島伝丙工茂教永寿寺建立す（嬉野略史）
1625	寛永2	吉田・嬉野・鳥坂・有田において金山試掘（嬉野町史）
1626	寛永3	浄土真宗本願寺派の廣嶽山安徳寺創建　　開基は田中安心、鹿島初代藩主鍋島忠茂の菩提を弔うために安徳寺建立した。明治12年の火災により各種記録が消失した。（嬉野町史）
1636	寛永13	両岩永洗寺不動岩より、不動明王像を寺辺田永寿寺南方へ移転され、其の後明治初年永寿寺本堂南方に安置す（嬉野略史）
1639	寛永16	蓮池藩成立（勝茂の3男直澄へ35，600石を与える）　寛永19年には42，000石となり、後52，625石となる。行政組織として塩田に「塩田役所」を設置。　頭人が指揮官　この役所支配下の代官所は吉田と鳴瀬に設置
1639	寛永16	蓮池支藩創設時に、吉田郷の上吉田村は鍋島隼人の知行地（嘉永六年写の大小配分石高帳）、両岩は鹿島支藩領であった。また蓮池支藩領の藤津・鹿島地方における石高は一〇三〇六石余りで、山地の大部分は佐賀本藩領に属していた　（日本歴史地名体系第四十二巻佐賀県の地名） 鎖国令が出される
1641	寛永18	吉田諸岩領主田中安心没（85歳）（嬉野町史）
1643	寛永20	副島雲谷、吉田皿山に窯を築く（嬉野町史）
1647	正保4	吉田山は大外山に入る（嬉野町史） 幕府により「正保国絵図」が作られ、絵図には西吉田村、東吉田村、春日村、上吉田村と記され石高がそれぞれ併記されている
1654	承応3	鍋島直澄、吉田に窯を築く（開窯説）、（嬉野町史）　直澄、吉田に一荘を置く　本藩領内野山、嬉野皿屋運上は銀8貫115匁4厘5毛（小物成算用帳） 嬉野地方は佐賀本領には上吉田、皿屋谷、内野山、大野原、鹿島藩領には下吉田の一部、その他は蓮池藩領とすることを布告した（嬉野略史） 春日地区に山方と呼ばれる一団が移住したとされる
1661	寛文元	直澄、有田から4人の窯業指導者（副島、牟田、金ケ江、家永）を吉田に招聘　従来の小窯を廃して2登の大窯を築く（嬉野町史）
1662	寛文2	直澄、吉田皿屋に医福寺を建てて宿所とし、窯業の保護と発展に努める（嬉野町史） 吉田山の記録上の初見が、「吉田山捻左エ門娘、吉田山千右エ門子」である（龍泉寺過去帳）
1669	寛文9	蓮池藩主鍋島直澄没（55歳）（嬉野町史）
1672	寛文12	湯岳堤の築造は、寛文12年（1672）皿屋瓢箪原に天照皇太神宮を祭りて地鎮祭を行い、延宝5年（1677）その竣成を見たりといふ（嬉野町史）（嬉野吉田郷土誌）
1674	延宝2	赤仁田堤の地鎮祭にあたっても天照皇太神宮を祭った。この堤は延宝2年（1674）竣工したりといふ（嬉野町史）（嬉野吉田郷土誌）
1676	延宝4	葦筒神社の今の神殿は、領主鍋島摂津守藤原朝臣直之が寄進したものである。現在吉田地区の氏神になっている。境内社には大神宮・山神社・稲荷神社の三社があり、下の宮はもと東吉田の権現社であったが、のちには皿屋の天満宮に変更になった（日本歴史地名体系第四十二巻佐賀県の地名）
1682	天和2	峰地区に3本の灌漑用水路が造られたという記録がある（峰区長所蔵資料）
1687	貞享4	御領中郷村帳（佐賀県立図書館蔵）には「西吉田村・赤新田村・　鍋島傅兵衛給」とあるが、西吉田村の蓮池領は村中に高二百四十七石五升ある（芙蓉旧話）ので、鍋島傅兵衛の知行地の赤新田村は西吉田村の分かれかと思われる（日本歴史地名体系　佐賀県の地名） 西吉田区権現様が祀られる石祠には、貞享4年（1687年）と記されている
1690	元禄3	皿屋大定寺にある芭蕉句碑にある「先堂のむ　椎の木も阿り　夏木立」が詠まれた年である
1692	元禄5	一宮神社　大野原村中より氏神として勧請される

1693	元禄6	鍋島本藩吉田邑家老等3人が、京都高倉神社より分社賜り「高倉稲荷神社」を建立したとされる（地域の言い伝え）　（年代は、嬉野町史による）
1699	元禄12	雷電洪水、鹿島・吉田・塩田地方の田畠民家破損する（嬉野町史）
1700年頃		春日地区に「一里溝」という灌漑用水路が作られた
1701	元禄14	皿屋に、火の神「八天狗」の石祠が建立され、以後も吉田内での建立があった（嬉野町史）
1702	元禄15	幕府は「元禄国絵図」を作らせ、地名や石高、道路等を記させた。藤津郡領内が判別できる「西吉田・東吉田・春日」各村の枝村あり『元禄肥前国図絵』（佐賀県大百科事典佐賀新聞社）
1703	元禄16	吉田葦筒之宮祭礼の「踊り狂言」を質素にするよう藩が村に要請（請記）
		東吉田村、下吉田村開墾を藩に申請して認可される 「梅谷、柳坂、版木村、羽白越、長尾和泉水谷他」（蓮池藩請役所日記）
		吉田皿山薪払底「皿焼薪弐百五拾匁の山手形」（請記）
		塩田川成、嬉野川成、吉田川成の書付本藩に提出
1704	宝永元	湯岳皿山（吉田皿山）、薪山売り方の願いを藩に申請
	宝永年間	葦筒神社入口に、蓮池藩2代藩主鍋島直之により「明神鳥居」が寄進される
1710	宝永7	天草石を使用し日用食器を主体として製作した磁器。当初は有田大外山として栄え、有田泉山の陶石を利用したとも伝えられている（佐賀県大百科事典佐賀新聞社） 赤仁田堤前に、「八天狗大権現」が祀られる
1712	正徳2	吉田新左衛門、大渡金兵衛他6人、皿屋に「八天狗」を祀る
1714	正徳4	副島茂右衛門　96歳で没する（有田から招聘された吉田皿山創業期の窯焼きの一人）
1727	享保12	本藩からの要請で大阪での焼き物販売問屋を一本化する 「吉田皿山は六七十年以来、塩田町人共、仕込み銀差しだし」（蓮池藩請役所日記）
1728	享保13	6月に発生した大風雨のため、嬉野・塩田に大洪水、9月に大風雨来襲し、西目三郷（塩田・嬉野・吉田）の被害ひどく、家屋219戸倒れる。この後数年間、旱魃、虫害と連続し「享保の飢饉」と言われる時期が続いた（嬉野町史）
1729	享保14	八月、連続二回の暴風雨被害あり「塩田、嬉野、吉田三郷の家屋二百十五戸倒壊」（日誌） 佐賀領内、潰家4，290軒余、死者8人
1743	寛保3	藩、吉田皿山陶器代銀、25貫目を大阪役所に送付
1752	宝暦2	吉田中通りの白岩山に窯が築かれる　本藩領の窯（嬉野町史）
1753	宝暦3	皿屋天満宮に菅原道真像が祀られる
1754	宝暦4	吉田皿山代官交代　増田寿右衛門から石田勘助へ
1761	宝暦11	本藩領の吉田山に1カ年に土を500俵ずつ渡す　泉山陶石の分配を制限 吉田へ有田陶石を42，500斤と制限（嬉野町史）
1763	宝暦13	俵坂番所の修復を藩に要望　　吉田峰番所は侍1人が配置されていた
1764	明和元	本藩より大阪での陶器販売についての依頼有り 「（有田）皿山同然大阪米屋平衛門方へ指登候様」「相不叶」（蓮池藩請役所日記）
1766	明和3	「吉田皿山諸運上銀請払目安」の文書書かれる（嬉野町史）
1767	明和4	藩、吉田西山陶器を仕入れて大阪での販売始める 「大阪において六百俵積みの船一艘買い入れ」（蓮池藩請役所日記）
1767	明和4	吉田皿山代官交代　　納富五郎兵衛から大木八百右衛門へ
1769	明和6	吉田で藩主導の紙漉き事業始まる 大阪で販売「今度鍋島摂津守殿領内にて紙漉き立て、大阪に仕登せ候に付き」（請記）
1770	明和7	吉田窯焼、吉田に絵薬座の設置を藩に申請
1772	安永元	台風被害発生　吉田村、堤防等破壊される 「大雨洪水・・・近年稀に見る所なり」（日誌）堤防修繕を本藩に依頼、蓮池藩と共同で行う
1778	安永7	本藩領の吉田山窯焼の弥兵衛、嘉兵衛が銀1両ずつ拝領　「夫料代、日銀の通り相納め候に付き」（請記）（皿山代官旧記覚書）
1781	天明元	本支藩の藩境争いの結果、蓮池藩によって約2千個の番号を入れた藩境石が建てられた（嬉野町史）
1784	天明4	嬉野、吉田疫病流行。大風雨あり倒壊家屋、百数十戸 「天明の飢饉」（嬉野町史）（嬉野略史）

1789	寛政元	寛政年間は、大洪水・旱魃が続き「寛政の飢饉」とされる（嬉野町史）
1797	寛政9	吉田山山林地、鹿島領両岩村との間で境界紛争発生 「宗藩に請いて分明ならしむ」（蓮池藩請役所日記）
1812	文化9	吉田の採石地で掘り出した鳴戸石を志田西山に売却していたが、吉田山では陶石不足のため価格で紛争が生じ、吉田皿山代官所、藩陶磁器方の調停で吉田山に有利に解決じた（蓮池藩請役所日記）
1815	文化12	吉田山拝借金を願い出る 「赤仁田堤水口書附帳」には、赤仁田堤水口の儀、先年より七分三分と相分り居候とあり、赤仁田村と皿屋の水分けについて決められていた（嬉野町史）
1820	文政3	赤仁田の辰ノ口水源近くに「八大龍王神」が祀られる
1828	文政11	有田皿山の大火以後、吉田の民芸陶として盛んになった。十五の窯元があり、有田焼の格調をもつ日常生活用品として、湯呑、急須など白磁器に色絵付けしたものを作っている （佐賀県大百科事典佐賀新聞社）
1829	文政12	「吉田山御通り遊ばされ候処釜焼十八人、平伏相願い差免ぜられ候」とあり、吉田には釜焼が18人いたことがわかる（西目村々御巡見中日記） 上吉田山、登窯大破による窯の塗替えのために資金拝借願いが出された（皿山代官旧記覚書）
1832	天保3	鹿島私領村々畝数石高帳には「藤津郡能古見郷両岩村　一、田畑屋敷茶畔　四拾壱町八段五畝二拾二歩　地米　二百五石八斗七升四合」とある（日本歴史地名体系第四十二巻佐賀県の地名）
1833	天保4	この頃、窯業界大不況　　天保の大飢饉
1834	天保5	鍋島直興公嬉野、吉田、塩田巡視
1834	天保5	佐賀藩士南部長恒「疎導要書」：吉田村、上・下峰村、其の他の作水について記述（嬉野町史）
1838	天保9	吉田陶器方欠銀を出す
1841	天保12	大雨被害発生　吉田川付近堤防決壊 吉田山陶器方主任の尾形軍治、銭預符を陶器職人に通用するようにしたが本藩からの許可を受けずに行ったため、蟄居処分を受ける
1842	天保13	赤仁田村・皿屋村・西吉田村の庄屋等、水分けの件で「約定一札覚」を定める（嬉野町史）
1844	弘化元	鍋島直與、吉田山再興のため尾形惟晴を遣わす。翌年、窯を改築し再興する（嬉野町史）
1847	弘化4	鍋島傅兵衛家10代鍋島隼人忠房は、菩提寺永寿寺の近くに「山王神社」を建てる
1852	嘉永5	「吉田村」とある『吉田郷図』（佐賀県大百科事典佐賀新聞社） 吉田村には皿屋・赤仁田・西川内・西吉田・東吉田・殿ノ古庭・中通・寺辺田・峯・川内・万歳・岩ノ下・赤瀬・春日・納戸料・両岩の十六の小字があり、今に継承されている 『藤津郡村誌』（佐賀県大百科事典佐賀新聞社）
1856	安政3	春日では、安政年間（1854～1859）より明治初年にかけて製茶戸数80、他郷より茶摘女200余名、年額5500斤（嬉野町史） 東吉田への納戸料からの水利については、取水口の取り決めがあったとされる東吉田の文書が残っている（嬉野町史）
1857	安政4	吉田郷から茶輸出願い出る 「上茶百六十斤、中茶千九百斤、下茶六百五十斤郷内遣い方分」
1860	万延元	郷村帳には、東吉田村の中には「宇留土村、下ケ棚村、中村」を含んで書いている　また「藤津郡村誌」には「東吉田名ハ二十三字ヲ以テ本称トス、（日本歴史地名体系第四十二巻佐賀県の地名）
1863	文久3	藤津郡吉田郷配分上吉田村・田畠・竈数・人別帳には、春日村は上吉田村の中に含まれている。　藩政時代は佐賀本藩の家臣鍋島隼人の知行地であった所で、蓮池支藩の領地ではなかった（日本歴史地名体系第四十二巻佐賀県の地名） 上吉田村に、寺辺田分・峰分・川内分・万財・岩下分・赤瀬分・春日分の七地区に分けられ、藩政時代は佐賀本藩の家臣であった鍋島隼人の知行地で、曹洞宗寺院永寿寺がこの地区の檀那寺であり、天台宗平尾山別当触内である本光坊弟子の山伏快行坊もこの地区にいた（日本歴史地名体系第四十二巻佐賀県の地名）
安政年間～明治初年		「製茶戸数　80　他郷より茶摘み女　200余名　年産額　5,500斤」（嬉野吉田郷土誌）
1871	明治4	皿屋、赤似田、西川内、西吉田、殿ノ木庭、中通り、寺辺田、峯、川内、万歳、岩ノ下、赤瀬、春日、納戸料、両岩、東吉田の16村により吉田村となる（藤津郡村誌） 下吉田は下野村の一部となる

1871	明治4	「岩屋川内の利衛門、春日の久保白平吾、静岡長茶の製造するも1年にして中止」 （嬉野吉田郷土誌） 藩は県へ：佐賀県、蓮池県、鹿島県、唐津県、小城県へ（4ヶ月間）
1872	明治5	村の統廃合が行われ、嬉野は吉田村・下野村・岩屋川内村・不動山村が発足し、戸長役場が置かれる　下宿村は同6年発足
1873	明治6	約牖（ヤクユウ）小学校・時習小学校・原思小学校・吉田学校・嬉野学校開設 吉田村中通り、中村周平宅に「原思小学校」を創立する
1874	明治7	久間山小学校（明治9年西山に移転）・塩田小学校（約牖（ヤクユウ）小学校から改名）・五町田小学校・岩屋小学校「原思小学校」は廃校になり、吉田小学校（皿屋名に移転）・岡元小学校（寺辺田）・美野校開校（嬉野町史） 本村は2小區に属し、戸長役場を寺辺田に設置し、南部北部両戸長を置き各区に惣代を置く （嬉野吉田郷土誌）
1875	明治8	大草野小学校・志田小学校・美野小学校・春日小学校・不動山学校 大野原小学校・馬場学校・岩屋学校　開校する
		大区制改正、藤津郡5区。嬉野吉田は第2小区　「嬉野宿ニ扱所ヲ置キ」とある（嬉野町史）
		この頃から窯元から独立した陶土業が始まる（江戸期は規制があって窯元で行っていた）
1876	明治9	吉田小学校は、納戸料に新築移転される
1877	明治10	第一回内国勧業博覧会に嬉野の高柳吉郎が「蘭露」「舞鶴」と云う茶を自費出品、また、吉田から副島次作等が陶器出品（水指、急須、せん茶碗等）（嬉野町史）
1878	明治11	郡役所が高津原村に設置され、藤津郡内町村管轄、吉田村も含まれる。（歴史観光ガイド） 嬉野区務所にて「村数戸数人口取調書」作成される　吉田村954戸　4399人
1879	明治12	下宿にあった大定寺は、皿屋の鍋島直澄公縁の「医福寺」跡地に移転再興された
1880	明治13	副島利三郎が皿山に「精盛社」を設立して陶磁器製造に当たる この頃から吉田では個人経営の登り窯が始まる（嬉野町史）
		上・下に戸長が置かれていた吉田村戸長が統一され、1人になる。（井手平六戸長） 郡区町村編制法により郡役所が藤津郡内の町村を管轄するようになった（嬉野町史）
1881	明治14	この年調査の吉田、久間、内野山の窯業状況（長崎県第一回勧業年報） 白岩山－1登り14室　窯焼・宮崎実右エ門外4名 皿山ー3登り42室　窯焼・牟田文吉外20名 この頃、白岩山窯元は皿屋に移転した（嬉野町史）
1882	明治15	吉田焼この頃から翌年にかけて大不況 従来の内地向け製品を中国向け製品に切り換え中国貿易始まる（嬉野町史）
		維新後初の新登り窯、「社の窯」が作られる（嬉野町史） 〈関連〉19年吉田皿屋に山口又七開窯　20年吉田皿山に石井又五郎開窯 26年吉田皿山で大串音松開窯　（明治43年佐賀県統計）
		藤津郡併合村会ができ、藤津郡の骨子ができる（嬉野町史）
1884	明治17	下吉田の学区が吉田小学校区から分離する
1886	明治19	吉田に消防組発足（嬉野町史）
1887	明治20	吉田、岡元両校合併、校舎を中通りへ移転、公立尋常吉田小学校となる（嬉野町史） 春日小学校、吉田小学校の分校となる（嬉野町史）
1888	明治21	吉田焼、朝鮮輸出―手問屋定款が作成される 翌22年、京城の商人が来て、吉田山からも業者が朝鮮にわたり、販売の増大に努めた 生産が不足したため、山口又七、石井種五郎、大串音松等が新しい窯を築き岩永岩九郎、副島利三郎、大渡権蔵等が商売の方で活躍した
		市町村制が施行され町村合併が行われる 西嬉野村（下宿村、不動山村が合併）・東嬉野村（岩屋川内村、下野村、吉田村の内下吉田が合併）・吉田村の三村となる（嬉野温泉観光協会編）
1889	明治22	町村制施行により「吉田村」が発足し、同年下吉田が東嬉野村に分村した。 『藤津郡村誌』（佐賀県大百科事典佐賀新聞社） 吉田村となり、村役場を中通りに設置した。初代村長：井手平六（嬉野町史） 「後、村役場を両岩區に移転し」とある（嬉野吉田郷土誌）
1891	明治24	両岩駐在所設置→　昭和11年　両岩内で移転　（嬉野町史）
1894	明治27	御衣黄桜は、吉田出身の兵士が中国から引き揚げの際に苗木を持ち帰ったと伝えられる 吉田村消防組頭により消防組が運営される（全9部）（嬉野町史）
1895	明治28	尋常吉田小学校は、吉田尋常高等小学校と改称（嬉野町史）
1896	明治29	吉田焼の窯元大串音松、朝鮮向け製品製造を始める（嬉野温泉観光協会編）

1898	明治31	静岡製への取り組みとして、春日薬師堂にて区民が共同して伸茶製造を行う（嬉野町史） 皿屋駐在所設置→〈明治39年　中通りへ移転〉→〈明治43年　皿屋へ移転〉
1900	明治33	日清戦争（1894～1895）の時、清国、威海衛において捕獲した清国軍艦鎮南の艦号文字を、佐世保鎮守府より葦筒神社に奉献される（嬉野町史）
1901	明治34	吉田村「吉田酒造会社」は、銘酒大盛醸造、佐賀長崎へ移出。昭和初期まで製造（嬉野町史）
1902	明治35	吉田尋常高等小学校に吉田農業補修学校を付設・開校（嬉野町史）
1903	明治36	春日にて静岡より技師招聘、製茶講習会開催（嬉野町史）
1904	明治37	春日分校は、独立して春日尋常小学校となるが、明治41年合併して春日分教場となる
1905	明治38	高倉稲荷神社の鳥居建立（皿屋窯元の大串音松氏寄進）
1906	明治39	東郷平八郎、瓜生外吉、上村彦之丞、斉藤実等の将軍が来浴 東郷元帥による「姑射（コヤ）山」の揮毫が吉田大定寺にあり（嬉野町史）
1911	明治44	吉田皿山で初めて錦絵付が成功する 笠原平五郎と副島茂八の研究による　どんぶりや菓子碗等が作られた 両岩区の耕地整理始まる　「荒平堤」の構築始まる 吉田村在郷軍人会が創立される（嬉野町史）
1912	大正元	吉田村村有原野、160町歩に植林を行い村の基本財産とした（嬉野町史）
1915	大正4	嬉野塩田間に電車開通　単線で延長6マイル、客車4両、貨車2両で運転　昭和7年廃止
1916	大正5	吉田村青年会が組織される（男女別組織）（嬉野町史）（嬉野・吉田郷土誌）
1920	大正9	宮崎徳一取締役頭取となり、嬉野銀行嬉野支店設置（同年吉田支店設置）（藤津郡勢大観） 吉田村資産家、大渡熊次氏は、設立に貢献し2代目取締役頭取となった 第1回国勢調査が行われ、吉田出張所前に記念碑が建てられる（嬉野町史） 吉田通俗図書館設置（嬉野町史）
1923	大正12	窯元5名が、美濃製陶所を視察し、石炭窯に改めたが第一次世界大戦後は不況となり、国内向け製品に転換した（嬉野町史）
1924	大正13	志田、吉田共にこの頃から登り窯から石炭を燃料とする倒焔式単窯に移行 吉田村藁細工組合設立：「叺ｶﾏｽ、縄」作り　陶磁器荷造り用として製造（嬉野町史） 吉田村竹細工組合設立：「ザル、めご、繭かご」作り　赤瀬・岩ノ下に作業場（嬉野町史）
1926	大正15	春日では、春日製茶組合を組織し、4500円をもって製茶機械設置、講習会開催（嬉野町史） 吉田公園　戦没者慰霊碑建立
1927	昭和2	吉田村皿山、大旋風被害甚大（嬉野町史） この頃、吉田村役場落成
1928	昭和3	吉田村の木炭産額44，800貫12，000円、東嬉野村6，980円
1929	昭和4	この年の嬉野の酒造業は2社　大盛（吉田酒造）222石4斗3升5合
1941	昭和16	嬉野町森林組合・吉田村森林組合設立（嬉野町史） 吉田村国民学校ができる（嬉野町史）
戦時中		窯焼は企業合併により「吉田製陶株式会社」を設立、軍の監督工場となる（嬉野町史）
1946	昭和21	西川内「水頭」（25戸）、皿屋「祇園」（18戸）への開拓事業により入植が始まる
1947	昭和22	吉田村立吉田小学校に改称、新制吉田村立吉田中学校開校（嬉野町史） 吉田村青年団結成発足 佐賀県連合婦人会結成（吉田地区も藤津郡地域婦人連絡協議会として活動した）
1948	昭和23	吉田村農業協同組合設立 吉田公民館新築落成（吉田村役場西側に設置）・・・青年団が中心となって計画・建設
1949	昭和24	この頃吉田皿屋では「錦絵窯」の新設拡張が行われる 肥前焼窯元協同組合が設立される
1950	昭和25	永寿寺の木造不動明王及び二童子像が国の重要文化財となる 吉田小学校水頭分校が開設される
1952	昭和27	春日地区浮立、大野を越えて鹿島から有明海のお島さん参りを行う 祐徳バス、吉田経由で鹿島と嬉野間の運行が開始される
1953	昭和28	吉田村立吉田中学校新校舎落成式
1955	昭和30	28年の「町村合併促進法」により全国で合併が進み、嬉野町と吉田村も合併し、嬉野町となる（人口19,527人）（嬉野町史） 吉田村役場は、吉田支所となり「庶務係」「戸籍係」が置かれた 小・中学校は「吉田村立」から「嬉野町立吉田小学校」「嬉野町立吉田中学校」となる 祐徳バス、大野原線、下吉田線開通
1956	昭和31	塩田町、久間村、五町田村が合併して塩田町（人口17，635人）となる 大字吉田の一部（殿ノ木庭）が五町田村へ分村

1957	昭和32	祐徳バス春日線開通（嬉野町史）
1960	昭和35	両岩の小浮立が県重要無形民俗文化財に指定される
1961	昭和36	皿屋簡易水道給水開始　赤仁田浄水場完成
1961	昭和36	分町問題により、南大草野から吉田中学校へ生徒の一時編入があった
1965	昭和40	吉田小・中学校用としてプール完成
1966	昭和41	吉田小学校新校舎落成
1967	昭和42	嬉野学校給食センター完成（完全給食開始） 吉田保育所開設（嬉野町史）
1968	昭和43	未曾有の豪雪により大きな被害がでる（山間地　220cm以上）
1969	昭和44	吉田小学校水頭分校閉校（昭和25年開校～昭和44年閉校）
1970	昭和45	坊主原（西川内・西吉田地区）と陣野地区（上岩屋）がパイロット事業の茶畑造成（嬉野町史）
1971	昭和46	吉田中学校の体育館竣工
1975	昭和50	皿屋保育園開園 吉田全地区、農業構造改善事業として水田整備と近代化、茶生産、ブロイラー等が推進される
1977	昭和52	広川原キャンプ場開設
1978	昭和53	春日簡易水道給水開始　吉田地区ライスセンター竣工 嬉野町民憲章、町花「ふじ」、町木「茶」が制定される
1979	昭和54	嬉野町史発行　多良岳林道竣工
1984	昭和59	吉田公民館新築落成
1985	昭和60	吉田地区簡易水道給水開始
1987	昭和62	皿屋祇園地区から赤絵陶片が発見され、吉田2号窯跡の発掘調査につながる
1988	昭和63	吉田2号窯跡の発掘調査が実施される（佐賀県立九州陶磁文化館） 嬉野町は、平成4年に実施（嬉野町の古陶磁窯跡）
1989	平成元	両岩神社の木造の神像と仏像5躯、県重要文化財となる 吉田1号窯跡の発掘調査が実施される（佐賀県立九州陶磁文化館）
1990	平成2	春日大明神の大銀杏　嬉野市の天然記念物となる
1992	平成4	吉田中学校新築落成
1994	平成6	納戸料区森にあった江戸期の窯跡「森遺跡」の発掘調査が行われる
1995	平成7	肥前吉田焼窯元会館が落成 吉田小学校体育館落成 東吉田区宇留戸の「本木権現堂」が改修される 享保13年（1728）の権現像、「肥前狛犬」2対（嬉野市文化財指定）が安置されている
1996	平成8	「肥前焼窯元協同組合」は、「肥前吉田焼窯元協同組合」と改名される
1998	平成10	西川内地区水道給水開始
2000	平成12	吉田保育所と皿屋保育園が閉所となり、吉田保育園が開園
2001	平成13	吉田小学校校舎改築落成
		横竹ダム完成
2002	平成14	吉田小学校春日分校が閉校となる（明治8年の開校から127年間） 鳥越トンネルとバイパス開通
2003	平成15	吉田まんぞく館の運営が始まる（名称は、東吉田区下万属地区に建てられたことによる）
2004	平成16	嬉野中、吉田中学校二学期制試行
2006	平成18	嬉野町と塩田町が合併し嬉野市誕生　人口30，395人　初代市長谷口太一郎 吉田小学校と吉田中学校は、町立から市立へと校名変更が行われた。
2009	平成21	吉田地区地域コミュニティ運営協議会が結成される 百年桜が嬉野市指定天然記念物となる
2013	平成25	無料巡回車「ヨッシー号」運用開始
2018	平成30	百年桜まつり、ライトアップを開始
2019	令和元	2019年5月1日、令和天皇が即位され、平成から令和へ改元が行われた

11 まとめにかえて

「郷土愛を育む」 ―過去から未来へ繋ぐ―

本誌作成のそもそもの目的は、吉田の未来を担う子どもたちに“ふるさと”を想う心、「郷土愛」を育むことでした。子どもたちが吉田の過去の歴史を知ると共に人々の願いや思いに触れることで、それをエネルギーにして、未来を力強く生きる一助にしてほしいという願いがあります。

しかし、知識の詰め込みだけでは目的の達成はできません。

吉田小学校では、学年縦割りのグループで６年生が１年生と手をつなぎ、吉田地区内のオリエンテーリング（歴史探訪）が実施されました。子どもたちは、「吉田おうえんたい」の方々に各名所で説明をしていただきながら、人との交流や「郷土愛の育成」を図った体験活動を楽しみました。素直で明るい子ども、郷土の歴史を知り郷土愛に満ちた子どもに育つよう切に期待します。

交流と体験で、郷土愛に満ちた子どもたちに

６年生が１年生に説明をしながら行きました。

永寿寺では和尚さんのお話もありました。

両岩運動広場で校歌を歌い昼食をとりました。

両岩神社では鎌倉時代のお話を聞きました。

孕地蔵では悲しいお話も聞きました。

「孕銀杏」がなる銀杏は大きな木でした。

12 編集後記

○ お地蔵さんのお祭りは毎年あっているが、その由来は知らない。
○ 近くに祠があるが、何の祠か分からない。
○ 語り継がれて来た逸話があるらしいが、詳しくは知らない。
○ ふるさとの歴史を知ることは郷土愛に繋がると思うが、資料はどこにあるのか分からない。

これらの素朴な疑問を感じていた者同士が、集い話し合う中で、「後世に先人の功績や史跡の説明を繋いでいくこと、住民はもとより子ども達に（郷土愛）を育てることのきっかけにしたい」という思いと目的から、『歴史探訪　ふるさと吉田』の編集が始まりました。

平成 28 年５月９日に第１回編集委員会を開催し、八谷茂樹編集委員長のもと編集会議、実地踏査を重ねて来ました。本誌作成に当たっては、歴史そのものを研究するのではなく、『嬉野町史』等の記述をもとに、地区の方々の話を聞き、実際に現地で確認してまとめていきました。なお、第１号から第 10 号に加えて、各地区の内容･情報の再収集、写真、有志諸氏の寄稿文、年表等をまとめ総集編としました。

最後になりますが、民俗学に造詣の深い金子信二先生（佐賀市）や嬉野市「市史編纂室」の皆様からのご指導をいただき、そして、各地区の多くの方々にご理解とご協力を得て総集編の発刊に至りましたこと、改めて皆様に厚くお礼申し上げます。

◎「歴史探訪 ふるさと吉田」編集委員会委員の構成

編集委員長	八谷　茂樹
編 集 委 員	野副　法継　　福田　義紀　　森山　宗治
監　　修	金子　信二（嬉野市文化財保護審議会委員）
後　　援	吉田地区地域コミュニティ運営協議会

編集委員長、故八谷茂樹氏は、本誌完成間近の令和３年４月 26 日、発刊を見ずして、83 歳で永眠されました。ここに謹んで先生のご冥福をお祈り致します。

令和３年７月

『歴史探訪　ふるさと吉田』編集委員会

児童作品
吉田小学校マスコット
ちゃわねこ

〈ご紹介〉 児童が、吉田小学校が元気で活気ある学校になるようにと考えた“ゆるキャラ”の「ちゃわねこ」です。小学校のマスコットとして活躍しています。歌と踊りもあり、みんなの人気者だそうです。吉田の未来を支える子どもたちにより吉田地区が発展していくよう願ってご紹介しました。
※「ちゃわねこ」には、吉田のお茶、吉田焼、百年桜が織り込まれています。

13 参考文献

- 嬉野町史（嬉野町）
- 鹿島市史（鹿島市）
- 嬉野吉田郷土誌（佐賀縣嬉野部教育會）
- 嬉野略史（昭和 42 年　明治百年記念）
- 吉田公民館沿革史
- 佐賀県公民館史
- 塩田昔話
- 史跡めぐり吉田地区を歩く(郷土史研究会)
- 嬉野町吉田２号窯(佐賀県九州陶磁文化館)
- 嬉野町の古陶磁窯跡（嬉野町教育委員会）
- 吉田小学校沿革誌
- 春日分校沿革誌
- 水頭分校足かけ 20 年の歩み
- 新編大村市史第三巻
- 小城の歴史９号（昭和 45 年）
- 佐賀の戦国人名誌（佐賀新聞社）
- 元禄肥前国絵図（鍋島報效会所蔵）
- 日本歴史地名大系（平凡社）
- 神社の名前の謎（河出書房）
- 能古見小学校沿革誌
- 峰区区長引継資料
- 鹿島市史　真実の記録（田中保善）
- 嬉野の民話（嬉野町教育委員会）
- 嬉野吉田郷土讀本（藤津郡嬉野部教育會）
- 吉田小学校　創立 80 周年記念誌
- 嬉野市歴史観光ｶﾞｲﾄﾞ（嬉野温泉観光協会）
- 鹿島藤津戦国十八家の武辺（川上茂治）
- 塩田町史（塩田町）
- 太良町史（太良町）
- 嬉野町のあゆみ
- 旧「町報うれしの」（郷土の文化財シリーズ）
- 肥前陶磁史考（中島浩氣）
- 郡勢大観（藤津郡役所編）
- 塩田むかしむかし
- 嬉野町吉田１号窯跡（佐賀県九州陶磁文化館）
- 東洋陶磁第 20・21 号（鈴田由紀夫）
- 嬉野市総合年表（嬉野温泉観光協会）
- 吉田中学校沿革誌
- 春日分校閉校記念誌「もみの木」
- 大村市史「九葉実録」（大村市）
- 伝えたい蓮池（佐賀市立蓮池公民館）
- 佐賀県大百科事典（佐賀新聞社）
- 佐賀県の中近世城館（佐賀県教育委員会）
- 佐賀県開拓農業三十年史
- 角川日本地名大辞典（角川文庫）
- 日本の仏像 200（西東社）
- 佐賀民俗学　第 18 号（平成 13 年）
- 神代小路（長崎県国見町教育委員会）
- 春日の文献より見た今昔物語（小川関三）
- 嬉野町石塔調査報告（2005）
- 佐賀県の文化財（佐賀県教育委員会）
- 佐賀県遺跡地図（佐賀県教育委員会 1983）
- 佐賀県遺跡地図（佐賀県教育委員会 2010）
- 古枝のはなし（峰松正輝）

吉田地区情報誌
「ふるさと吉田」 総集編
令和３年 ７月31日

発行　吉田地区地域コミュニティ運営協議会
佐賀県嬉野市嬉野町大字吉田丙２７７０番地－５
電話　0954-43-9380

印刷　未来工房
佐賀県嬉野市嬉野町大字下宿乙２２８４－４番地
電話　0954-20-4188